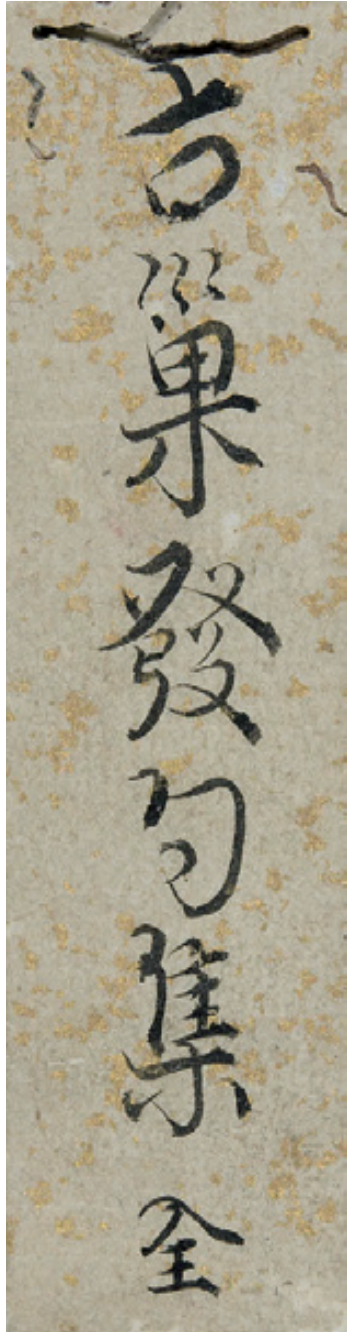


野風呂記念館本『古巢発句集』影印 翻刻と解題

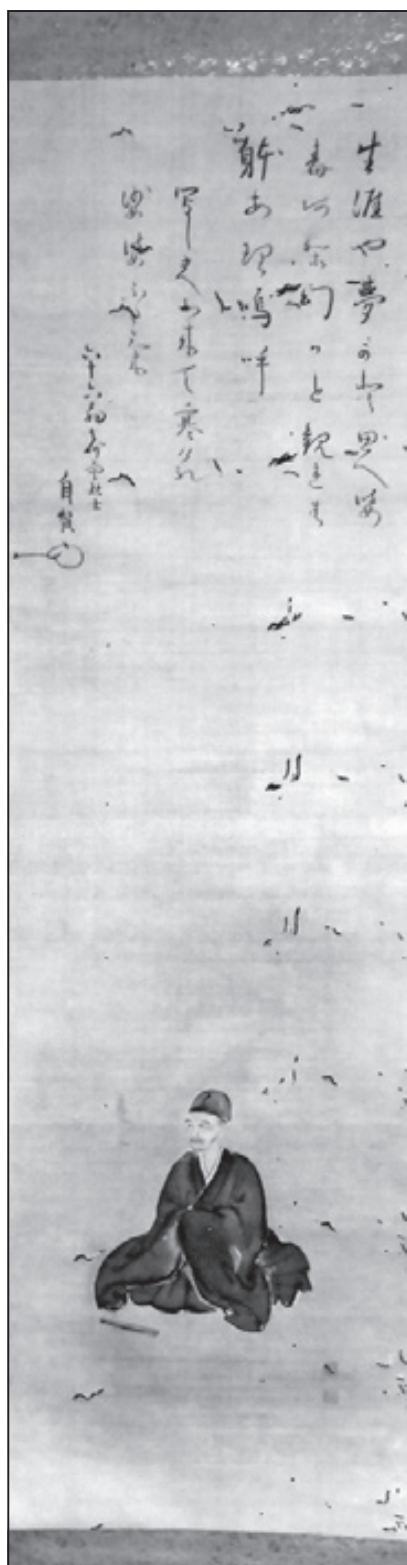
——付 西尾市岩瀬文庫本『古巢発句集』校異——



竹内千代子 編・著

野風呂記念館本『古巢発句集』影印 翻刻と解題

——付 西尾市岩瀬文庫本『古巢発句集』校異——



個人蔵

一 生涯や夢かと思へば

毒あり 幻かと観れば

体あり 嗚呼

写しさへ出来て寒けれ

娑婆ふるえ来

六十六翁去何空居士自賛（花押）

目次

口絵 古巢園去何自賛去何肖像

『古巢発句集』解題

野風呂記念館本『古巢発句集』影印と翻刻

——付 西尾市岩瀬文庫本『古巢発句集』校異——

「慈母妙玉尼終焉記」（岩瀬本『古巢発句集』）

俳号等人名索引

初句索引

付記

2

11

103

106

108

116

『古巢発句集』 解題

古巢園（渡辺）去何の発句集は、二冊現存している。一冊は京都の野風呂記念館蔵本『古巢発句集』（以下、野風呂本）、他は西尾市岩瀬文庫蔵本『古巢発句集』（以下、岩瀬本）である。何れも去何の自筆本で、野風呂本が清書本、岩瀬本がそれに記す所の「中清書本」である。詳細な考証については、本稿五、六頁に後述する。本稿では、清書本である野風呂本を影印と翻刻で紹介し、岩瀬本によって校異を行う。

去何は、渡辺氏。通称、甚介、小惣（『五升庵上人年譜便覧』^{注1}以下、『年譜』）。諱、保原（『年譜』）、栄（『年譜』）、朗。字、明

夫（角川俳文学大辞典）、一澈。別号、蓮池堂（『年譜』）、古巢園、如意庵。法号、禪定院虚庵宗空居士。宝暦元（一七五一）年二月五日生、寛延三（一七五〇）年午二月一七日とも（『年譜』）。文化一三（一八一六）年五月三日（『古巢堂遺稿』^{注2}の墓碑草稿には二日とするが、同序文には三日とする）卒、享年六六。安永七（一七七八）年、近江国速水（滋賀県東浅井郡）の村長。俳諧作者。蝶夢門。安永八年に入門。蝶夢の編著の版下筆者で、旅にも従った。天明二（一七八二）年八月、但馬国の天の橋立、城之崎に同行した記念集が『湯あみの日記』（所蔵未詳、『蝶夢全集』）である。また、天明四（一七八四）年三月、摂津、河内へ蝶夢、伴蒿蹊と同行した記念集が『道ゆきぶり』である。蝶夢一三回忌集『ひとよふね』^{注3}編。国学は伴蒿蹊に師事する。父は、一滴翁。去何が一四歳の時、明和元（一七六四）年二月二十九日に没する。母は、八木氏の女、妙玉尼、寛政三（一七九二）年一月（一〇月とも）三日卒。子は男四人、輝、昶、栄、霖がいる。次男の昶は、天明元（一七八一）年四月一日生、天保三（一八三二）年八月一八日卒、享年五二。通称、圭輔。膳所藩医。旭山、蘅園と号し漢詩を能くする。四男の霖は、天明六（一七八六）年一〇月二日生。

（以上は、『古巢堂遺稿』の墓碑草稿、錫馬著『五升庵道統系譜』^{注3}、錫馬著『五升庵上人年譜便覧』、和泉書院刊『蝶夢全集』、角川『俳文学大辞典』田中道雄稿などを参照した。）

次に、墓碑草稿（『古巢堂遺稿』）をあげておく。

渡邊虛菴先生之墓

先考諱朗字一澈號去何一號古巢
姓渡邊氏其先撰津人內舍人源綱
之裔也建長中有右衛門督直者從
宗尊親王適鎌倉中親王殿
京褒直勤勞賜淡海速水庄於是為
淡海人
年十四喪父竭力事母鄉推其孝少

渡邊虛庵先生之墓

先考 諱朗 字一澈 号去何 一号古巢
姓渡邊氏 其先撰津人內舍人源綱
之裔也 建長中有右衛門督直者從
宗尊親王適鎌倉 中親王殿
京褒直勤勞 賜淡海速水庄 於是為
淡海人
年十四喪父 竭力事母鄉推其孝少

好国学最善俳歌師蝶夢上人及伴蒿
蹊翁每以嘯咏為事名振一時從遊者頗
多年五十有五薙髮逃禪參漢三和尚
更号虚庵空居士文化十三年五月二日
病卒距生宝曆元年二月五日享年六十
有六葬村西先塋側所著老慰草二
卷隨筆二卷配源氏子男四人長輝嗣
家次昶以医仕膳所候次榮遺命折產
次霖為僧住犬上之元呂庵輝攀慕号叫
痛貫心骨昊天罔極嗚呼悲哉孤子
輝從血謹建

好国学最善俳歌 師蝶夢上人及伴蒿
蹊翁 每以嘯咏為事名振一時從遊者頗
多 年五十有五薙髮 逃禪 參漢三和尚
更号虚庵空居士 文化十三年五月二日
病卒 距生宝曆元年二月五日 享年六十
有六 葬村西先塋側 所著老慰草二
卷 隨筆二卷 配源氏 子男四人 長輝嗣
家 次昶以医仕膳所候 次榮遺命折產
次霖為僧住犬上元呂庵 輝攀慕号叫
痛貫心骨昊天罔極 嗚呼悲哉 孤子
輝從血謹建

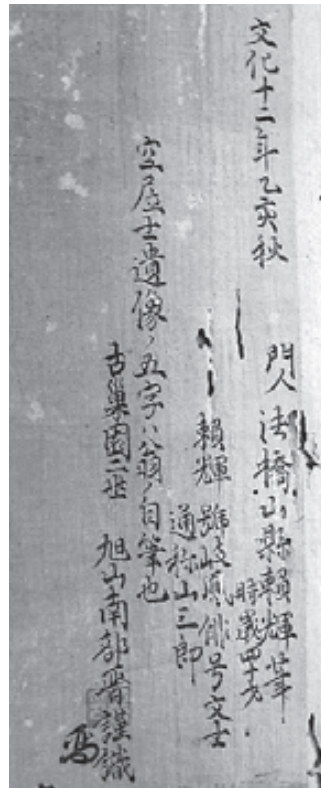
次に、口絵にあげた去何の肖像について記す。個人蔵。軸一卷。賛は、

生涯や夢かと思へは毒あり 幻かと観れば躰あり 嗚呼

写しさへ出来て寒けれ娑婆ふるえ来

六十六翁去何空居士 自賛（花押）

軸の裏に、「空居士遺像」、「長浜人 法橋山縣岐鳳筆」。蔵所印は「朝日乃や」「南部家蔵」。また、次のようにも記す。左図参照。



文化十二年乙亥秋 門人 法橋山縣頼輝筆

時歳四十才

頼輝 号岐鳳俳号文士

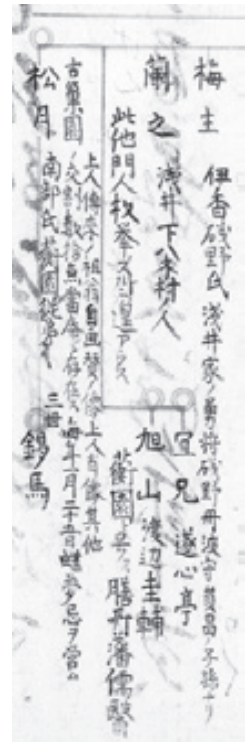
通称山三郎

空居士遺像ノ五字ハ翁ノ自筆也

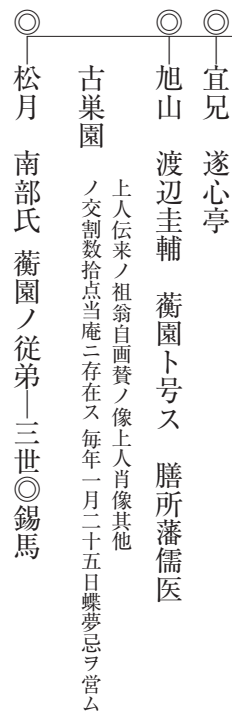
古巢園二世 旭山南部晋謹識（花押）（印）

これに拠れば、去何は、没する前年に肖像を描かせ、遺していることになる。去何は自画像以外にも渡辺家の先祖の肖像を岐鳳に描かせていたようである。その一部は「南部晋氏所蔵文書」に残されている（京都大学蔵同文書にて調査）。

最後に記す「古巢園二世 旭山南部晋」は錫馬であるが、嘉永五（一八五二）年二月一七日の生れである。^{注(4)}従って、文化一二年に署名することは有り得ない。最後の一行は、後の加筆である。錫馬は、著書『五升庵道統系譜』に「三世」とするが、これが妥当であろう。左図参照。ただし、二世は未詳である。去何の長子の輝で、同書にある「亘兄 遂心亭」を考えるのが適当であろう。なお、原本の◎は朱である。



(蝶夢)(去何)



また、去何の資料は、野風呂本『古巢発句集』の識語などによれば、最初は息子達に引継がれたが、渡辺家から姻戚関係にあたる南部家に引継がれた。右図の南部松月が「蘅園ノ従弟」とあるのがそれである。蘅園は、去何の次男圭輔（昶）、旭山とも号した。ただし、去何以降は、俳諧作者として特に活動する子息は、管見の限りでは確認できない。

一 書誌

まず、野風呂本について記す。

縦一三・一糶、横一九・一糶、横本。写本、三卷一冊（上・下・拾遺卷）。墨付四五丁、五八二句所収（上・399、下・113、拾遺・70）。外題「古巢発句集全」。内題「古巢発句集 上（下）」。序文「文化三年秋良夜 古巢園にて 去何書（花押）」。

成立は、没年の文化十三年五月以前。なお、渡辺昶筆の付記に、
此小冊子先考虚庵君所手抄 今以贈弟栄云 文化丁丑小春 渡辺昶書于江戸鈴菴虫魚樓上
とある。本文一〇一頁（裏表紙見返し）参照。「先考虚庵」は、亡父、去何。「弟栄」は、昶の弟、去何の三男。「文化丁丑小春」は、文化一四年一〇月。「渡辺昶」は、去何の次男。「江戸鈴菴虫魚樓」は、江戸住みの昶の庵号である。

次に、岩瀬本について記す。

縦二六・三糶、横一九・〇糶、大本。写本、三卷一冊（上・下・拾遺卷）。墨付八二丁、七八九句（上・539、下・142、拾遺・108）所収。外題Ⅰ「古巢発句集 拾遺付 完」。外題Ⅱ「古巢発句集 上下巻 拾遺付 全 中清書」。内題「古巢発句集 上（下）」。序文「文化三年秋良夜 古巢堂にて 去何書（花押）」。

の影にて 去何悲歎書」とある）の一文を付す。本稿の一〇三〜一〇五頁に影印、翻刻する。請求番号「8166/69/16」。

岩瀬本の外題Ⅱにある「中清書本」によって、岩瀬本を中清書本（清書前）とし、野風呂本を清書本とする。岩瀬本から野風呂本の作成について、上巻は、五四〇句から三九九句に厳選する。一一句が新出句であるが、四季の配列など大きな変更は少ない。下巻、拾遺も、それぞれ一四二句から一一四句、一〇八句から七〇句に厳選するが、もともと四季に依らない配列であったため異同が多く、詞書の推敲も多い。また、新作句も多い。清書年は未詳ながらそれに当って、推敲、創作の意欲は衰えていなかったと推察される。

二 去何の筆跡

去何の筆跡を考察する。考察にあたっては、次の資料を用いる。

一、野風呂本『古巢発句集』

二、岩瀬本『古巢発句集』

三、小林孔本 去何自筆『四季物語』

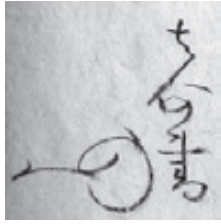
四、個人蔵 去何肖像軸

○ 去何

【野風呂本『古巢発句集』】

【岩瀬本『古巢発句集』】

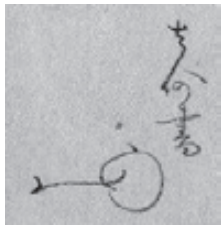
序



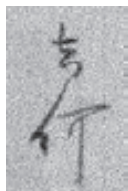
一〇才



序



八一才



【去何自筆『四季物語』】



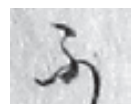
【個人蔵 去何肖像軸】



○
ふ

【野風呂本『古巢発句集』】

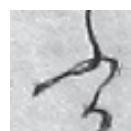
一才



二才

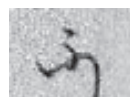


二ウ



【岩瀬本『古巢発句集』】

一才



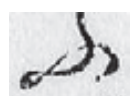
一ウ



八才



九ウ

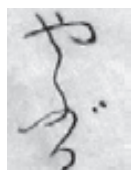


八一才

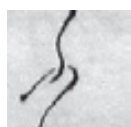
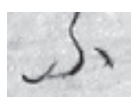
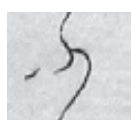
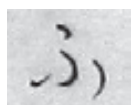


【去何自筆『四季物語』】

一才



一ウ

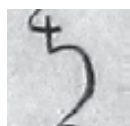


【個人蔵 去何肖像軸】

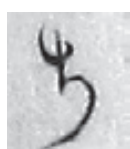
○
ち

【野風呂本『古巢発句集』】

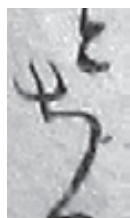
序



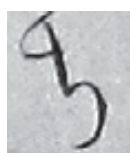
一才



一ウ



二ウ



【岩瀬本『古巢発句集』】

序



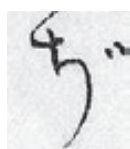
一才



一ウ



八才

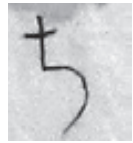
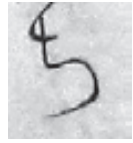
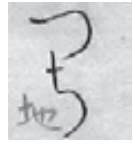


八〇ウ

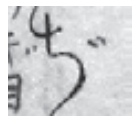
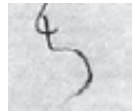


【去何自筆『四季物語』】

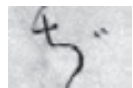
一才



一ウ



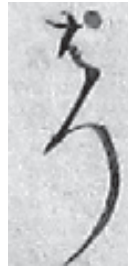
二才



○
つ

【野風呂本『古巢発句集』】

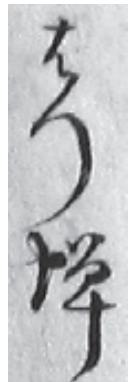
二ウ



三才



七ウ



【岩瀬本『古巢発句集』】

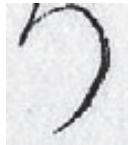
一才



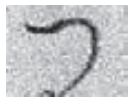
三才



八才

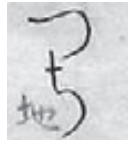


八〇ウ

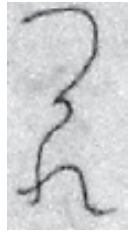


【去何自筆『四季物語』】

一才



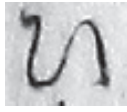
一〇ウ



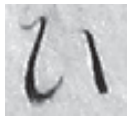
○
ひ

【野風呂本『古巢発句集』】

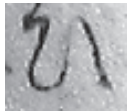
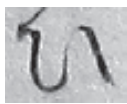
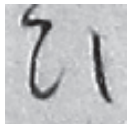
一才



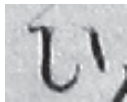
二才



二ウ



三才

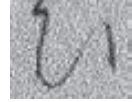


【岩瀬本『古巢発句集』】

序オ



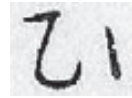
一オ



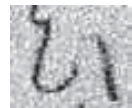
一ウ



八オ

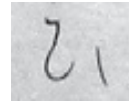


八〇ウ

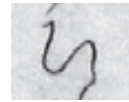
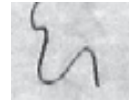
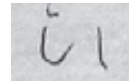
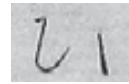
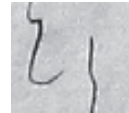


【去何自筆『四季物語』】

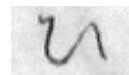
一オ



一ウ

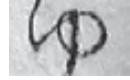


二オ

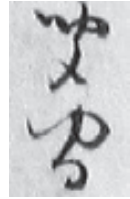


○
ゆ

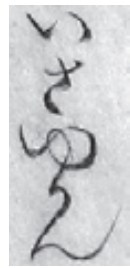
【野風呂本『古巢発句集』】



一〇オ



二五オ

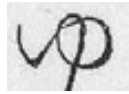


三二ウ

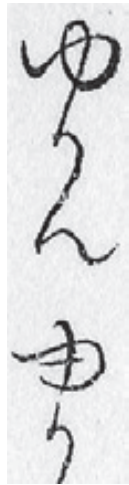


【岩瀬本『古巢発句集』】

八オ



九ウ



八一オ

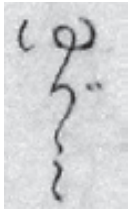


【去何自筆『四季物語』】

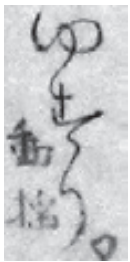
二オ



五オ



一〇ウ



去何の署名は、「去」は小さく、二筆で書く。「何」はそれより大きく、一画目と三画目とで「人」の字になるように書き、三画目が右下がりになるのが特徴である。なお、花押は「何」の崩したものであろう。

次に、特徴的な「ふ」「ち」「つ」「ひ」「ゆ」を検討する。

「ふ」は、軽やかな一筆書きで、よどみのない筆運びが特徴である。

「ち」と「つ」は、丸くなる部分が、角ばって下に流れるのが特徴である

「ひ」は、「U」の部分の間が広がって「V」に近くなり、終画は右下に真直ぐに流れるのが特徴である。

「ゆ」は、一筆で書き、終画の縦線が短く丸まる。特に横線からあまり出ないのが特徴である。

去何の筆跡は、全体的に、小さ目の文字が、大人しく並んでいるという印象である。字形の乱れが少なく、淡々と書き記され、真摯な人となりが感じられる。

右の考察から、野風呂本と岩瀬本のそれぞれの『古巢発句集』は、ともに去何自筆であるといえる。

注

- (1) 明治大学蔵。写本一冊。墨付一九丁。草稿本。請求記号「092.5/74//H」。錫馬著。錫馬は、南部晋、別号、旭山、古巢園。嘉永五年二月一七日生。明治三年七月二日起草、同三五年までの記載を収める。

外題「五升庵上人年譜便覧 草稿本 全」(旭山編)。

内題「江北 錫馬纂輯 五升庵上人年譜便覧 古巢園蔵 草稿」。

- (2) 西尾市岩瀬文庫蔵。写本一冊。請求記号「863/77/40」。去何著。文化一二年三月、去何自序。去何没後の文化一三年一月、次男の昶序。外題Ⅰ「古巢堂遺稿 完」、外題Ⅱ「古巢堂遺稿 上下 全」。

- (3) 明治大学蔵。写本一冊。墨付一三丁。控副本。請求記号「092.4/48/H」。錫馬著『五升庵上人年譜便覧』と同時期の明治三〇年代の成立と推定。

外題Ⅰ「蕉門正流五升庵道統系譜」(後題)。外題Ⅱ「五升庵道統系譜 全 附古巢翁系」。外題Ⅲ「蕉門俳家 五升庵道統系譜 稿本 全 附古巢翁系統」。

扉題「古巢園錫馬纂輯 無名庵魯人校訂 五升庵道統系譜 湖南粟津文庫蔵」。

内題「蕉門正流 五升庵道統系譜 草案 付自家系統／近江速水古巢園錫馬纂輯／同粟津 無名庵魯人校訂／同大津 柳影居静人校字／古巢園控副本」。

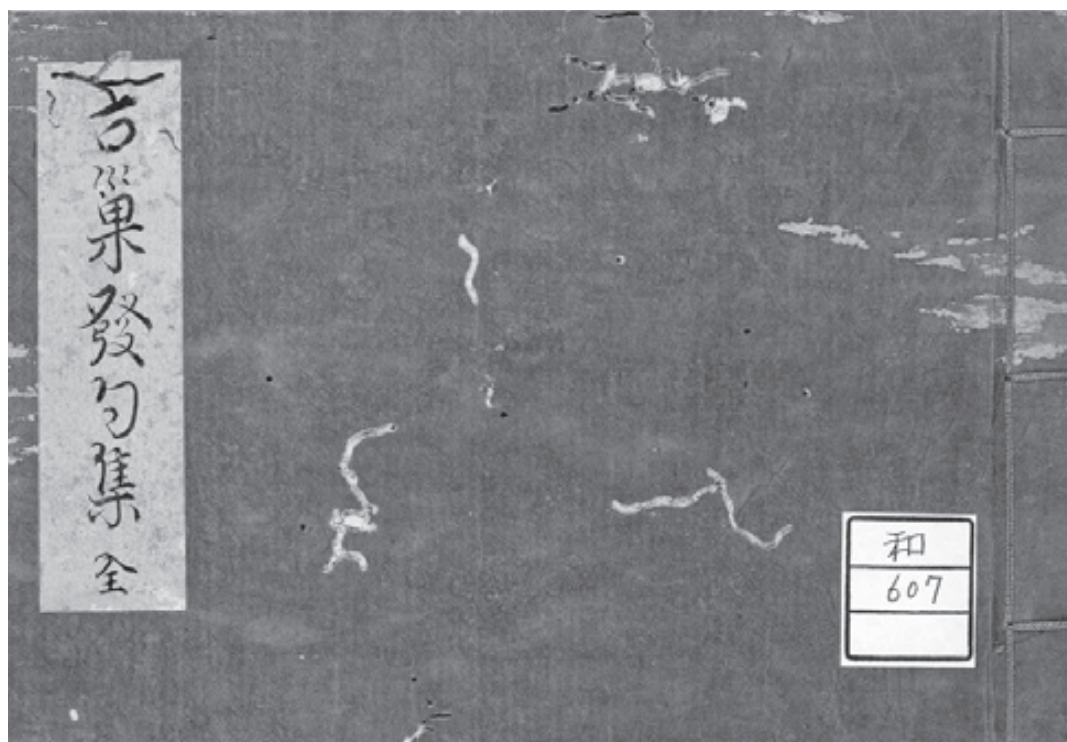
- (4) 『五升庵上人年譜便覧』による。注(1)に同じ。

野風呂記念館本『古巢発句集』影印翻刻

——付西尾市岩瀬文庫本『古巢発句集』校異——

凡例

- 一 本稿は、江戸後期の俳諧師古巢園去何の句稿『古巢発句集』を翻刻したものである。同書は、野風呂記念館蔵本（以下、野風呂本とする）である。また、西尾市岩瀬文庫蔵本『古巢発句集』（以下、岩瀬本とする）との校異を行う。
 - 一 岩瀬本との校異は、野風呂本の該当箇所に傍点を付し、下欄に＊を付して記述する。字体、表記等の異同については、同句形と見なし特記しない。また、岩瀬本にのみある句についても特記しない。
 - 一 句番号を私に付す。句番号に○を付したものは、岩瀬本にも収録されている句を示す。
 - 一 丁移りは、各丁の最後に丁数を付す。丁の表は「オ」、裏は「ウ」の略号で示す。序文は、「序 一オ」などとし、本文とは区別する。
 - 一 字体は、原則として通行の字体に改める。
 - 一 踊り字は原則として原本の表記に従うが、次のように統一した。
-
- 一 平仮名・同濁点 々・ゞ
 - 一 一字の繰返し 々
 - 一 二字以上の繰返し く・ぐ
 - 一 振り仮名は、本文にある表記のままを記す。
 - 一 濁点・句読点を適宜私に付す。
 - 一 改行は、原則として原本のとおりとする。
 - 一 詞書は、統一して句より二字下げて記す。
 - 一 墨消し・見せ消し等の訂正は、原則として原本のとおりとする。



古巢発句集 全・

〔白紙〕

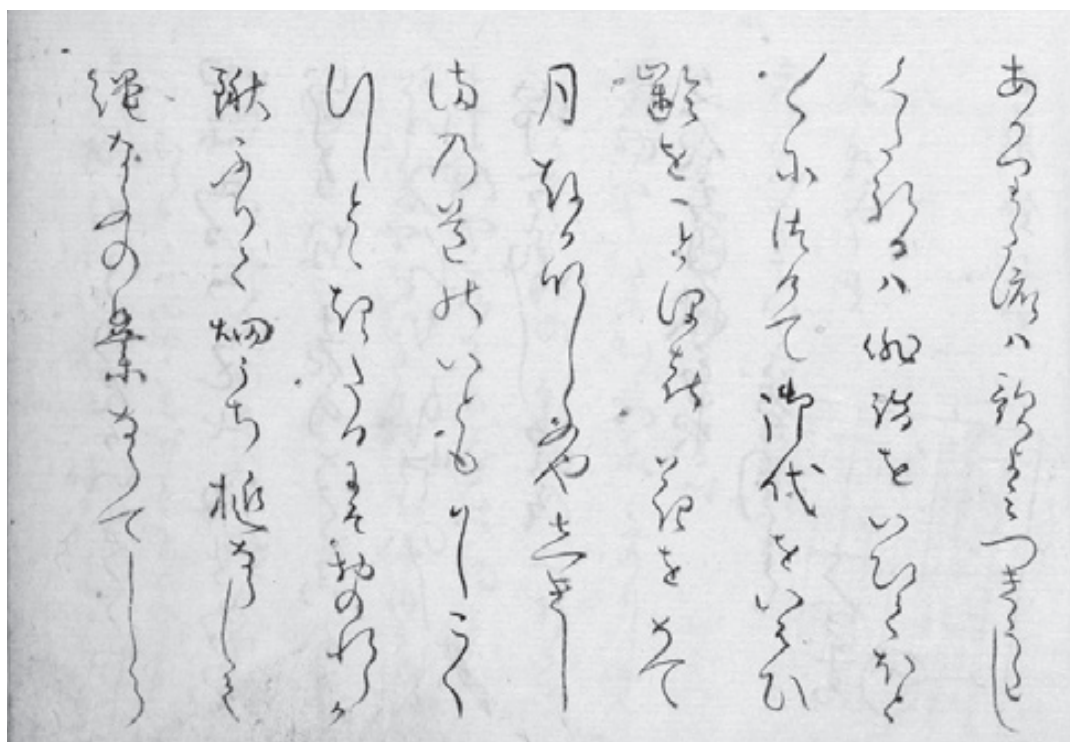
〔遊紙二枚〕

（表紙）

* 〈古巢発句集 拾遺付
完〉

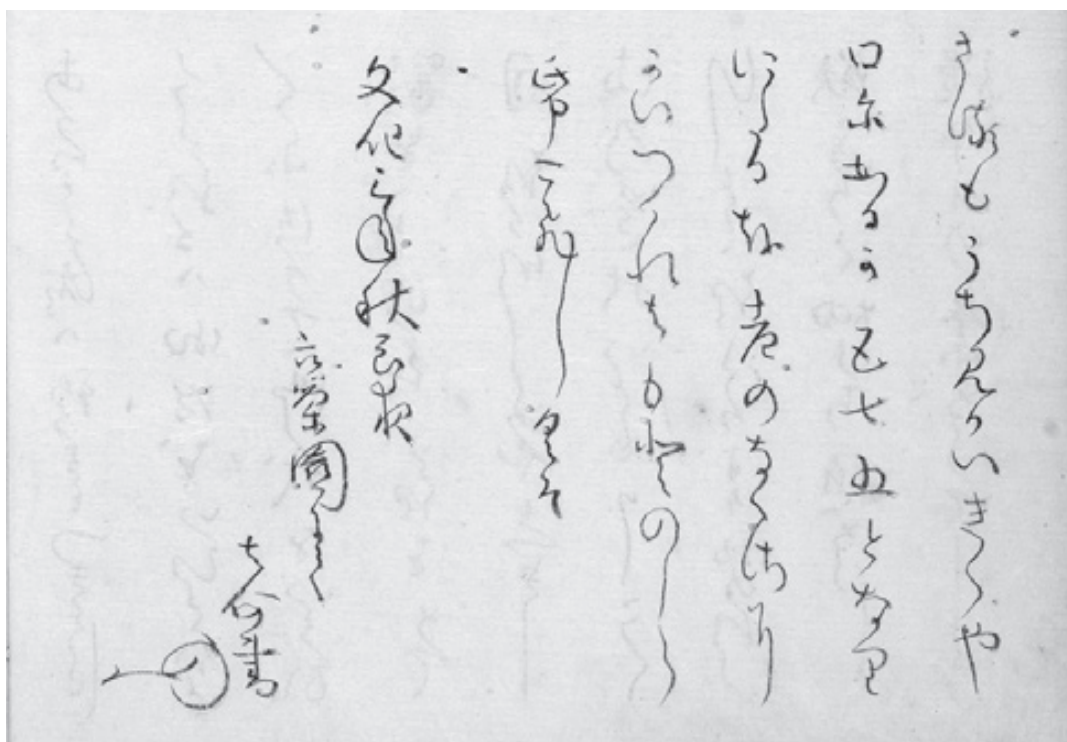
（表紙見返し）

* 〈扉題「古巢発句集 上
下巻 拾遺付 全 中清
書」〉



あがりたるは歌よみつぐだし
 くだれるは 俳諧をいひてほど
 くにつけて御代をいはひ
 齢をことほぎ 花をめで
 月をかなしぶや しきし
 まの道のいともかしこく
 行とゞきたるにぞ おのれらが
 歟ふりて 畑うち植ならして
 縄なふの業ならでし

(序オ)



ざるも うち見かいきくや
口に出るが 五七五となり
にたるを 老のなぐさに
かいつくれば もとのしら
紙こひしくぞ

文化三年秋良夜

古・巢・園・にて

去何書（花押）

（序ウ）

* 〈「古巢堂」〉

古巢發句集上

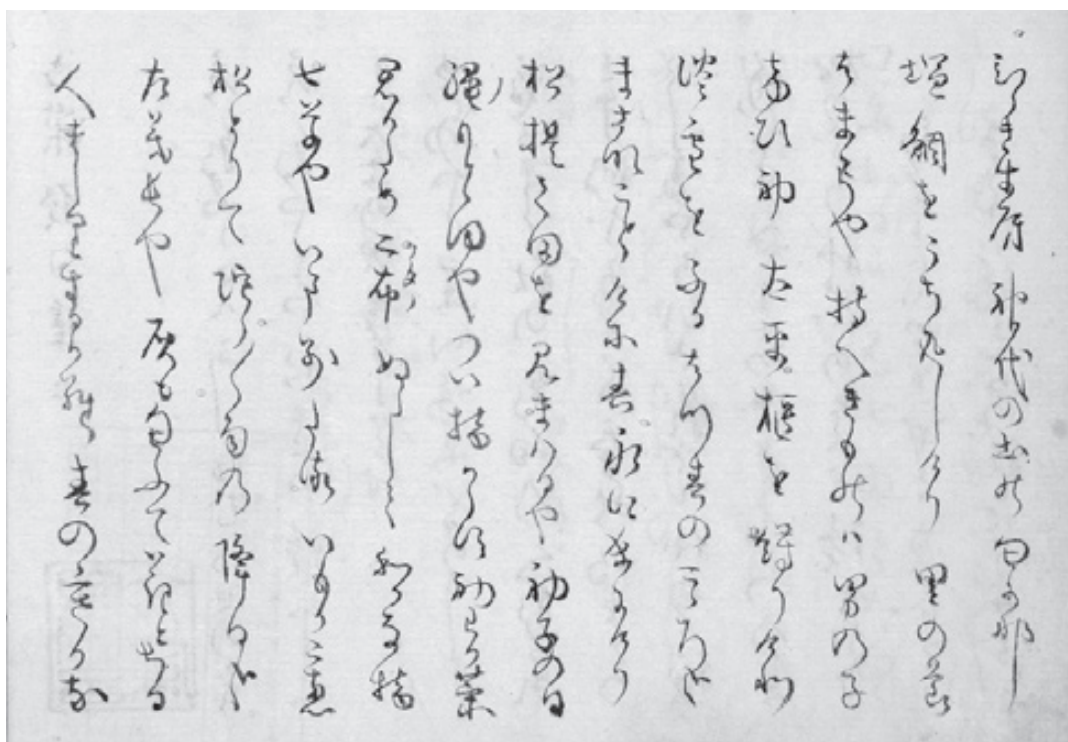


元朝や先ふし拝むいせの空
 元朝やはや仏道の鐘のこゑ
 大乗妙典書写しける時
 書初や薬草喻品たのもしき
 庭かまど秋の朝田の人数かな
 年棚ややがて蚕の釣どころ
 とし玉やちひさけれども伯母が臍
 年ぐに太うなれかし門の松
 松のうち神代の巻を読ばやな
 ひらきとは、山野を開て貢奉るが
 めでたければ、元日の祝ものともせるかとよ
 (二才)

古巢發句集 上

- ① 元朝や先ふし拝むいせの空
- ② 元朝やはや仏道の鐘のこゑ
- ③ 大乗妙典書写しける時
- ④ 書初や薬草喻品たのもしき
- ⑤ 庭かまど秋の朝田の人数かな
- ⑥ 年棚ややがて蚕の釣どころ
- ⑦ とし玉やちひさけれども伯母が臍
- ⑧ 年ぐに太うなれかし門の松

* (二に此品に当たれば)

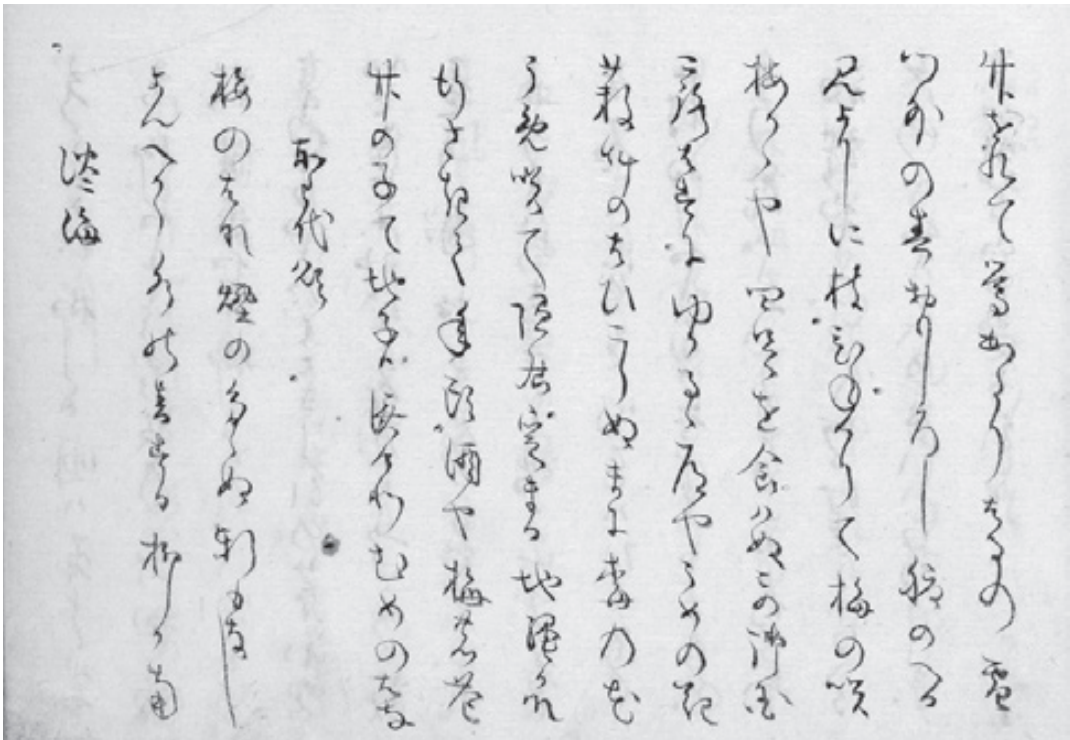


- ⑨ ひらき牛房神代の土の匂かな
 ⑩ 塩鯛をうち返しけり里の節
 ⑪ はま弓や持べきものは男の子
 ⑫ 商ひ初太平櫃を飴りけり
 ⑬ 淡雪をふるはつ春のこゝろ哉
 ⑭ まさなごとげに春永に成にけり
 ⑮ 松提て田を見まはるや初子の日
 ⑯ 縄もと田やつい摘からす初わか菜
 ⑰ 君がため二布ぬらしてわかな摘
 ⑱ 七草やいま別たるいもがこゑ
 ⑲ 松とりてだら／＼雨の降日哉
 ⑳ 左義長や灰も匂ふて花とちる
 ㉑ 人まじりするから春の寒かな

*〔初子日〕

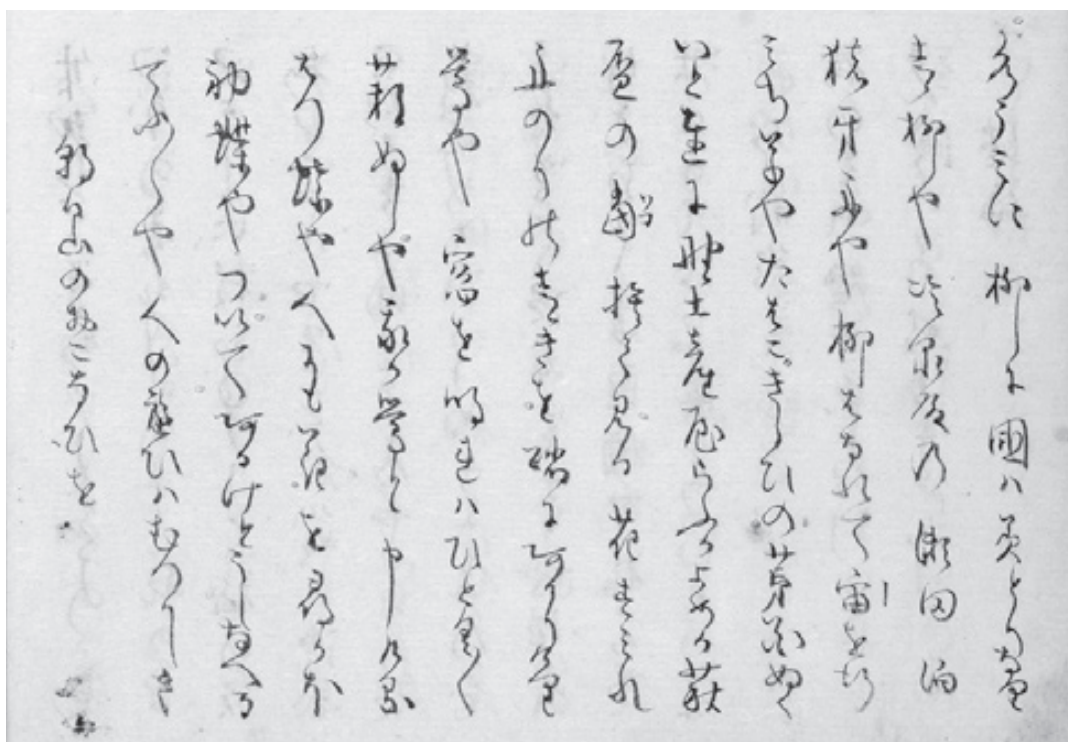
*〔打〕を「長」に訂正

(一ウ)



- ②② 竹をれて鶯出たりはるの雪
 ②③ 門外の春おもしろし腹のへる
 ②④ 見よがしに枝ひねくりて梅の咲
 ②⑤ 梅が、や四足を食はぬこの御国
 ②⑥ ころばずにゆかる、道やうめの花
 ②⑦ 藪草のはびこらぬまに梅の花
 ②⑧ うめ咲て隠居定まる地縄かな
 ②⑨ 行さきで年頭酒や梅の花
 ③⑩ 竹の子で地子は済けりむめのはな
 聖代頌
 ③① 梅のはな煙のた、ぬ軒もなし
 ③② よんべから水の音する柳かな
 淡海

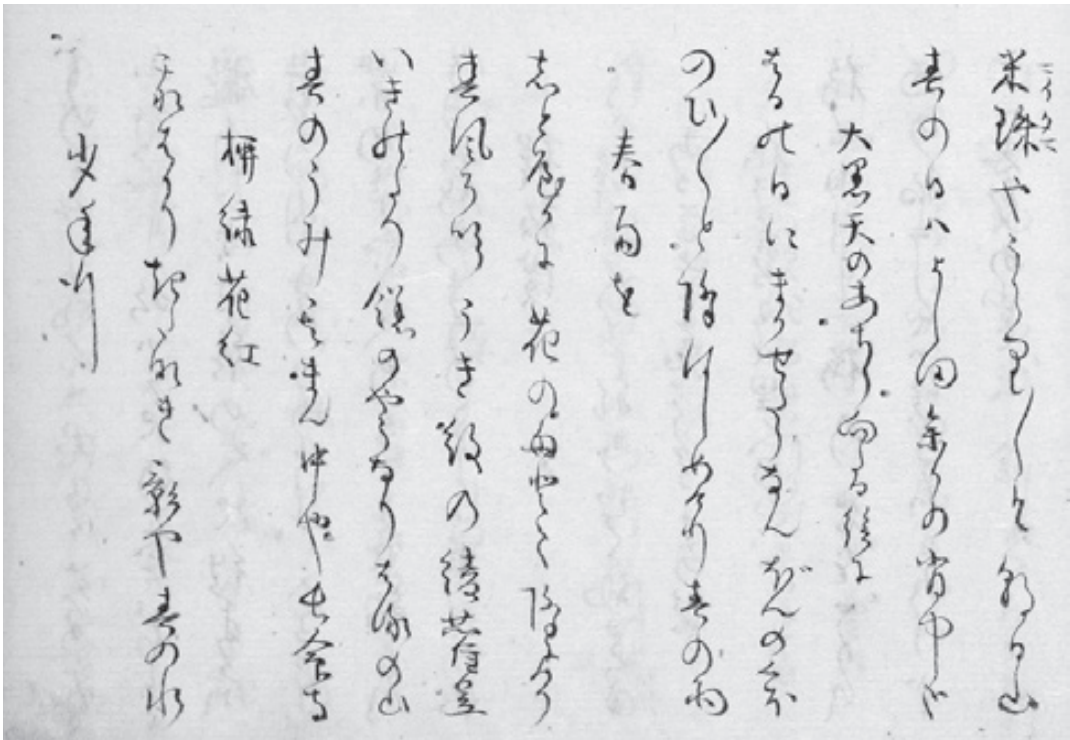
(二オ)



- ③③ 水うみに柳に国はみどりなり
 ③④ 青柳や冷泉殿の瀬田泊
 ③⑤ 猪牙舟や柳はなれて宙を行
 ③⑥ みち草やたばこぎらひの茅花ぬく
 ③⑦ いと連に野土産やらふかよめが萩
 ③⑧ 盃の当捨^{ソコ}て見る花すみれ
 ③⑨ 舟のりの青きを踏にさがりけり
 ④① 鶯や窓を明ればひとくく
 ④② 薺ぬしや我が鶯と申ける
 ④③ はつ蝶や人にも花を尋がほ
 ④④ 初蝶やついてあるけどうしなへる
 朝・日・山・の・お・こ・な・ひ・を

(二ウ)

* 〔旭山天満宮おこなひ
 に〕



④⑤ 米珠^{マイヅマ}やうらりくと朝日山

④⑥ 春の日はよし田参りの背中哉

④⑦ 大黒天のあちら向たる絵に

④⑧ ④⑨ はるの日にまかせたらなんぼんのくぼ
のびくと降はじめけり春の雨

春雨を

④⑩ しとやかに花の舟とて降にけり

④⑪ 春風ぞ吹うき紋の綾蘭笠

④⑫ いきのたつ鯨のやうなりはるの山

④⑬ 春のうみ其まん中や長命寺

柳緑花紅

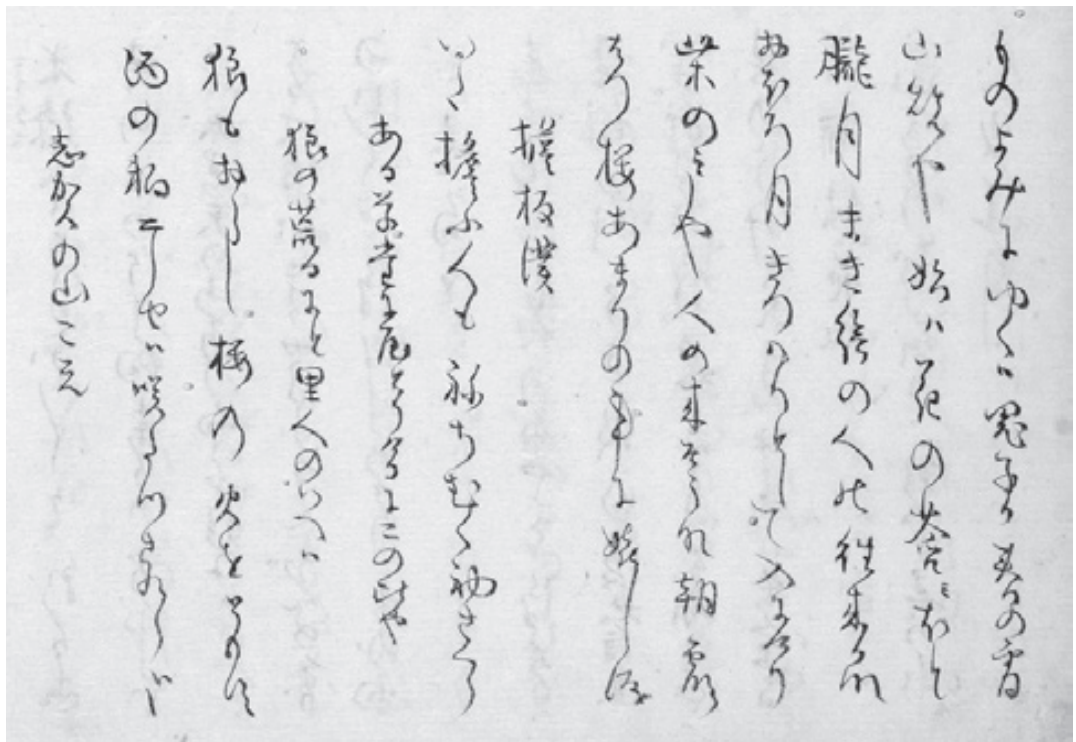
④⑭ 我ばかりきたなき影や春の水

少年行

(三才)

* 〈見せ消ち〉

* 〈図〉



⑤4 ものよみにゆくは鬼子か春の宵

⑤5 山焼や始は花の苔ほど

⑤6 朧月まき絵の人の往来かな

⑤7 おぼろ月きつぱりとして入にけり

⑤8 柴の戸や人の来そうな朝霞

⑤9 はつ桜あまりの事に嬉し涙

担板・僕

⑥0 いた担ふ人もねぢむく初ざくら

ある草堂にやどりけるに、この頃や

狼の荒るにと里人のいへば

⑥1 狼もおらじ桜の火をとす

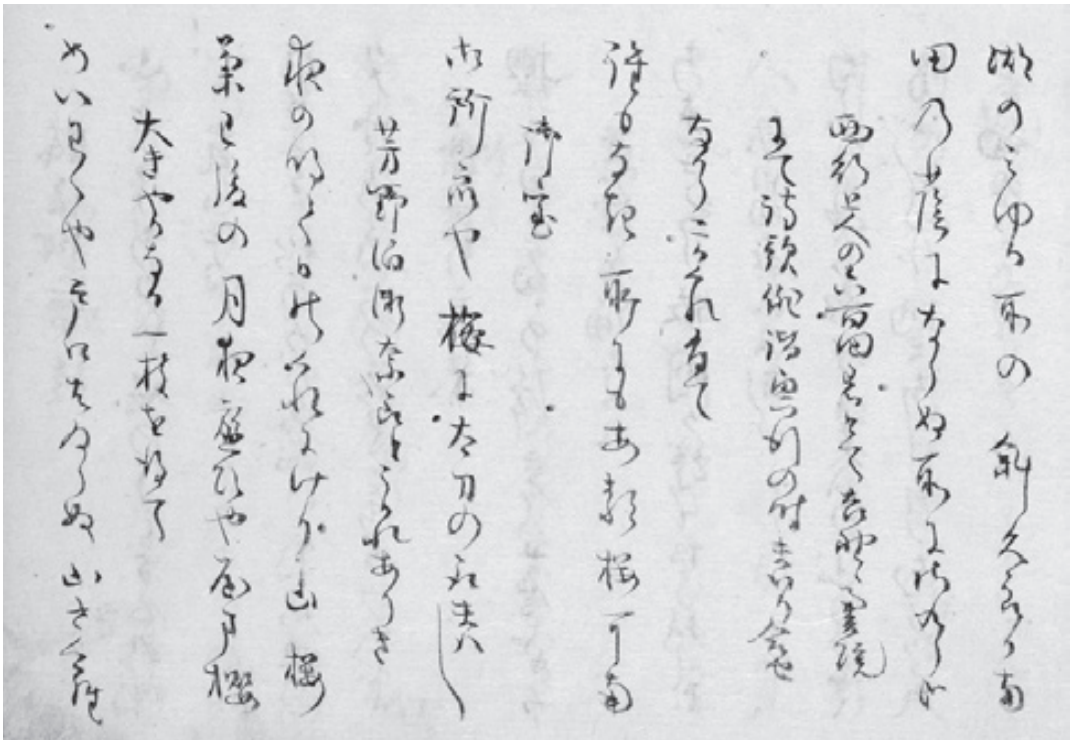
⑥2 酒の粕干せば咲たつさくら哉

志賀の山こえ

(三ウ)

* 〈見せ消し〉

* 〈いへれば〉



⑥3

湖のみゆる所のさくらかな

⑥4

田の陰にならぬ所にさくら哉

西行上人の六百回忌とて、吉野の奥院

* 〈六百回忌に〉

にて、詩歌俳諧興行の時、まいり合せ

* 〈連俳〉

ながらこがくれ有て

⑥5

誰もなき所にもある桜かな

御室

⑥6

御所衆や桜に太刀の取まはし

芳野・泊瀬・奈良とうかれありき

* 〈奈良泊瀬よし野〉

⑥7

夜の明て日のくれにけり山桜

⑥8

菊已後の月夜遊びややま桜

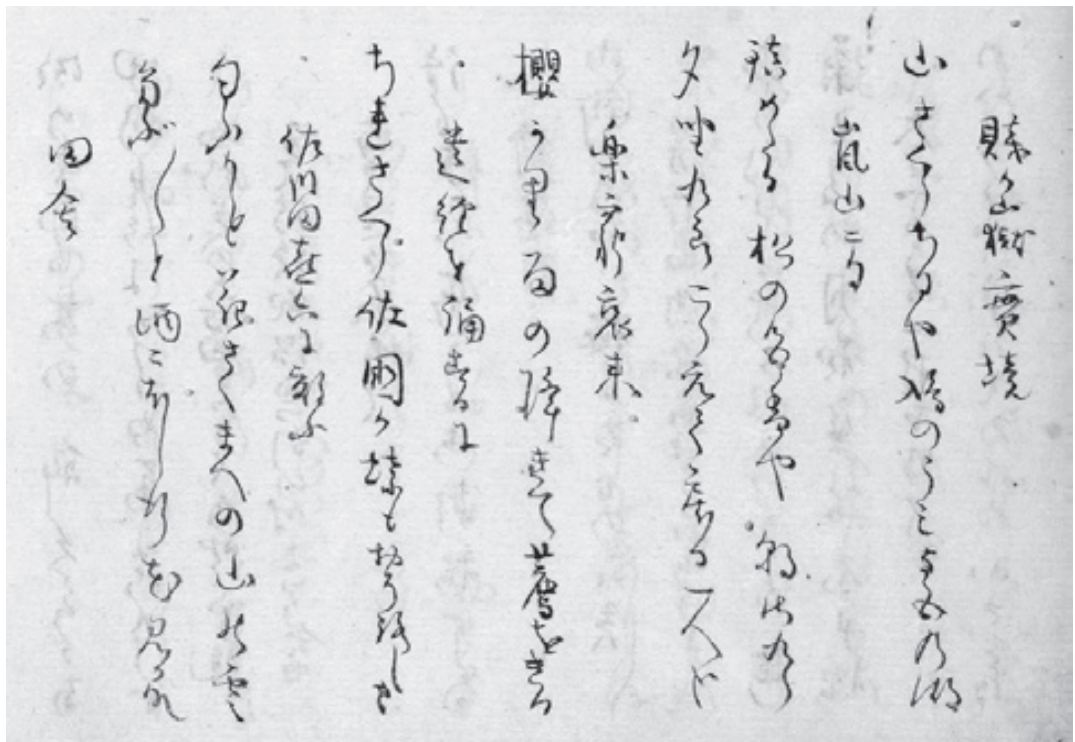
大きやかなる一枝を得て

* 〈折もてきたる人に〉

⑥9

めいわくや戸口はるらぬ山ざくら

(四才)



賤が嶽実境

⑦⑩ 山ざくらちるや鴉のうみよこの湖

嵐山二句

⑦① 鎮めたる松の色香や朝ざくら

⑦② 夕ざくらこらえて戻る一人哉

楽窮哀来

⑦③ 桜が雨の降きて薦をさる

遺経を誦するに

⑦④ ちれさくら佐国が蝶もおそろしき

佐川田喜六に効ふ

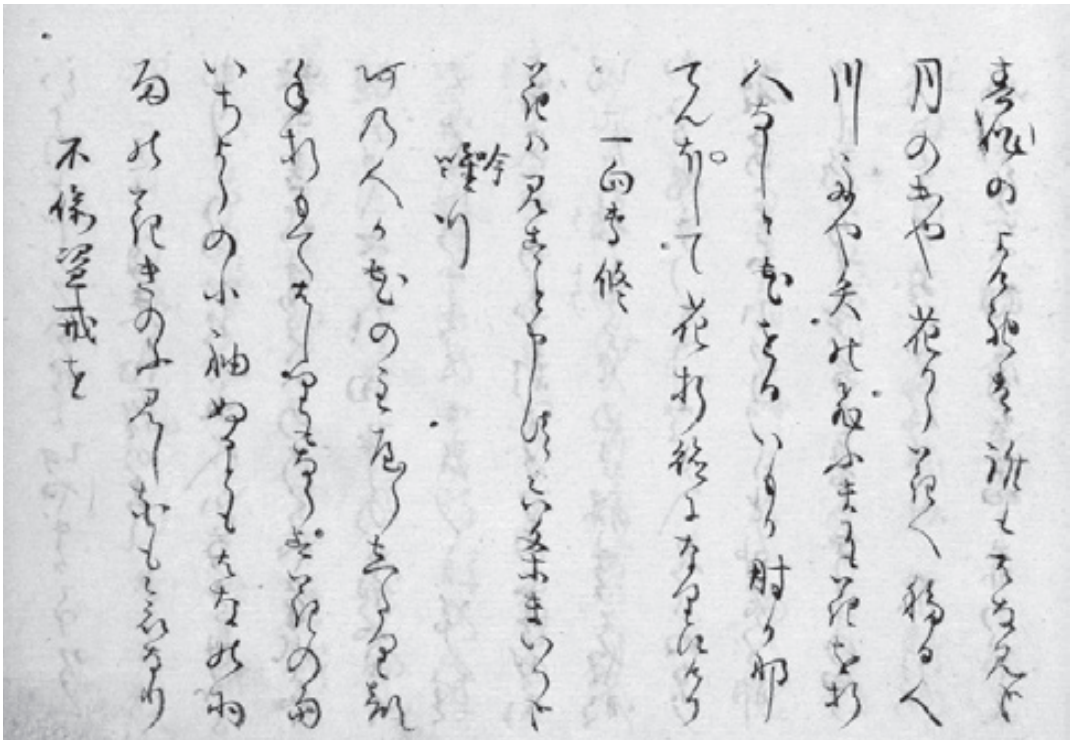
⑦⑤ 句ふかと花さくまへの山の雲

⑦⑥ たぶくと酒こぼし行花見かな

田舎

*〔句ひ〕

(四ウ)

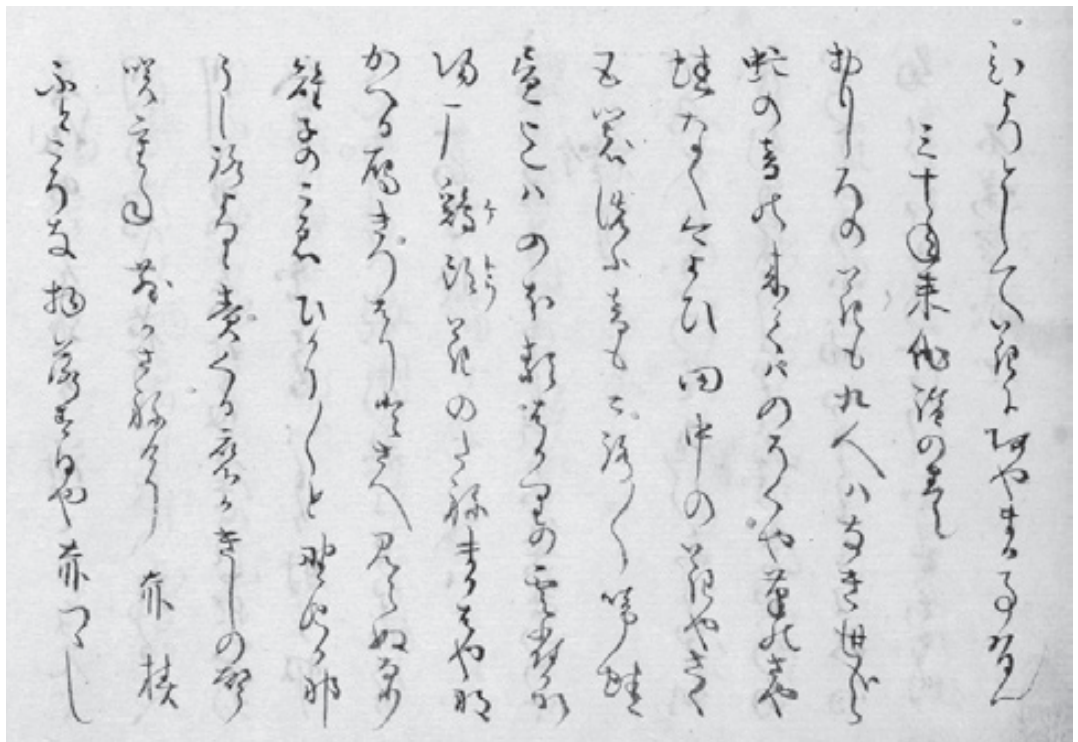


- 77 春作のよければ誰もはな見哉
 78 月の出や花から花へ移る人
 79 川舟や矢の飛ぶまにも花を折
 80 人なしと花をるいもが肘かな
 81 てんぼして花折徳になりにけり
 一向専修
 82 花は見ずと申す六条まいり哉
 吟
 83 あの人が花の主やらしたり顔
 84 手折もてはしりもならず花の雨
 85 いちよらの小袖ぬるともはなの雨
 86 雨の花きのふ見し花も哀なり
 不偷盜戒を

(五才)

* 〔折る〕

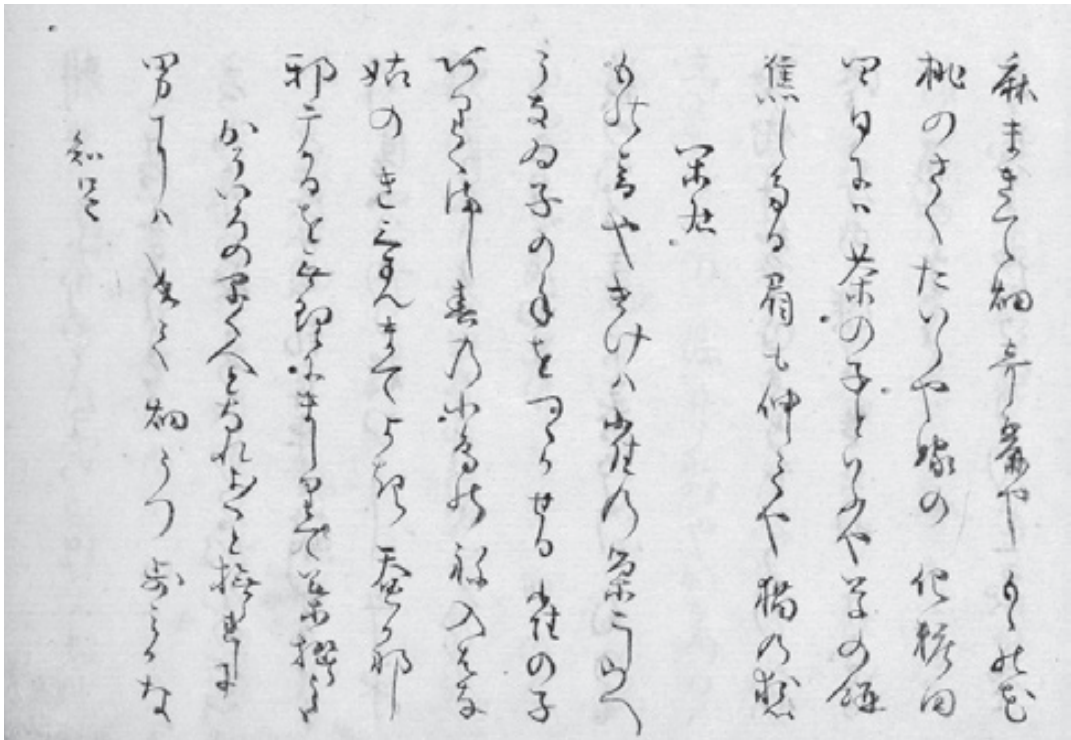
* 〔花の雨〕



- ⑧7 ひよつとして花にあやまる事有ん
三十年來俳諧の巻
- ⑧8 おもしろの花も九人はなき世哉
虻の音の来てはのぞくや筆のさや
- ⑧9 蛙なく今よひ田中の花やさく
- ⑨0 五器洗ふ音もころく啼蛙
- ⑨1 昼迄はのぼるばかりの雲雀かな
- ⑨2 帰雁鷄頭^{ケトウ}花のたねまかばやな
- ⑨3 かへる雁きつぱりとさへ見えぬなり
- ⑨4 雉子のこゑばかりくと野池かな
- ⑨5 うしろより責くる恋かきじの声
- ⑨6 咲重ね散かさねけり赤椿
- ⑨7 ふところな物落す日や赤つゝじ

(五ウ)

*〔はつきり〕



⑨⑨ 麻まきて畑奇麗やもゝの花

⑩⑩ 桃のさくたいらや嫁の化粧田

⑩① 四日には茶の子といふや草の餅

⑩② 焦したる眉も伸てや猫の恋

閑居

⑩③ もの音やきけば雀の巣ごしらへ

⑩④ うなゐ子の手をつゝかせる雀の子

⑩⑤ ありくまじ春の小鳥のね入ばな

⑩⑥ 姑のきげんまでよき蚕かな

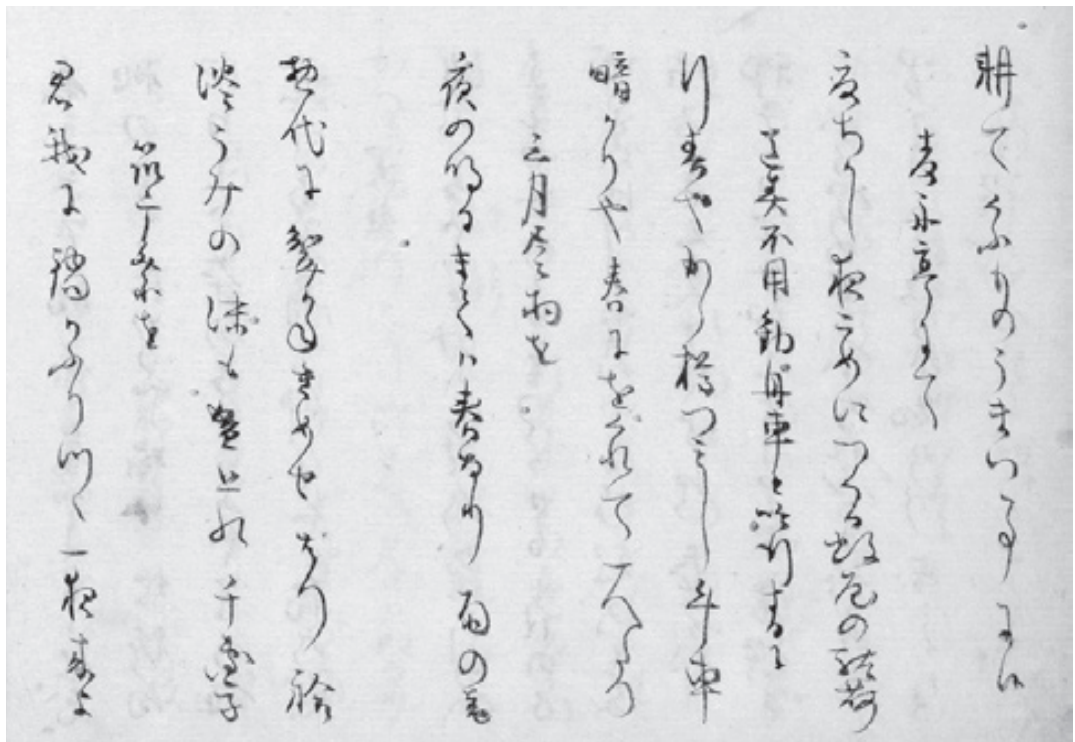
⑩⑦ 邪魔がるを無理にまじりて葉撰うた

かぞいの早く人となれよくと撫られしに

⑩⑧ 男には成て畑うつ歩みかな

知足

(六才)



⑩ 耕てくふものうまい事に候
麦舟亭にて

⑪ 夏ちかし夜ごめにつくる蚊屋の駄荷
送春不用勸舟車と吟行するに

⑫ 行春やから樽つみし牛車

⑬ 暗がりや春にをくれて一人たつ
三月尽雨を

⑭ 夜の明るまでは春なり雨の音

⑮ 惣代に髯がねきめせはつ給

⑯ 淡うみの沫も盛上れ千団子
筑摩祭を

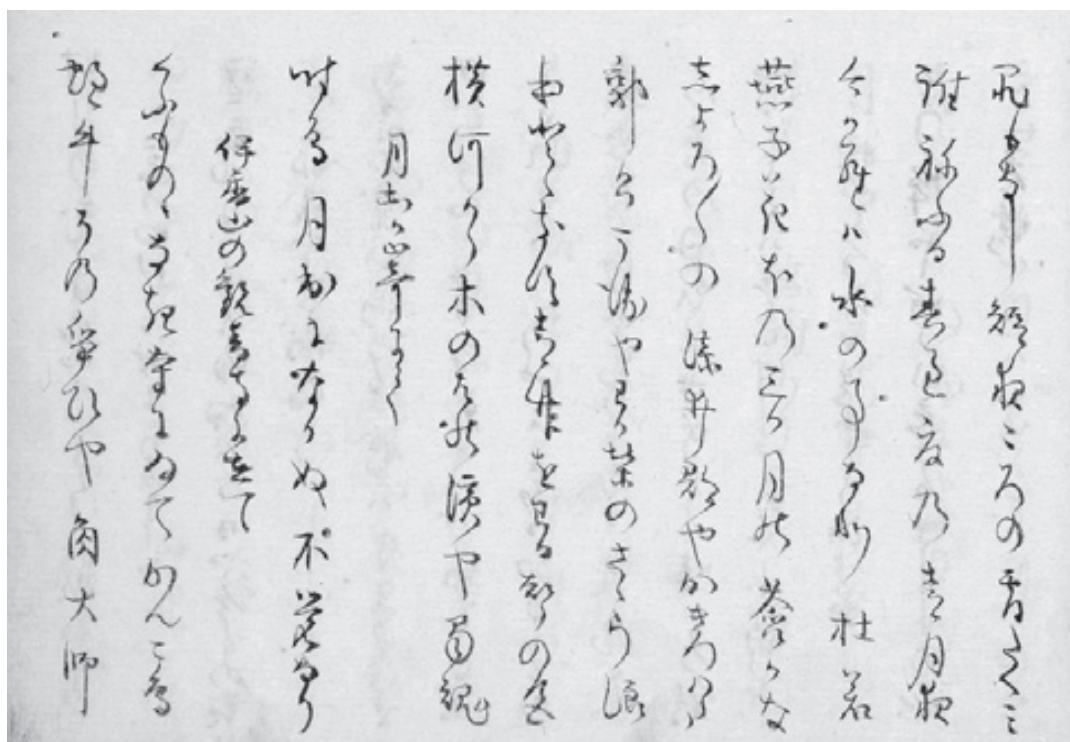
⑰ 君我に鍋かぶりつ、一夜来よ

* 「いふに」

* ⑪ 〔前書「三月尽」〕
* 「わかれて」

* 「われに君」

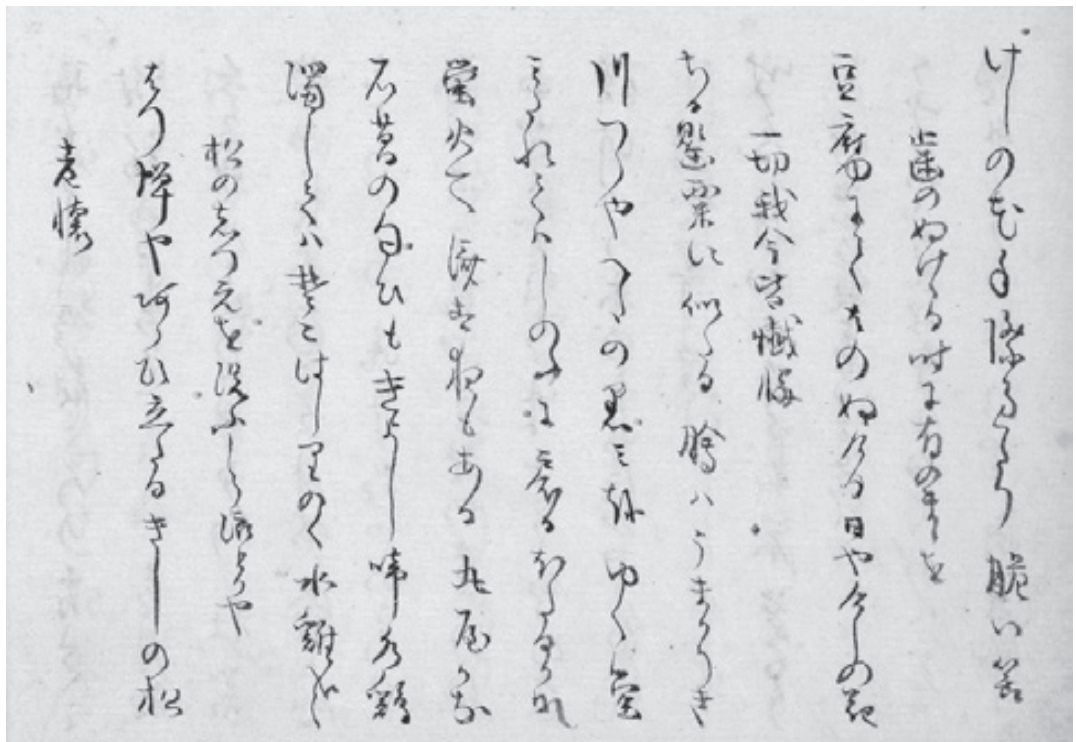
(六ウ)



- ①⑦ 罪もなし短夜ごろの宵たくみ
 ①⑧ 誰ねぶる春過夏の青月夜
 ①⑨ 今からは水の事なり杜若
 ①⑩ 燕子花ほの三日月の蒼かな
 ①⑪ しよろ／＼の浅井郡やかきつばた
 ①⑫ 郭公こゑやわか葉のさゝら浪
 ①⑬ ほとゝぎす青竹をわる声の色
 ①⑭ 横河から木のはの浜や蜀魂
 ①⑮ 月出が崎にて
 ①⑯ 時鳥月出になかぬ不覚なり
 ①⑰ 伊・香・山・の・観・音・寺・に・在・て
 ①⑱ くふものゝなき寺にゐてかんこ鳥
 ①⑲ 蝸牛その争ひや角大師

(七才)

* 〔賤が嶽の禁の観音寺
にいて〕



けしのももはるるる 脆い筈

歯のぬける時是有のまゝを

豆腐にてはのぬける日やけしの花

一切我今皆懺悔

ちる罌粟に似たる膾はうまかりき

川づらやへたの黒みをゆく螢

みだれてはしのぶに戻るほたるかな

螢火で済す夜もある丸屋かな

石菖の匂ひもきよし啼水鶏

濁してはそこはしりのく水鶏哉

松のしづえを洗ふしら浪とかや

はつ蟬やあらひ立たるきしの松

老懷

⑫⑧ けしの花手際過たり脆い筈

齒のぬけゝる時に有のまゝを

⑫⑨ 豆腐にてはのぬける日やけしの花

一切我今皆懺悔

⑫⑩ ちる罌粟に似たる膾はうまかりき

⑫⑪ 川づらやへたの黒みをゆく螢

⑫⑫ みだれてはしのぶに戻るほたるかな

⑫⑬ 螢火で済す夜もある丸屋かな

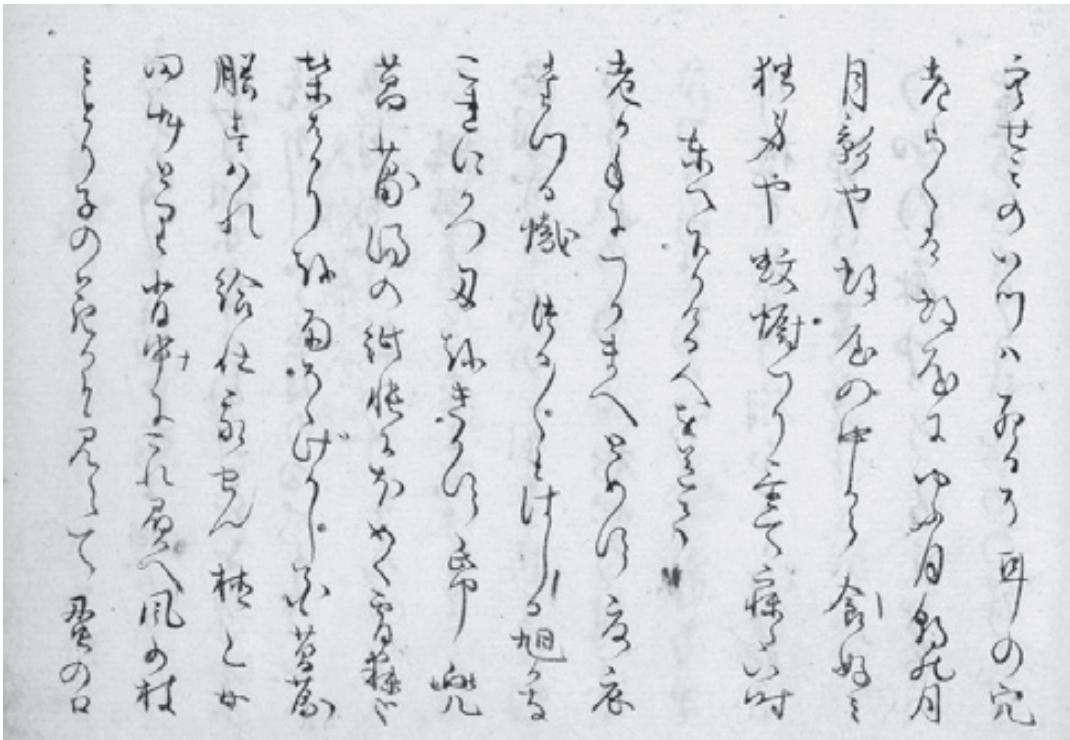
⑫⑭ 石菖の匂ひもきよし啼水鶏

⑫⑮ 濁してはそこはしりのく水鶏哉

⑫⑯ 松のしづえを洗ふしら浪とかや

⑫⑰ はつ蟬やあらひ立たるきしの松

(七ウ)

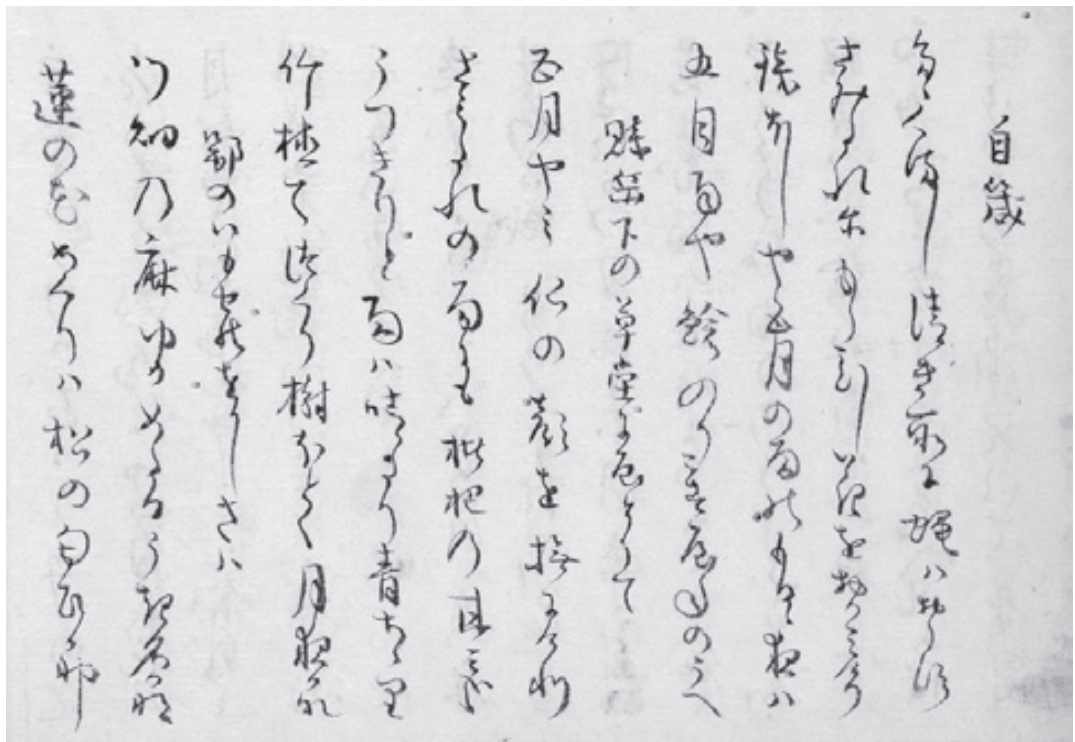


- 137 寒ぜみのいつは死るに耳の穴
 138 老らくは蚊屋にゆふ月朝の月
 139 月影や蚊屋の中から食好み
 140 独身や蚊帳つり置て寝たい時
 東へ下りける人を送て
 141 老が手につかまへとめず夏衣
 142 たつる幟つるくとはしる旭かな
 143 これにかつ刃をきかず紙兜
 144 菖蒲湯の紙帳にほめく宵寝哉
 145 葉ばかりを雨そ、げかし花菖蒲
 146 膳すはれ給仕我せん植乙女
 147 田草とり背中にこれ負へ風の枝
 148 みどり子の花かと見えて蚤の口

*「送りて」

*「これせなに」

(八才)



自箴

たゝくまじ清き所に蠅はおらず
さみだれにもらひし花をおがみけり

五月雨や鯰のりこす屋ねのうへ

賤岳下の草堂にやどりて

五月やみ仏の顔を撫にけり

さみだれの雨にも枇杷の甘み哉

うつきりと雨は晴たり青ちり

竹植てつくり樹ほどく月夜かな

鄙のいもせのをかしさは

門畑の麻ゆがめたるうき名かな

蓮の花めぐりは松の匂ひかな

自箴

たゝくまじ清き所に蠅はおらず

さみだれにもらひし花をおがみけり

錢ほしや五月の雨のもるゝ夜は

五月雨や鯰のりこす屋ねのうへ

賤岳下の草堂にやどりて

五月やみ仏の顔を撫にけり

さみだれの雨にも枇杷の甘み哉

うつきりと雨は晴たり青ちり

竹植てつくり樹ほどく月夜かな

鄙のいもせのをかしさは

門畑の麻ゆがめたるうき名かな

蓮の花めぐりは松の匂ひかな

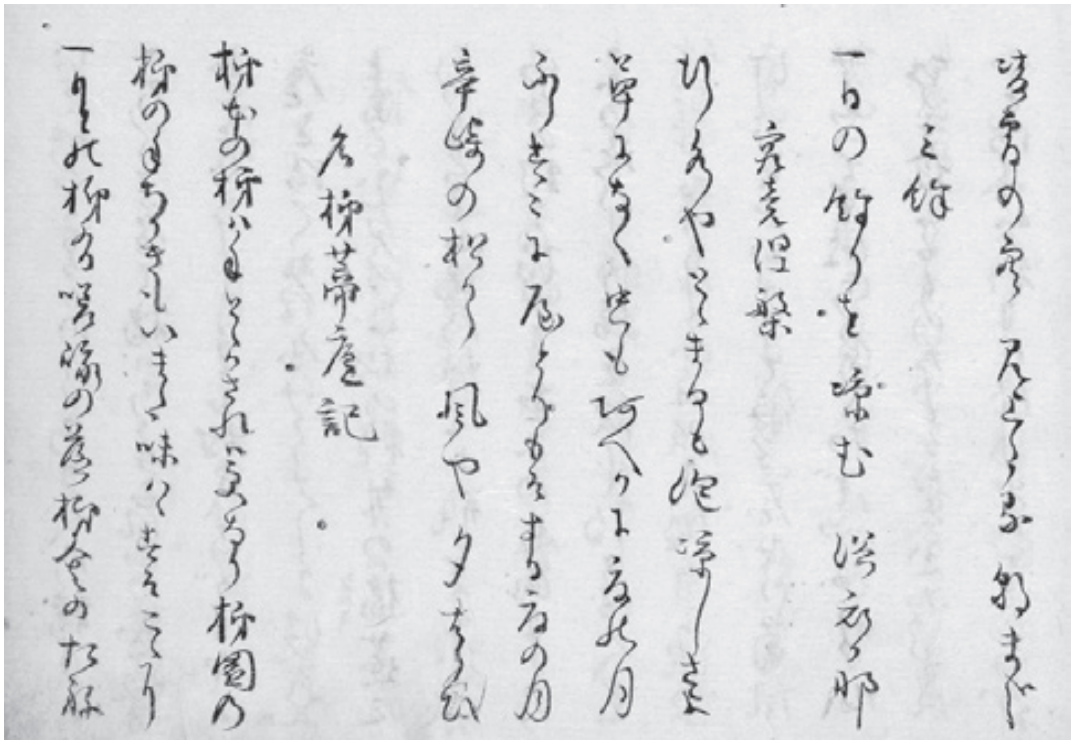
(八ウ)

* 152 (前書「文化四丁卯年

五月廿三日、大雨大洪水にて、國中皆湖となり、

或はつじにすまひ、舟にすむ事日久し。我栖高田の郷にても鯉鮒をつかむ事夥し。誠に古郷の大水なるべし。)

* 153 (伊香山)



名柿蒂廬記

- ⑬⑨ 凌霄の空見上たる朝ま哉
三余
- ⑬⑩ 一日の余りを涼む浴衣かな
究竟涅槃
- ⑬⑪ 行水やとゞまるも泡涼しさよ
- ⑬⑫ 草になく虫もあへかに夏の月
- ⑬⑬ ふらすこにやどりもぞする夏の月
- ⑬⑭ 辛崎の松から風や夕はらひ

名柿蒂廬記

柿本の柿は、手とゞかざれば更なり。柿園の柿の手ちかきもいまだ味は、ずぞ。こゝに
一もとの柿有。嵯峨の落柿舎のたね

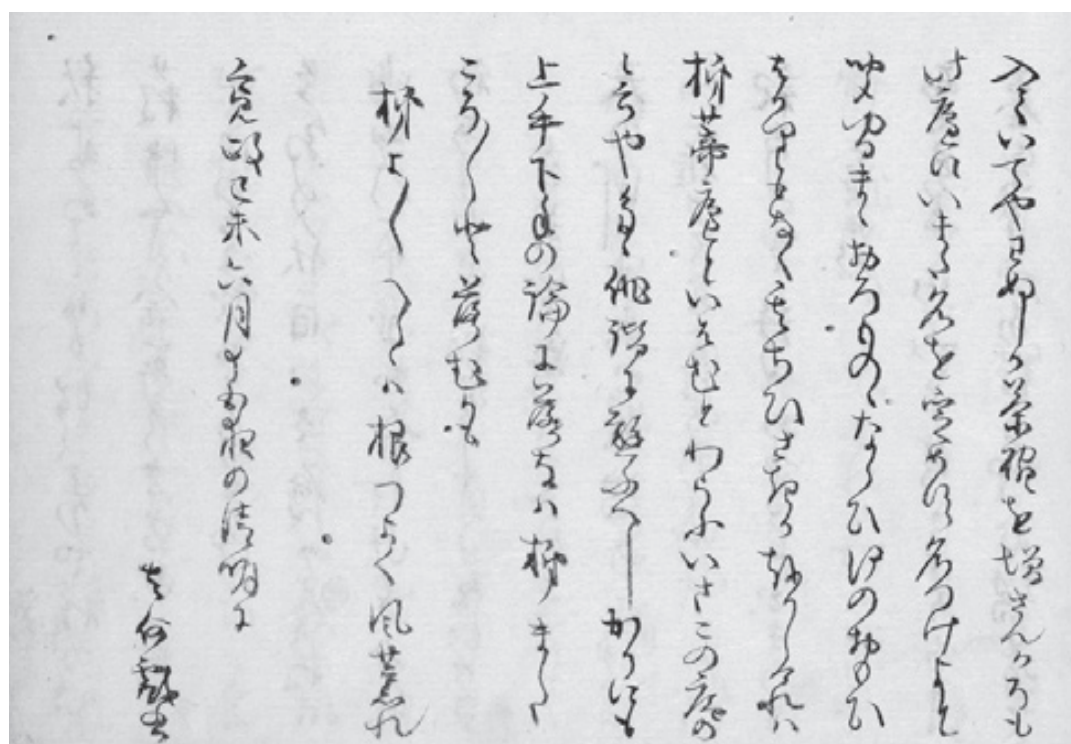
(九才)

* 「見とめ」

いく能なるものからあき人の猿手には
 ころくと落ちて梢はちかき嵐山の感慨を
 おこす成べし。主下村氏そがもとに
 廬を結て、おほやけわたくしにはぐれん
 とたくむ。見るに松の柱、竹の椽、^{ツルギ}蓮三
 ひらばかり、小隅の炬に土瓶をかく。茶碗は
 心友の数に限るとか。直下の長流にさす
 舟の跡のしら浪を観じ、釣する人の
 後の世をかなしむ。日既に湖水に沈めば、
 汀に足をひたして睡る。やをら南風
 薫り金波ちらめくほど、心にうかび
 声に発するもの、などか金玉ならざらん
 やと、さし出顔に口ばしれば、主あつぽに

(九ウ)

*「かなしむ」



入て、いでやわぬしが茶碗を増さんか、そも

此廬にいまだ名を定めず、名づけよと、

聞ゆるまゝ、おそものゝならひ何のおもひ

ばかりもなく、其ちひさがをかしければ、

柿蒂廬といはむとわらふ。いざこの庵の

会や、たゞ俳諧に遊ぶべし。かりにも

上手下手の論に落なば、柿また

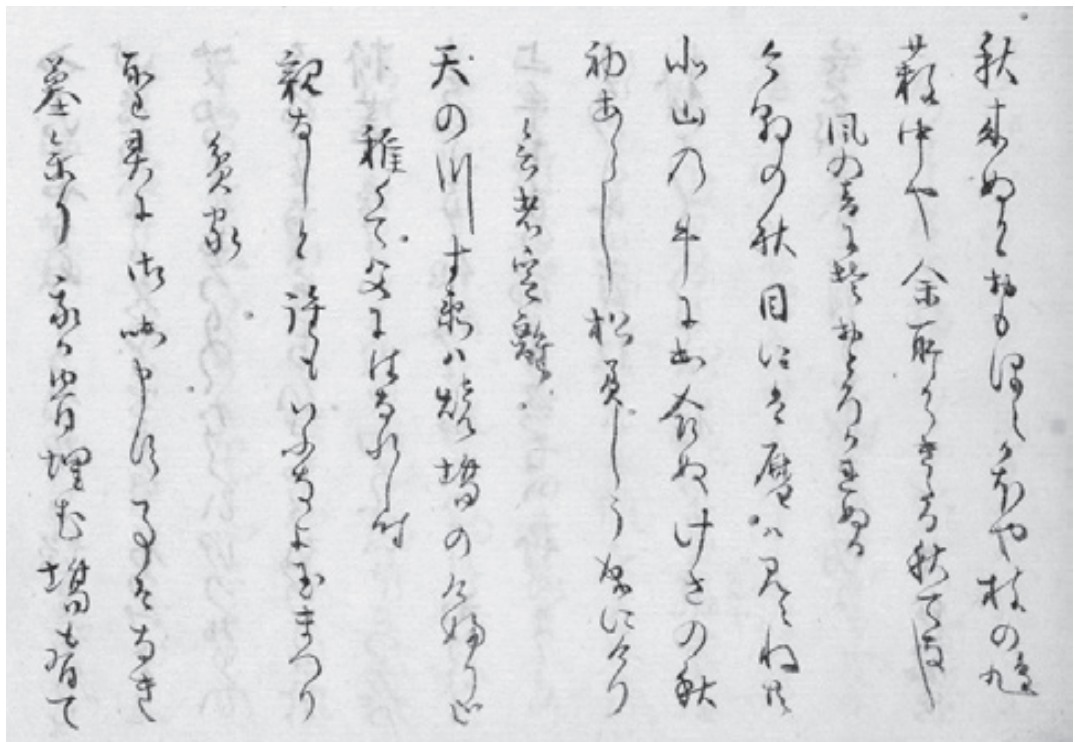
ころくゝと落むかも

⑩ 柿よゝゝへたは根づよく風薫れ

寛政己未六月十五夜の清明に

去何戲書

(一〇オ)



①66 秋来ぬとおもほしがほや枝の鳩

①67 藪中や余所からきたる秋でなし

風の音にぞおどろかれぬる

①68 今朝の秋目には暦は見えね共

①69 北山の牛に出合ぬけさの秋

①70 初あらし松美しう成にけり

会者定離

①71 天の川すゑは焼場のけぶり哉

稚くて父にはなれし時

①72 親なしと誰もいふなよ玉まつり

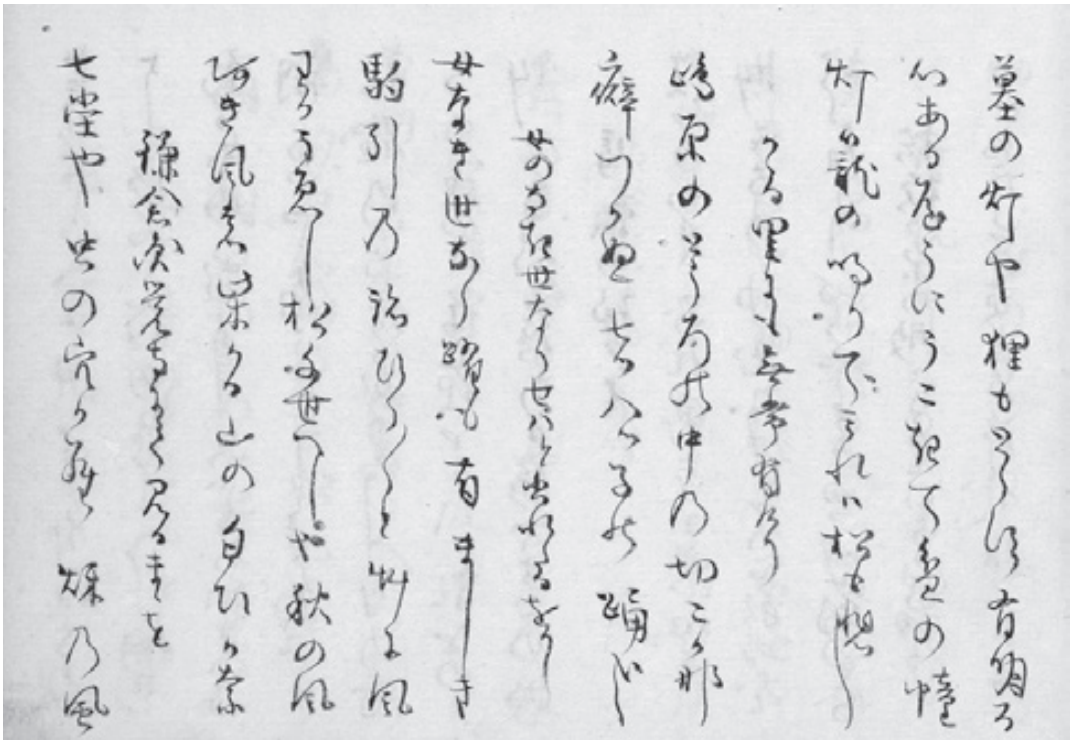
貧家

①73 聖霊に御咄申す事ぞなき

①74 墓参り我が骨埋む場も有て

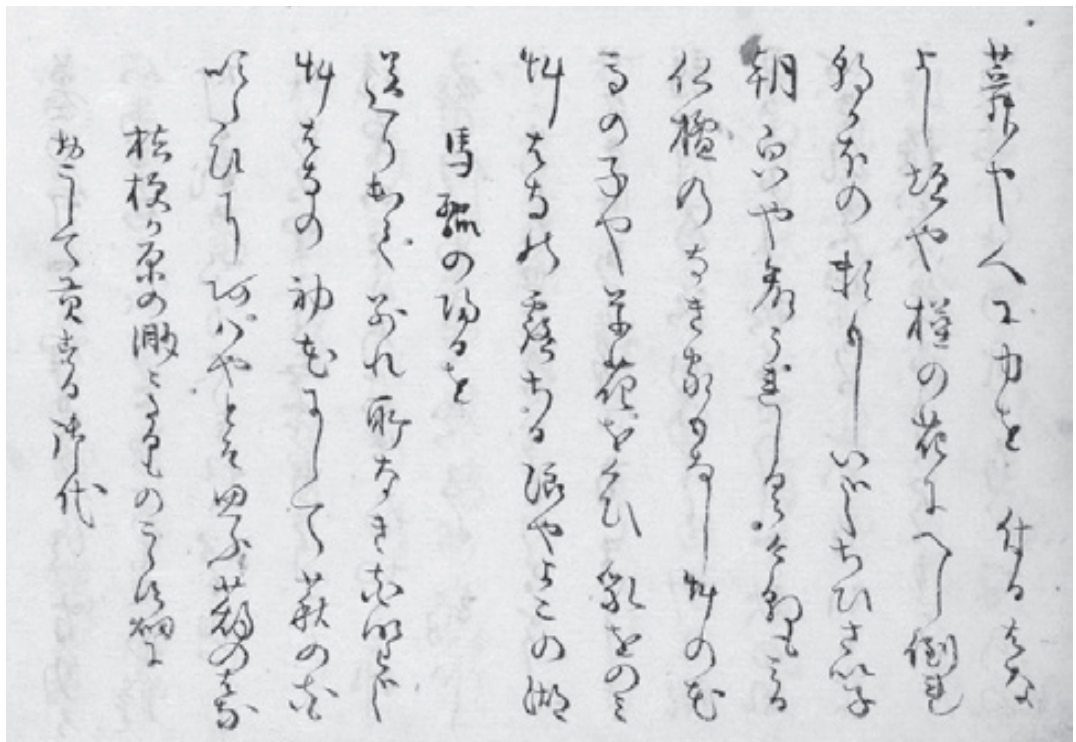
(一〇ウ)

* 〈ける〉



- 175 墓の灯や狸もとらず有明る
 心あるやうにうごきて盆の鐘
 176 灯籠の明りでみれば松も悲し
 かゝる里にも無常有けり
 177 島原のとうろの中の切こかな
 癖つかぬ七つ八つ子の踊哉
 178 女のなき世なりせばと書れたるをかし
 *〔書れしも〕
 179 女なき世なら躍も有まじき
 180 駒引の跡ひらくと草に風
 181 わがうゑし松千世へしや秋の風
 *〔裁し〕
 182 あき風も柴かる山の匂ひかな
 鎌倉円覚寺にて見るまゝを
 183 七堂や虫の穴から秋の風
 184

(一一一才)



①85 薺や人に力を付るはな

①86 よし垣や槿の花にへし倒れ

①87 朝がほの頼もしい哉ちひさい子

①88 朝顔や命うれしく今朝もみる

①89 仏壇のなき家もなし草の花

①90 馬の子や草花をくひ乳をのみ

①91 草ばなの露ちる浪やよごの湖

馬瓢の帰るを

①92 送り出て別れ所なき花野哉

①93 草ばなの初花にして萩の花

①94 吹たびにあはやとぞ思ふ萩のはな

桔梗が原の渺々たるものこらず畑に

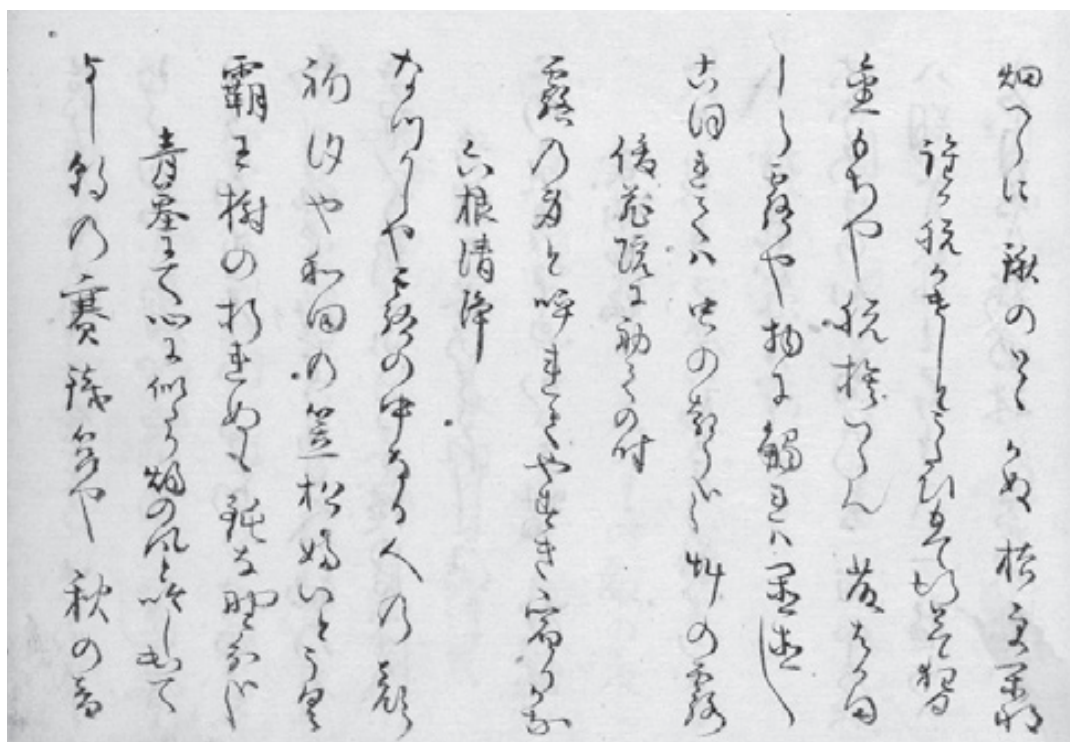
おこして貢する御代

(一一ウ)

*〔薺〕

*191〔前書「余呉」〕

*〔君が代〕



①95 畑べりに鉄のとゝかぬ桔更かな

誰が脱かけしとうたひもて行とて狂句

①96 金もちや脱捨つらん藤ばかり

①97 しら露や物に触れば置直し

①98 こぼれては虫の声哉草の露

俊蔵院に初めの時

①99 露の身と呼ばれてやすき宿りかな

六根清浄

②00 なつかしや露の中なる人の顔

②01 初汐や和田の笠松ふいとうく

②02 霸王樹の折れぬも鈍な野分哉

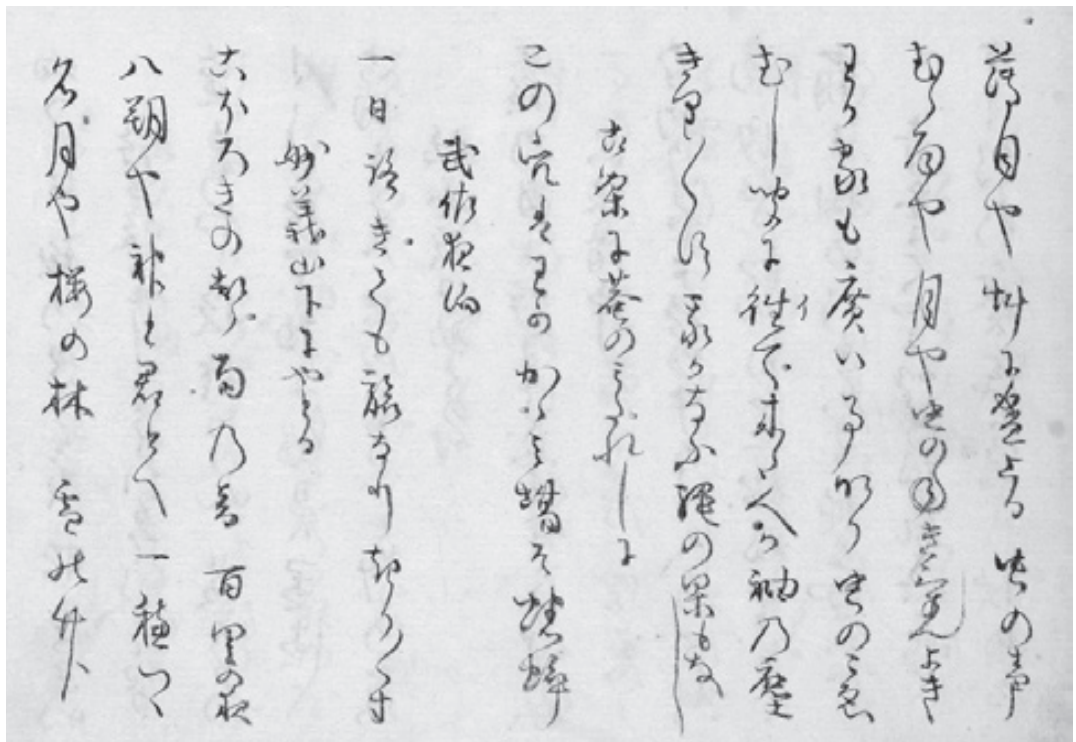
青墓にて心に似たり秋の風と吟じて出て

②03 よし朝の賽銭宮や秋の音

(一一二才)

* 「折ぬ」

* 「吟じて」



②04 薄月や草に盛上る虫の声

②05 むら雨や月や虫のねきげんよき

②06 わが家も広い事なり虫のこゑ

②07 むし聞に往て来た人か袖の塵

②08 きりくす我がなふ縄の果もなし

②09 古巢に蚕のみだれしに

②10 この穴はわがかみ場ぞ蟋蟀

武佐夜泊

②11 一日路きても旅なりきりくす

妙義山下にやどる

②12 こほろぎの声雨の音百里の夜

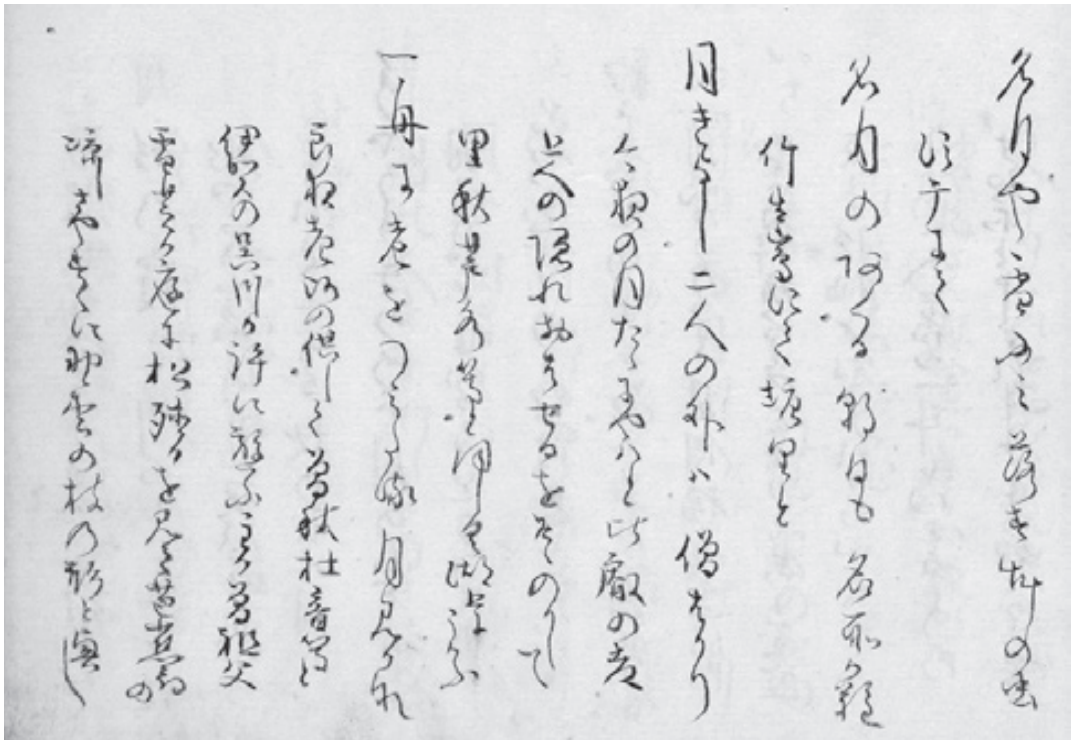
②13 八朔や神と君とへ一穂づ、

名月や桜の林雪の竹

* 〈「蚕乱飛せるに」

* 〈「やどるに」

(一二ウ)



②14 名月や雪ふみ落す草の虫

須磨にて

②15 名月のあくる朝日も名所かな

竹生島にて塘里と

②16 月きよし二人の外は僧ばかり

今夜の月たゞにやはと、比叡の老・

上人の隠れおはせるをそゝのかして

里秋、芦水等と同じく湖上にうかぶ

②17 一舟に老をつみたる月見かな

良夜、老師の供して曾秋、杜音等と

伊賀の呉川が許に遊ぶ。主が曾祖父

雪芝が庭に松植るを見て、芭蕉翁の

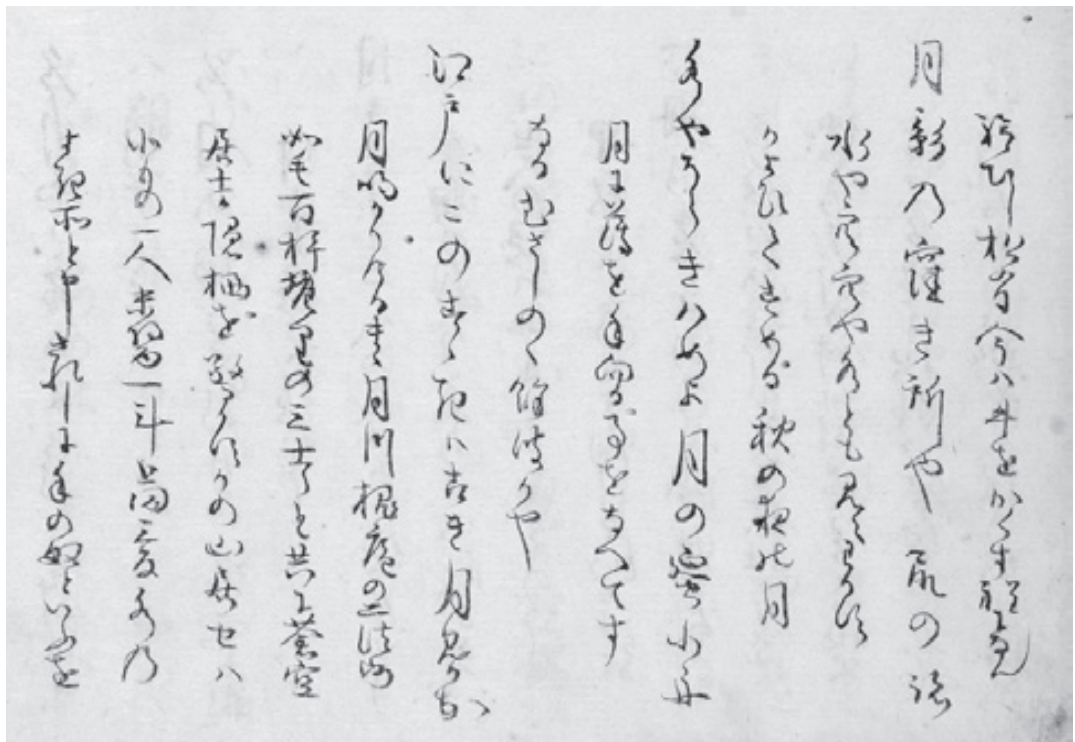
涼しさやすぐに野松の枝の形と興じ

(一三才)

* 〈良夜竹生島〉

* 〈蛙声上人〉

* 〈と〉



②18

月影の窪き所や尻の跡
給ひし松有。今は牛をかくす程になん

水や空、空や水とも見えわかず

かよひてすめる秋の夜の月

②19

水やそらきはめよ月の蟹小舟

月に薄を手向る事をなべてす

なるむさしの、余波かや

②20

江戸にこのす、きは古き月見かな

月明かりけるま、月川、槐庵の二法師

如毛、百杵、塘里の三士らと共に蒼空

居士が隠栖を驚かす。かの山居せば

小もの一人、未醬一斗、上田三反、水の

よき所と申されしに、手の奴といふを

(二三ウ)

* 〈おしなべて〉

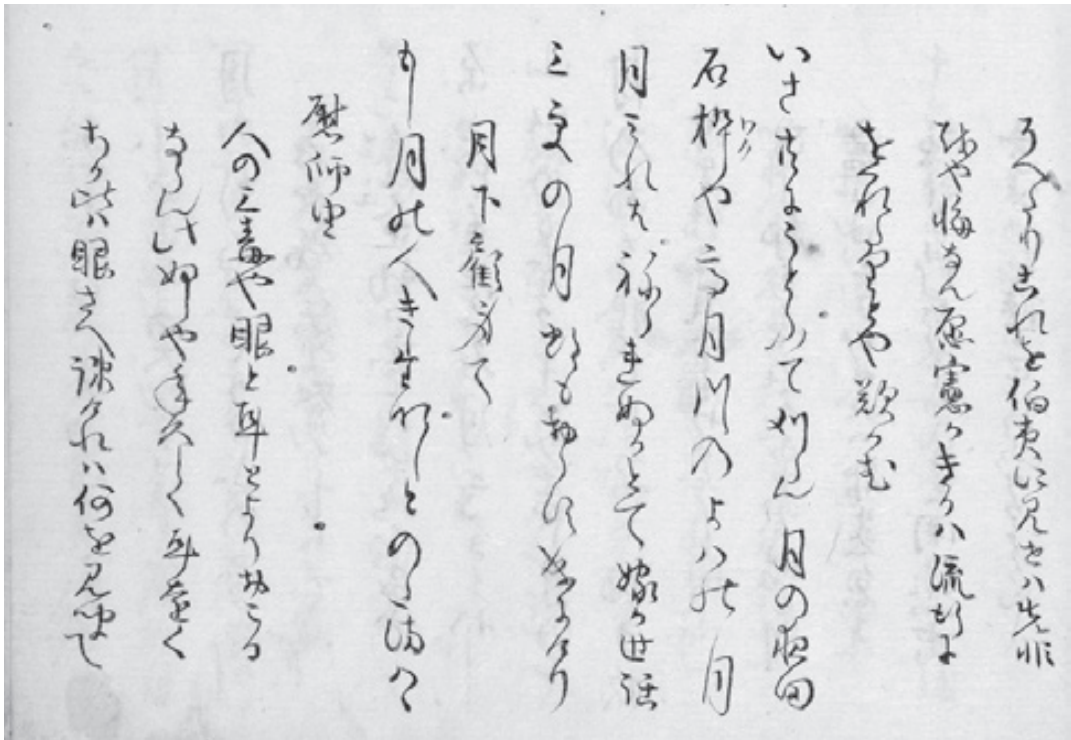
* 〈名ごりかやといとな
つかし〉

* 〈此得〉

* 〈里秋居士〉

* 〈味噌〉

* 〈いはれしを〉



うへりまねを伯夷にえさハ先非
 師や悔きん愿憲うまうハ流しよ
 まねやまや歎かむ

いさよふふてやん月の夜田
 石梓^{ワヅ}やう月川^{ツク}のよはの月
 月みればねられぬかとて嫁が世話
 とふの月蚊もおらず成にけり

月下顧みて

り月れくまきまやとのふり

慰師由

人の三毒や眼と耳とよりおこる
 ちか頃や年久しく耳遠く
 ちか頃眼さへ疎れ何とぞ

そへたり。これを伯夷に見せば、先非
 をや悔なん。愿憲がきかば、流行に
 をくれたりとや歎かむ

②21 いざ共にうとふて刈らん月の夜田

②22 石梓^{ワヅ}や高月川のよはの月

②23 月みればねられぬかとて嫁が世話

②24 三更の月蚊もおらず成にけり

月下顧みて

②25 もし月の人きたなしとのたまはゞ

慰師由

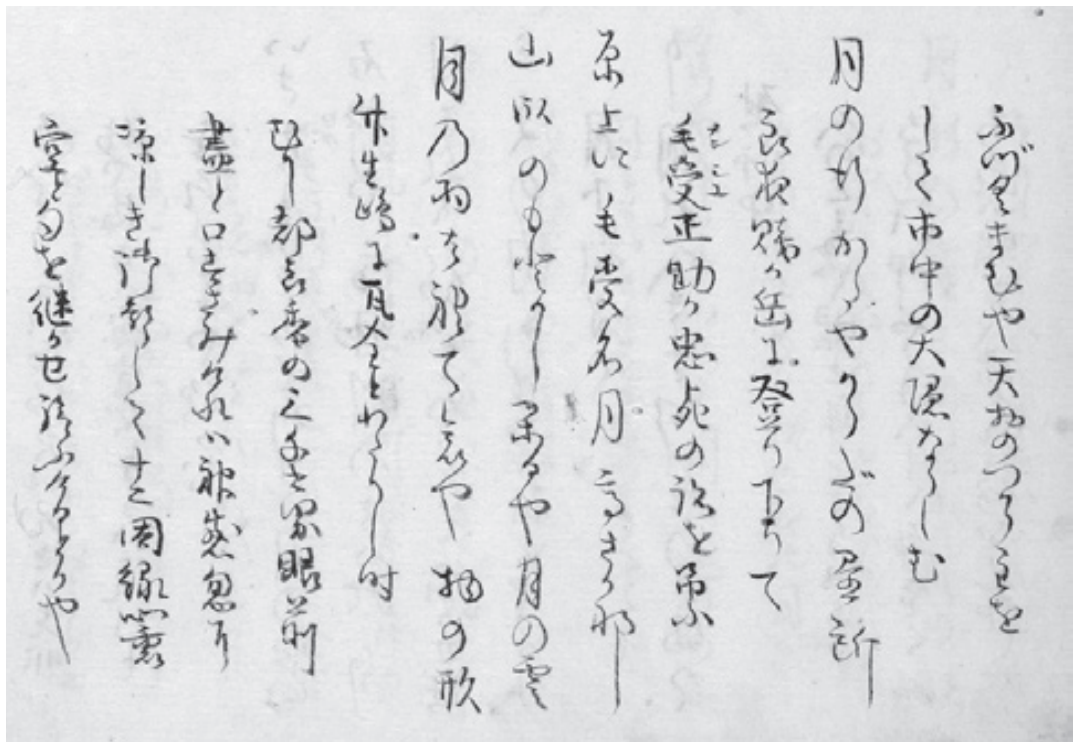
人の三毒や眼と耳とよりおこる

ならん。此ぬしや年久しく耳遠く、

ちか頃は眼さへ疎ければ、何を見聞て

(一四才)

*「所思」を見せ消ちに
 して「月下顧みて」とす
 る



ふづくまむや天おのづから主を

して市中の大隠ならしむ

月の行かたやからだの置所

良夜賤が岳に登り下りて

毛受正助が忠死の跡を弔ふ

原上にも受名月高きかな

山臥のもどかしがるや月の雲

月乃雨を被てしややおの秋

竹生島に瓦全とわたりし時

むかし、都良香の三千世界眼前

尽と口ずさみければ、神感忽に

涼しき御声して、十二因縁心裏

空と句を継がせ給ふけるとかや

②26

ふづくまむや。天おのづから主を
して市中の大隠ならしむ
月の行かたやからだの置所

良夜賤が岳に登り下りて

毛受正助が忠死の跡を弔ふ

②27

原上に毛受名月高きかな

②28

山臥のもどかしがるや月の雲

②29

月の雨はれて哀や物の形

竹生島に瓦全とわたりし時

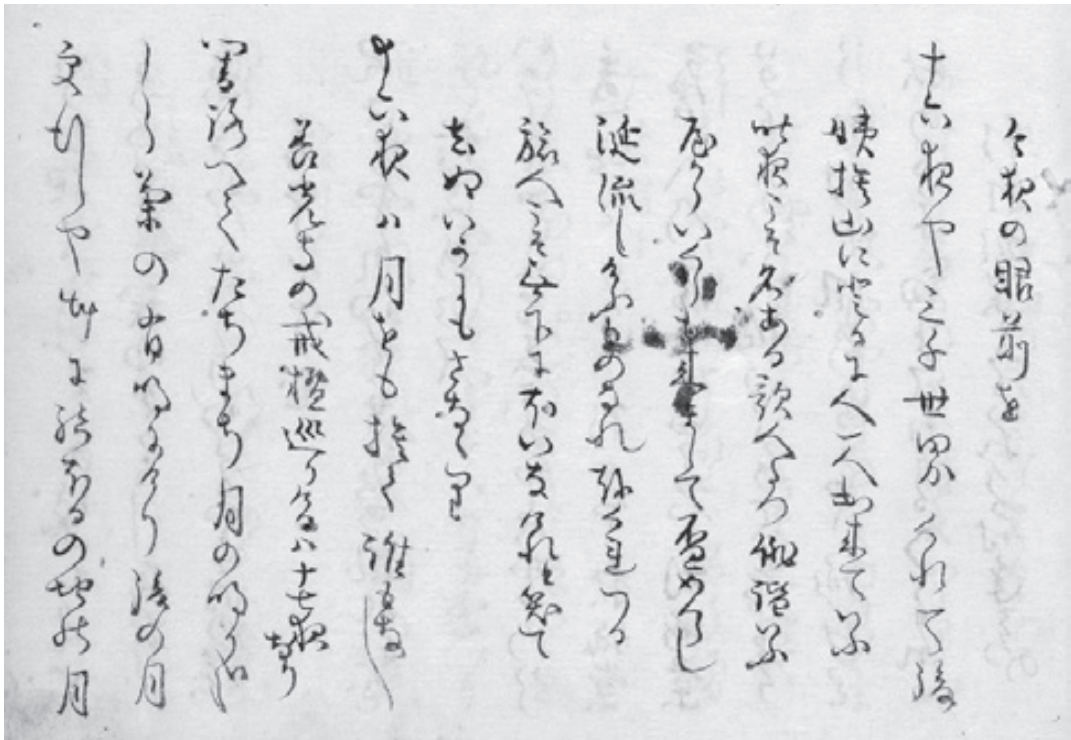
むかし、都良香の三千世界眼前

尽と口ずさみければ、神感忽に

涼しき御声して、十二因縁心裏

空と句を継がせ給ふけるとかや

(二四ウ)



今夜の眼前を
十六夜や三千世界くれて後
姨捨山に登る人一人出来ていふ

(230)

今夜の眼前を

十六夜や三千世界くれて後

姨捨山に登るに人一人出来ていふ。

昨夜こそ名ある歌人だつ、俳諧いふ

やから、いくらも来まして、盃めぐらし

涎流し給ふものなれ。をくれつる

旅人こそ無下にほいなければと笑て

去ぬ。いかにもさなゝり。

(231)

十六夜は月をも捨て誰もなし

善光寺の戒壇巡りけるは十七夜なり

(232)

闇路へてたちまち月の明り哉

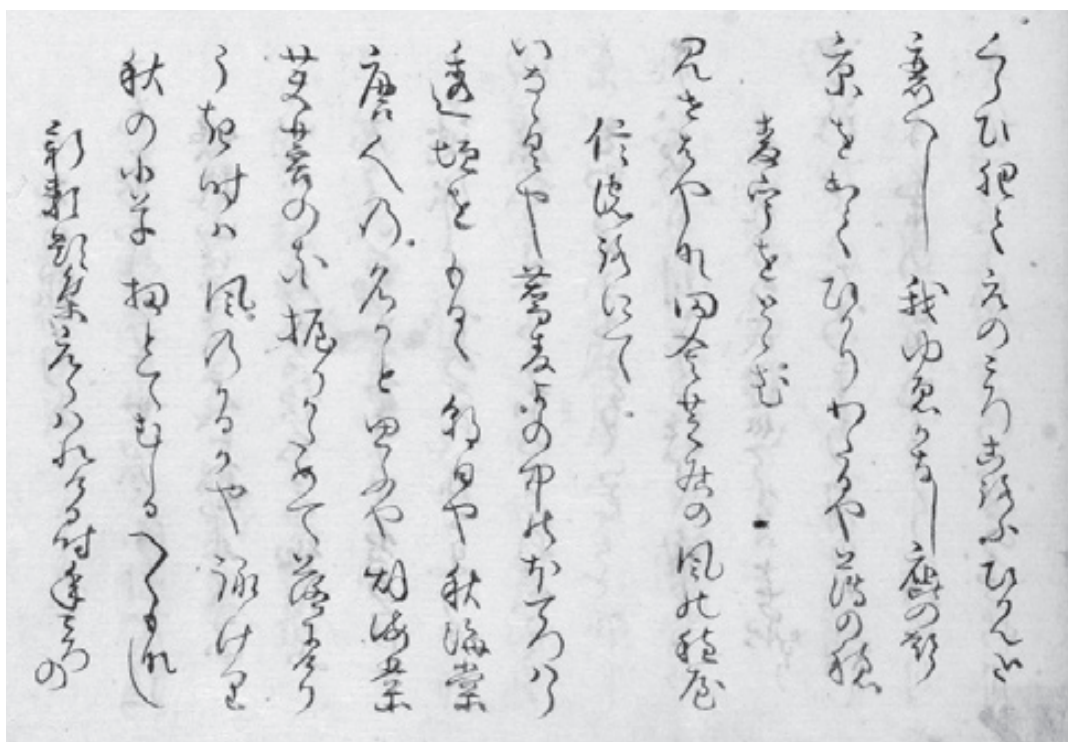
(233)

しら菊の有明にけり後の月

(234)

更行や草に結はるのちの月

(二五才)



②35

くらひ肥てえのころころぶひがん哉

②36

恋べし我ゆゑかなし鹿の声

②37

京を出てひかりわたるや薄の穂

麦宇をとむ

②38

見せばやな田舎芝居の風の穂屋

信濃路にて

②39

いな、くや蕎麦よの中のぼてつばら

②40

透垣をもる、朝日や秋海棠

②41

唐人の名かと思ふや秋海棠

②42

芙蓉の花握りかためて落にけり

②43

うき時は風のかるかや詠けり

②44

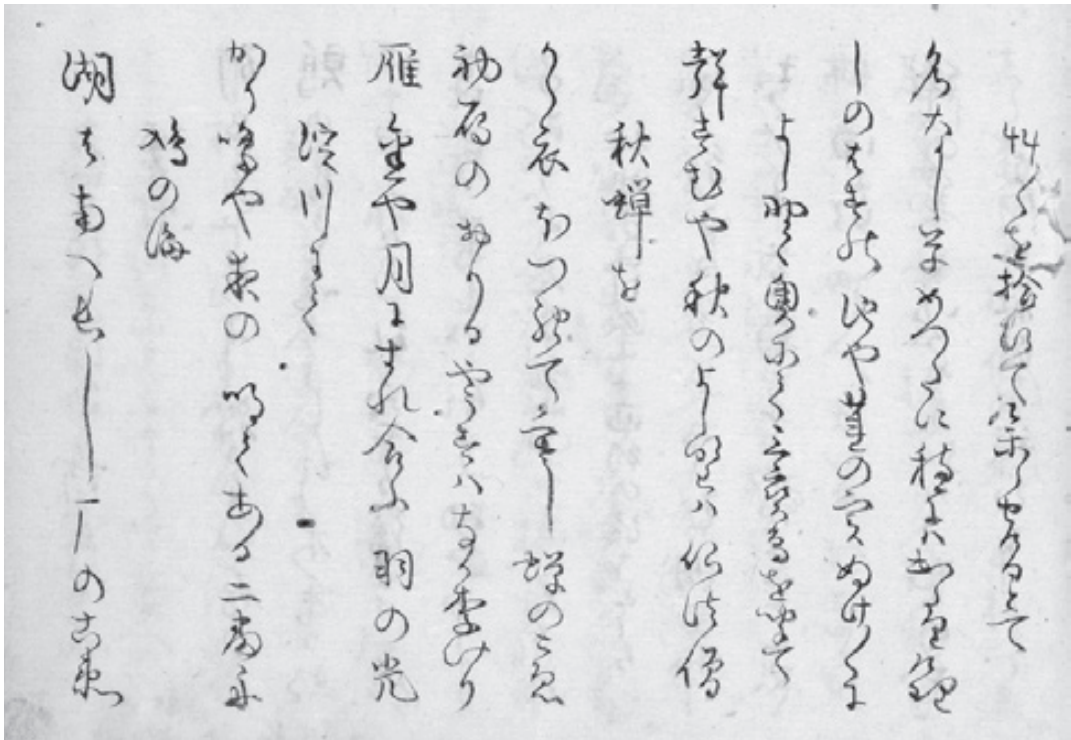
秋の小草扱とてむしるべくもなし

新類題集えらばれける時、年ごろの

(一五ウ)

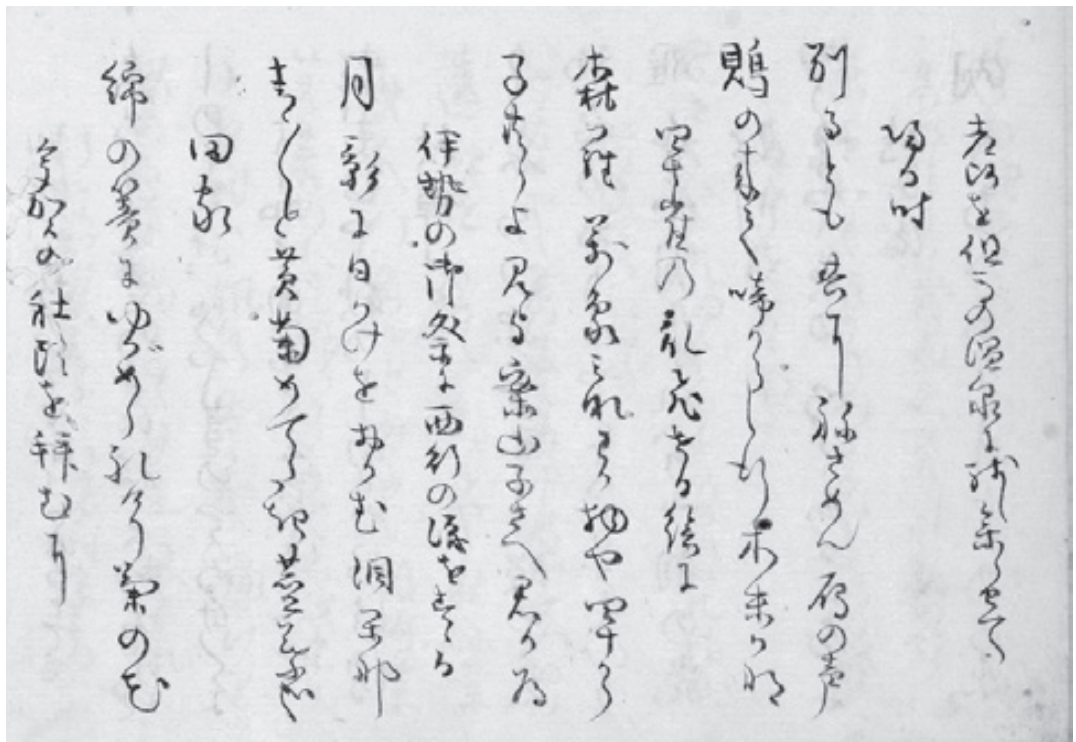
*〔木曾路〕

*〔芙蓉の花〕を「花芙蓉」に訂正



- 草ぐを拾ひて参らせけるとて
 名なし草めつたに穂には出たりけり
 しのばずの池や蓮の実ぬけく
 よし野の奥にて三宝鳥を聞て
 声すむや秋のよし野は仏法僧
 秋蟬を
 から衣ほつれて寒し蟬のこえ
 初雁のおりるやうすはなかりけり
 雁金や月にすれ合ふ羽の光
 淀川にて
 かり鳴や夜の明である二番舟
 鳩の海
 湖は南へ長し雁のこえ
- (一六才)

* 246 前書 東叡山を見せ消し
 * 〈よし野の奥見んと務
 の松ともしたるを先に金
 剛杖てふ物を力とす。夜
 は墨すりたらん空に仏
 法々と囀る声あり。高
 野大師の三宝声聞一鳥と
 なされ、念最上人のうら
 やまし。いかに囀る鳥な
 れば、御法の外の声なか
 るらんと、よまれしなど
 をうそあやしくも聞伝え
 しものをと立とまる〉



老師を但馬の温泉に残し参らせて

帰る時

別るとも共にねざめん雁の声

鴟の来て啼かし行木末かな

四十雀の乱飛せる絵に

森羅万象みなわが物や四十から

子供らよ見よ案山子さへ君が為

伊勢の御祭に西行の涙をすゝる

月影に日かげをおがむ泪かな

青くと黄菊めでたき茎葉哉

田家

綿の簀にゆがめられけり菊の花

多賀の社頭を拝むに

老師を但馬の温泉に残し参らせて
帰る時

②53 別るとも共にねざめん雁の声

②54 鴟の来て啼かし行木末かな

四十雀の乱飛せる絵に

②55 森羅万象みなわが物や四十から

②56 子供らよ見よ案山子さへ君が為

伊勢の御祭に西行の涙をすゝる

②57 月影に日かげをおがむ泪かな

②58 青くと黄菊めでたき茎葉哉

田家

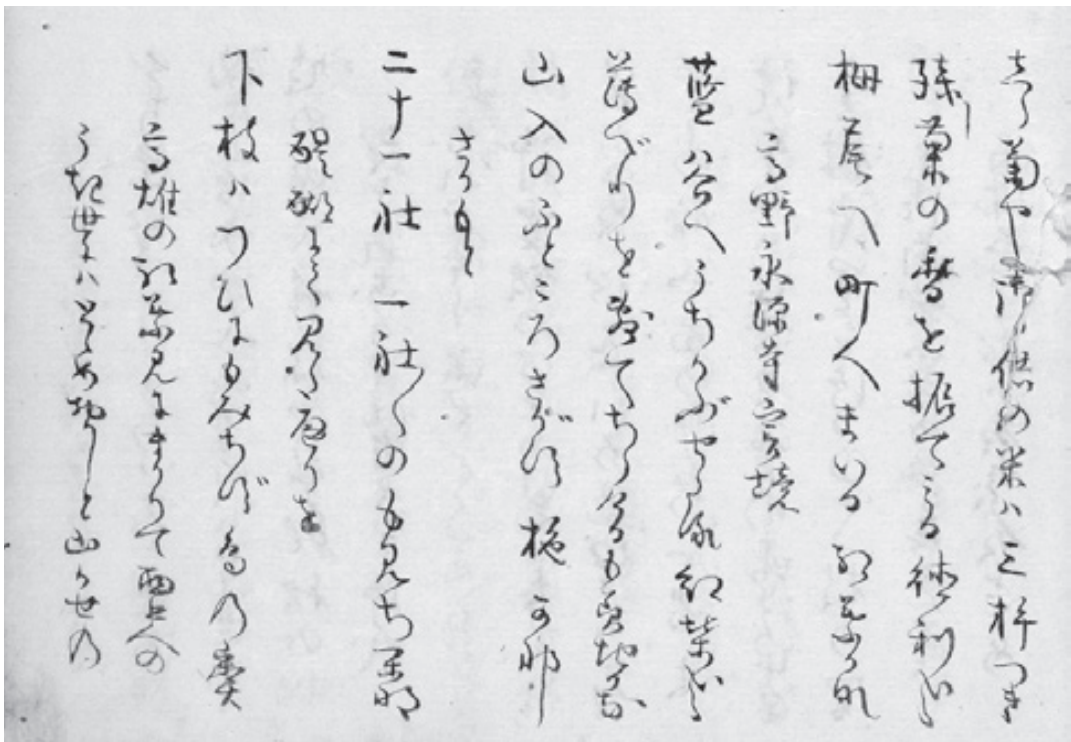
②59 綿の簀にゆがめられけり菊の花

多賀の社頭を拝むに

* 〈「乱たつ図に」〉

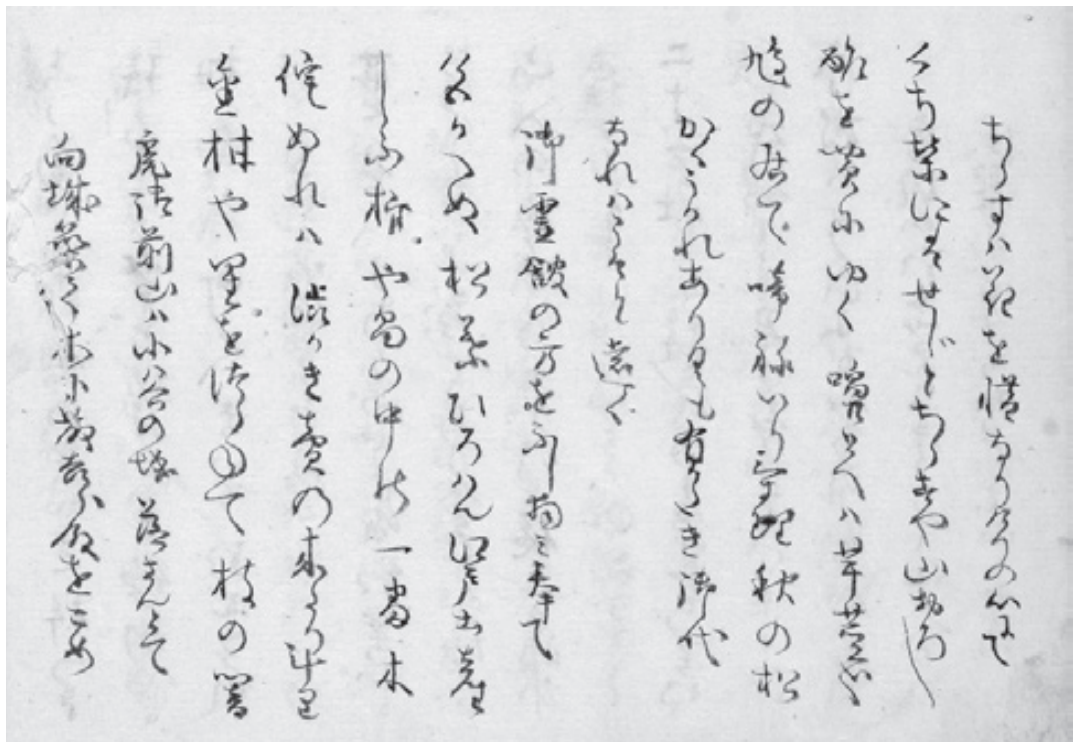
* 〈「鹿驚」〉

(一六ウ)



- 267 しら菊や御供の米は三杵つき
 268 残菊の香を振てみる徳利哉
 269 梅尾へ町人まいる紅葉かな
 高野永源寺実境
 270 藍谷へうちかぶせたる紅葉哉
 271 薄べりを敷てちらけるもみぢかな
 272 山人のふところさがす枹かな
 さかもと
 273 二十一社一社のもみぢかな
 醍醐にて見た通りを
 274 下枝はつひにもみぢず鳥の糞
 275 高雄の紅葉見にまかりて、西上人の
 うき世にはとゞめおかじと山かぜの
 (二七オ)

*〔見るまゝを〕



ちらすは花を惜なりけりの心にて

くち葉にはせじとちらすや山おろし

酔を買ひにゆく鼻とへば芋莖哉

鳩の居て啼ねいりけり秋の松

かくうかれありくも有がたき御代

なればこそと遠く

御霊館の方をふし拌み奉て

色かへぬ松葉ひろはん江戸土産

しぶ柿や畠の中の一番木

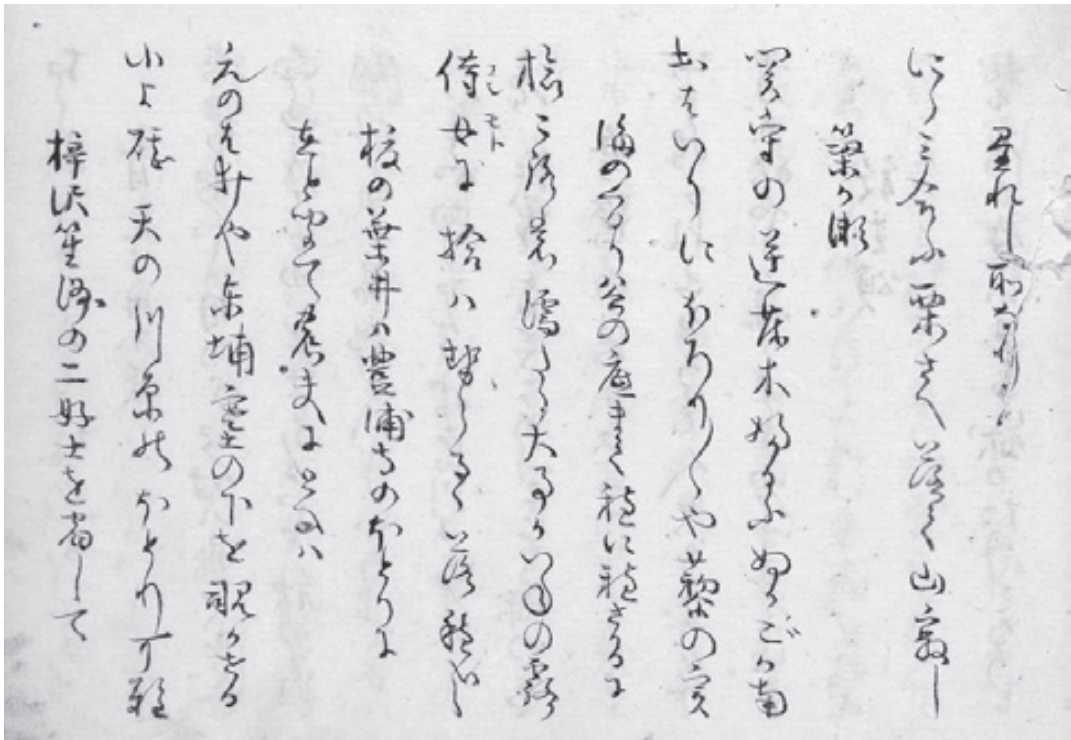
侘ぬれば洪がき売の来たりけり

金柑や里をつらねて枝の闇

虎御前、山は小谷の城落さんとして

向城築て、木下藤吉郎殿をこめ

(二七ウ)



築が瀬

関守の逆茂木ふるふぬかごかな

出はいりにほろりくや藜の実

海のぐるり谷の底まで穂に穂さかるに

旅ごろも濡たら大事がいねの露

侍女に拾はせらるゝ落穂哉

榎の葉井は豊浦寺のほとりに

在と聞て、農夫にとへば

えのは井や東埔塞の下を覗かせる

小よ礮天の川原のほとりかな

梓沢、笹洲の二好士を宿して

置れし所なり

②75 にらみ合ふ栗さへ落て山寂し

築が瀬

②76 関守の逆茂木ふるふぬかごかな

②77 出はいりにほろりくや藜の実

②78 海のぐるり谷の底まで穂に穂さかるに

②79 旅ごろも濡たら大事がいねの露

②80 侍女に拾はせらるゝ落穂哉

②81 榎の葉井は豊浦寺のほとりに

②82 在と聞て、農夫にとへば

②83 えのは井や東埔塞の下を覗かせる

②84 小よ礮天の川原のほとりかな

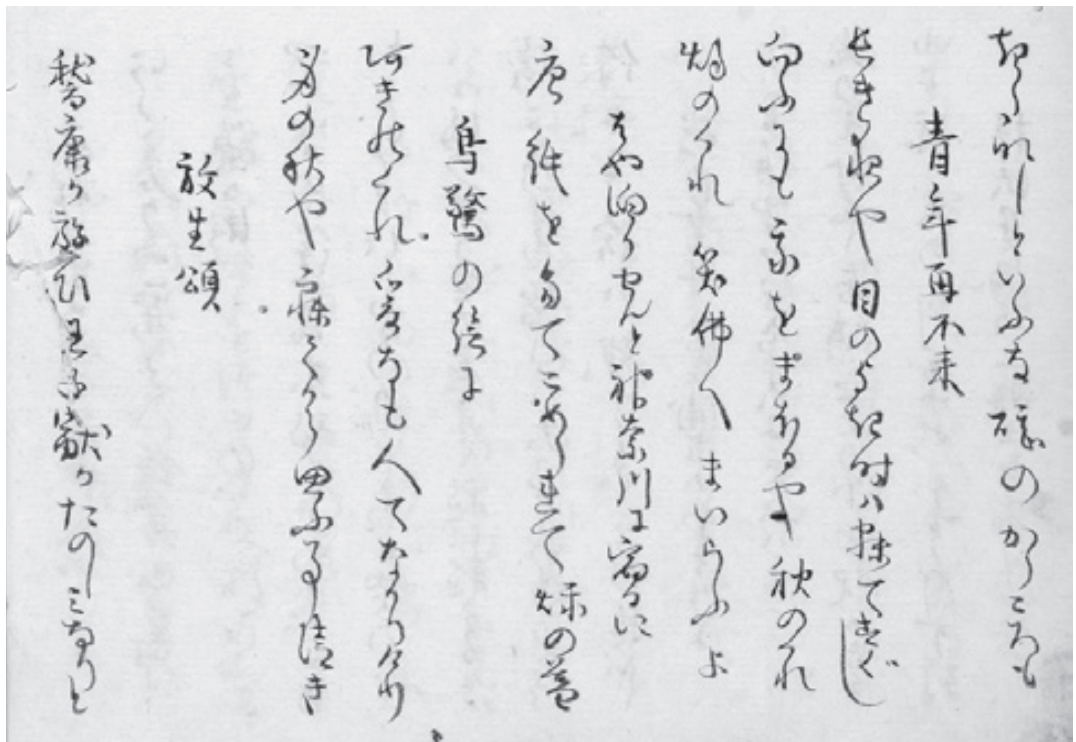
②85 梓沢、笹洲の二好士を宿して

(一八才)

* 〈なり懐古〉

* 〈柳ヶ瀬〉

* 〈までも〉



きたなしといふな礎のからごろも

青年再不来

長き夜や目のよきときは寝てすぐし

向ふにも我をまぼるや秋のくれ

秋のくれ笑仏へまいらふよ

はや泊りせんと神奈川に宿るに

唐紙をたてこめられて秋の暮

鳥驚の絵に

あきのくれ爰なも人でなかりけり

身の秋や寝てから思ふ事清き

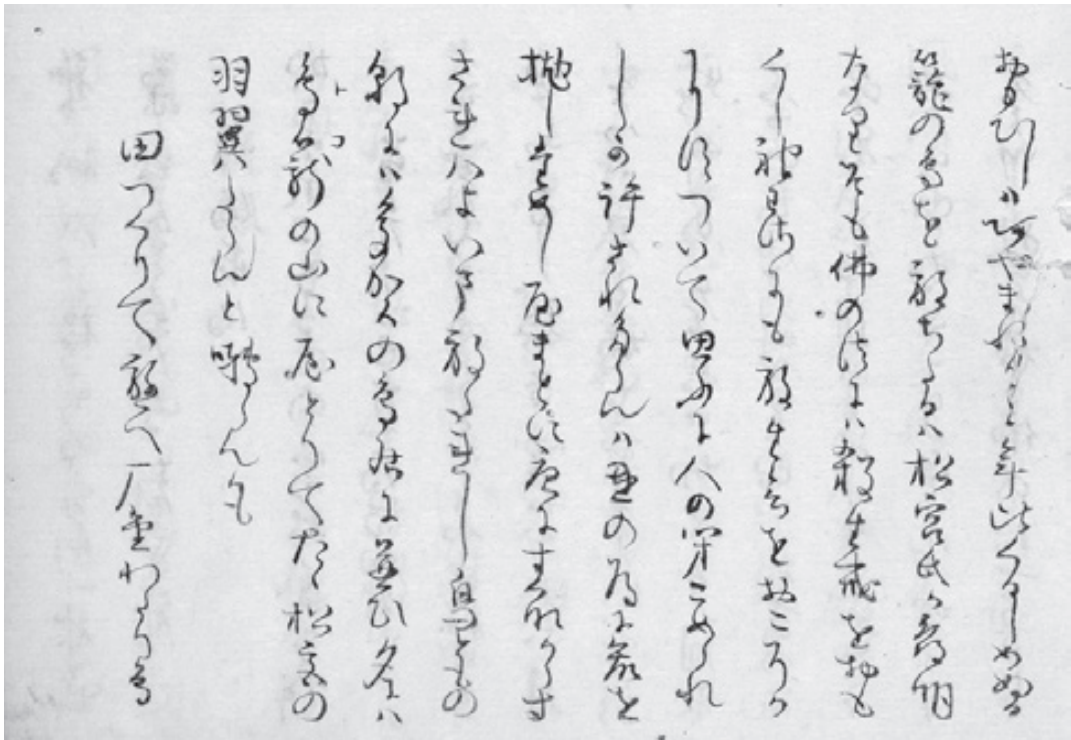
放生頌

稽康が遊び王子猷がたのしみなりと

(二八ウ)

* 〈再不^{F上}来〉

* 〈か〉



289

田つくりて遊べ雁金わたり鳥

(一九才)

おもひしはあやまれると、年頃くるしめぬる

籠の鳥を放ちたるは、松宮氏が發明

なり。そも仏の法には殺生戒をおも

くし、神わざにも放生会をおごそか

にす。ついで思ふに人の閉こめられ

しが許されたらんは、恩の為に命を

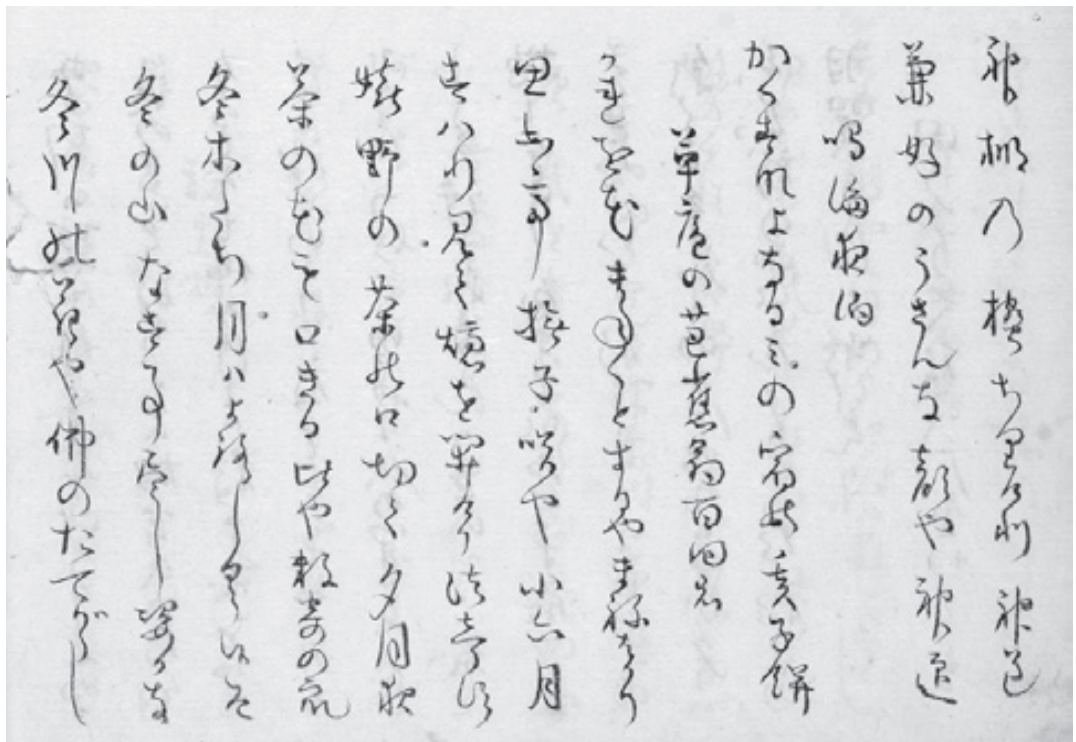
抛しためし、やまとに唐にすくなからず。

さればよ、いま放たれし鳥どもの

朝には多賀の鳥居に並び、夕には

鳥籠トリコの山にやどりて、たゞ松宮の

羽翼たらんと囀らんかも



②90 神棚の櫓ちりけり神送

②91 兼好のうきんな顔や神迎

鳴海夜泊

②92 かくすなよなるみの宿の亥子餅

草庵の芭蕉翁百回忌

②93 かれを花まねくとするやまねばかり

②94 思出て撫子咲や小六月

②95 すはり見て炬を開けり法しらす

②96 嬉野の茶の口切て夕月夜

②97 茶の花も口きる頃や数奇の衆

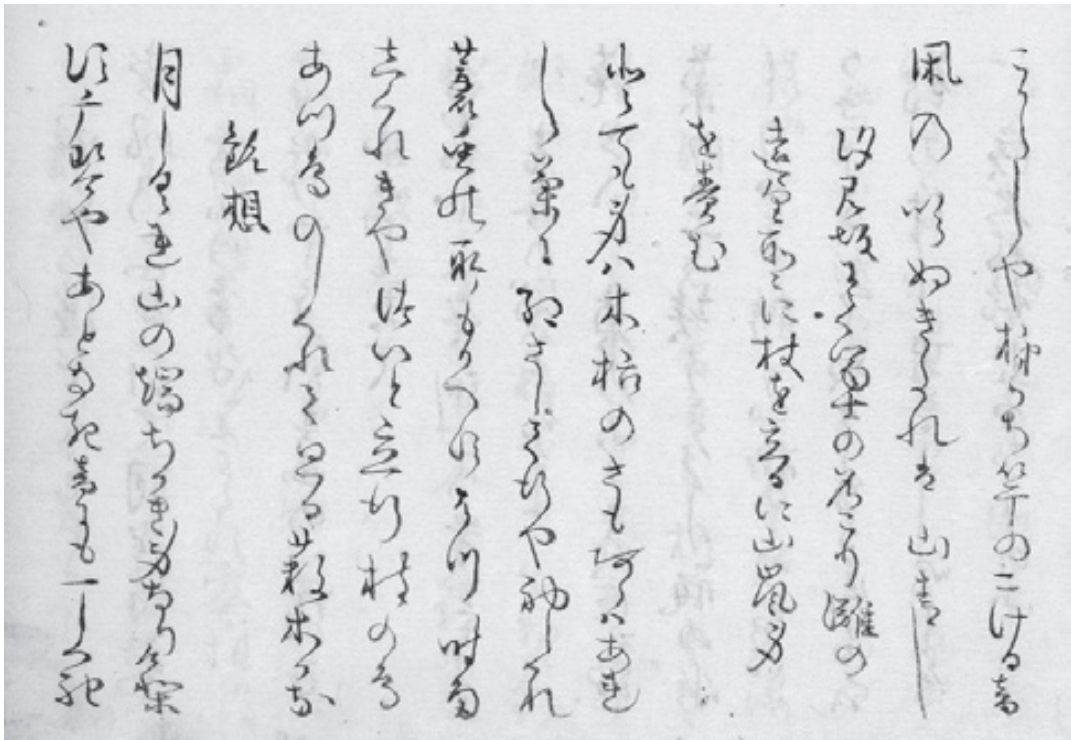
②98 冬木だち月はよろしく候ぞ

②99 冬の山なす事尽し姿かな

③00 冬川の花や仏のたてがらし

(一九ウ)

* 〔百回〕



301 こがらしや柿うち竿のこける音

302 風の吹ぬきたれば山青し

汐見坂にて富士の名ごり、灘の

遠望所々に杖を立るに、山嵐身

を責む

303 登ても身は木枯のさもあらばあれ

304 しら菊に紅さして行や初しぐれ

305 蓑虫の所もかへずはつ時雨

306 しぐれきやついと立行枝の鳥

307 あつ鳥のしぐれて廻る藪木かな

銘想

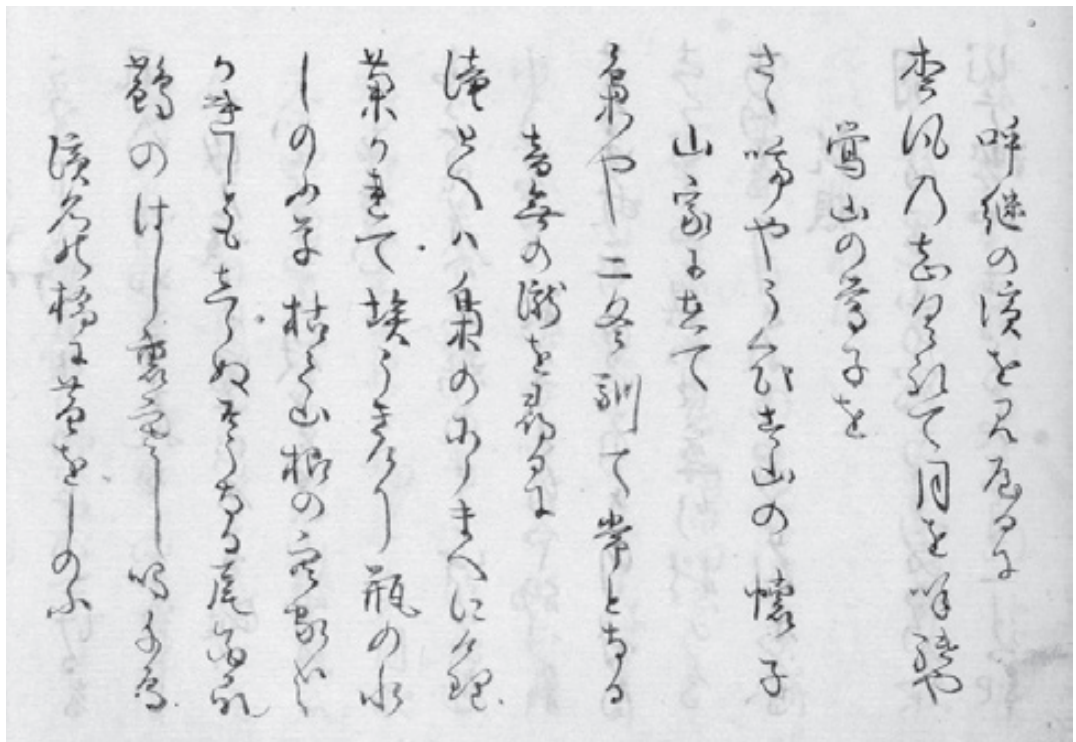
308 月しぐれ山の端ちかき身なりけり

309 須磨琴やあとなき音にも一しぐれ

* 〔雪吹〕

* 〔なし〕

(二〇ウ)



呼継の涙とるるる
 雪山の鶯子を

さ、啼やうぐひす山の懷子

山家に在て

泉や二冬馴て常とちる

音無の瀧を尋るに

瀧とへば泉のにらまへにけり

菊かれて埃うきけり瓶の水

しのぶ草枯て山根の空家哉

かれじともしらぬそうなる尾花かな

鵲のはし裏寒し鳴千鳥

浜名の橋に昔をしのぶ

呼・継・の・涙・を・見・やる・に

松風のしぐれて月を呼継や

鶯山の鶯子を

さ、啼やうぐひす山の懷子

山家に在て

泉や二冬馴て常となる

音無の瀧を尋るに

瀧とへば泉のにらまへにけり

菊かれて埃うきけり瓶の水

しのぶ草枯て山根の空家哉

かれじともしらぬそうなる尾花かな

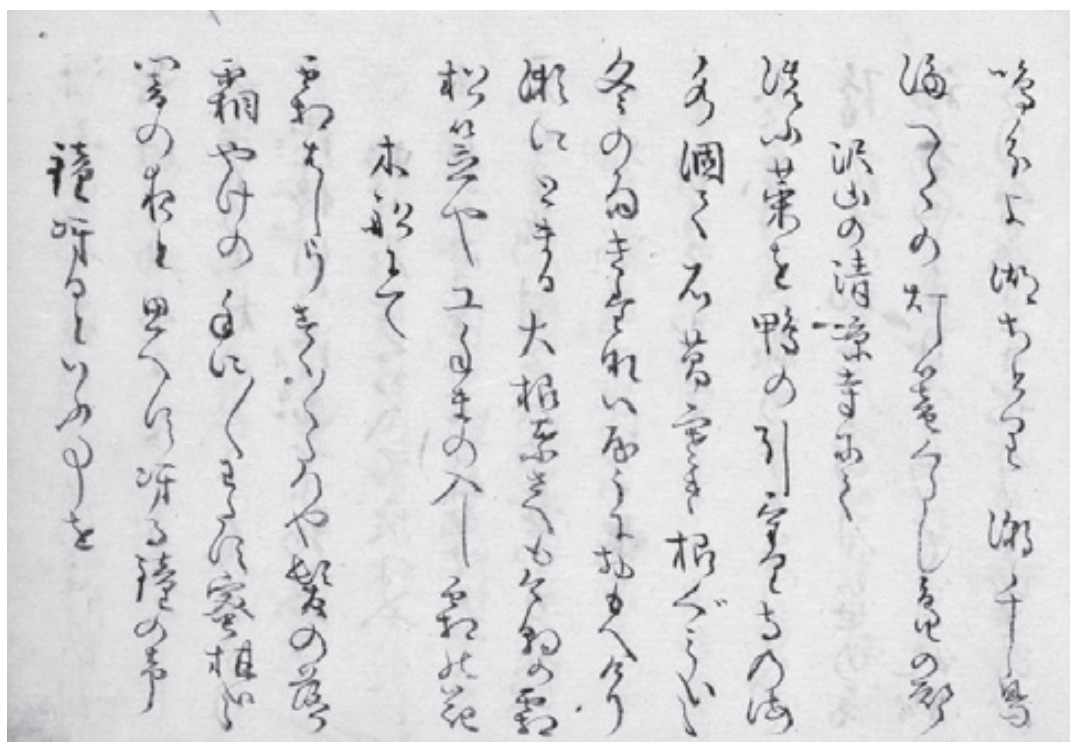
鵲のはし裏寒し鳴千鳥

浜名の橋に昔をしのぶ

* 〔呼統〕

* 〔雪〕

(二〇ウ)



③18 鳴分よ潮ちどり潮千鳥

③19 海べたの灯籠くらし梟の声

③20 沢山の清涼寺にて

③21 洗ふ菜を鴨の引けり寺の海

③22 水涸て石菖寒き根ぐみ哉

③23 冬の雨きたないやうにおもへけり

③24 瀬にとまる大根葉さへも今朝の霜

③25 松笠や工手まの入し霜の花

③26 木船にて

③27 霜ばしらすくくたつや髪花落

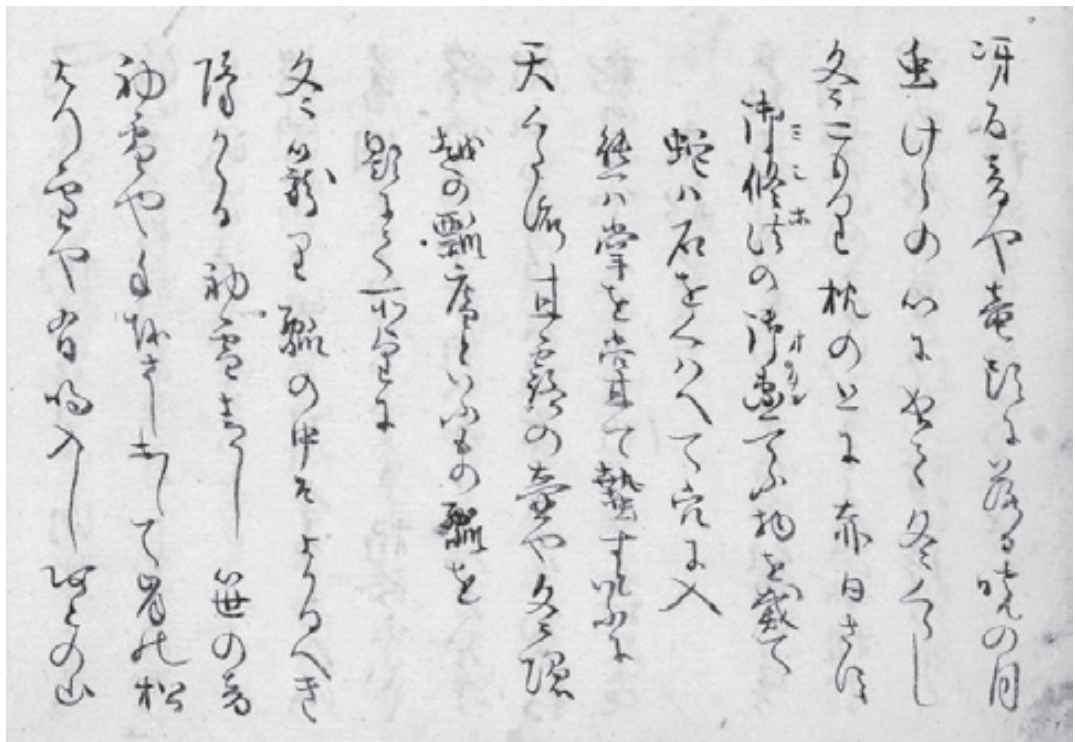
③28 霜やけの手にくわたす蜜柑哉

③29 闇の夜と思へず冴る鐘の声

③30 鐘冴るといふ事を

(二一才)

*〔汐〕

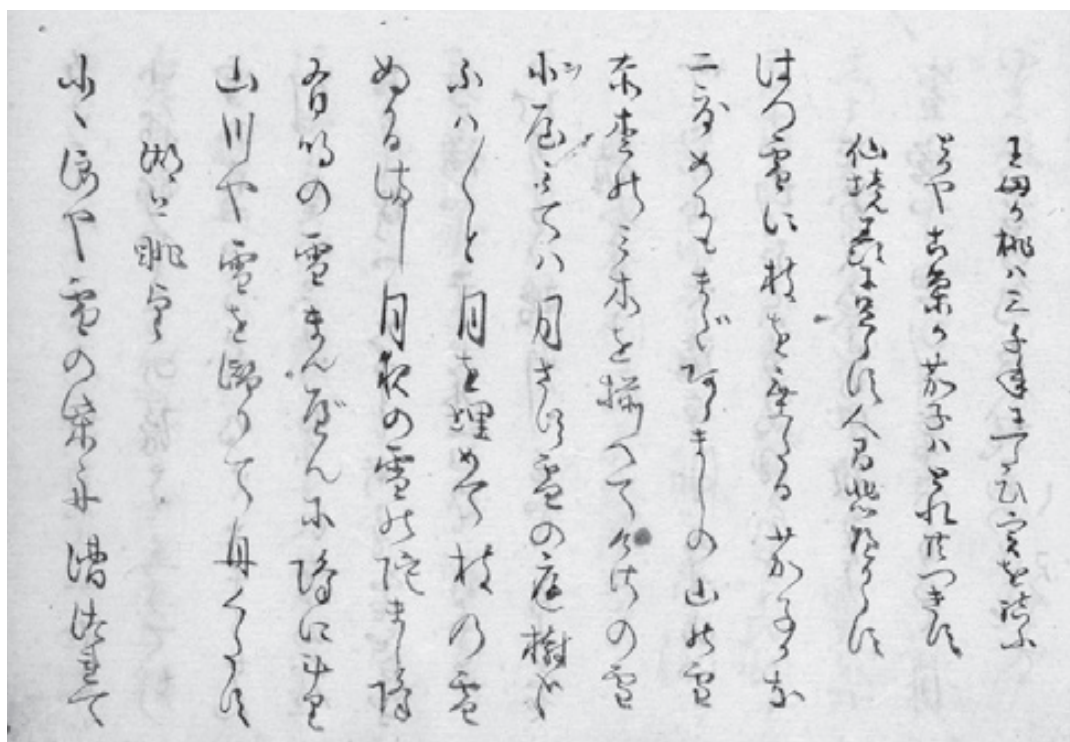


- ③28 冴る音や龍頭に落る暁の月
 ③29 虫けらの心に成て冬ぐらし
 ③30 冬ごもり枕の上に赤日さす
 御修法^{ミシホ}の御団^{オダマ}てふ物を載て
 蛇は石をくはへて穴に入、
 熊は掌を嘗て蟄すといふに
 ③31 天くだる甘露の壺や冬隠・
 越の瓢庵といふもの瓢を
 題にて所望に
 ③32 冬籠り瓢の中ぞよかるべき
 ③33 降かゝる初雪青し笹の音
 ③34 初雪や手をさし出して岸の松
 ③35 はつ雪や有明入しあとの山

(二一ウ)

* 〈冬籠〉

* 〈題して詩歌発句〉



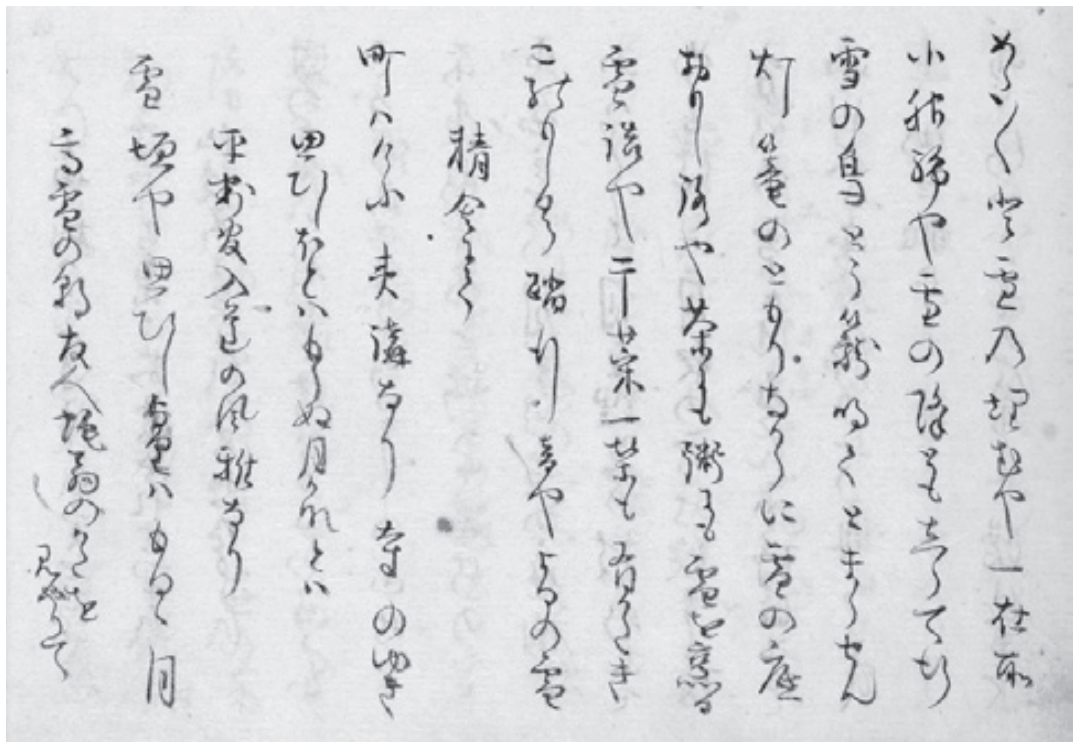
- ③36 王母が桃は三千年に一たび実を結ぶ
 とかや。古果が茄子はとれ共つきず。
 仙境羨に足らず。人間悲べからず。
 ③37 はつ雪に枝を垂たる茄子かな
 二度めにもまだあらましの山の雪
 ③38 赤松の三木を揃へてけさの雪
 ③39 小やみては月さす雪の庭樹哉
 ③40 ふはくと月を埋めて枝の雪
 ③41 ぬかるまじ月夜の雪のだまし降
 ③42 有明の雪まんべんに降にけり
 ③43 山川や雪を潜りて舟くだす
 湖上眺望
 ③44 小々浪や雪の柴舟漕つれて

(二二才)

* 〔三千とせ〕

* 〔古果園の〕

* 338 〔前書〕この句、方広法師甘心せらる。後にふと申出られしにや。広の句集に同類あり。〕



③45

めたくと雪の埋むや一在所

③46

小服綿や雪の降ともしらで行

③47

雪の鳥とう籠明てとまらせん

③48

灯籠のともりながらに雪の底

③49

おもしろや茶にも粥にも雪を煮る

③50

雪詰や干菜一葉も有がたき

③51

このもしく踏行音やよるの雪

精舎にて

③52

町はけふ夷講なり寺のゆき

思ひしほどはもらぬ月かなとは

平判官入道の風雅なり

③53

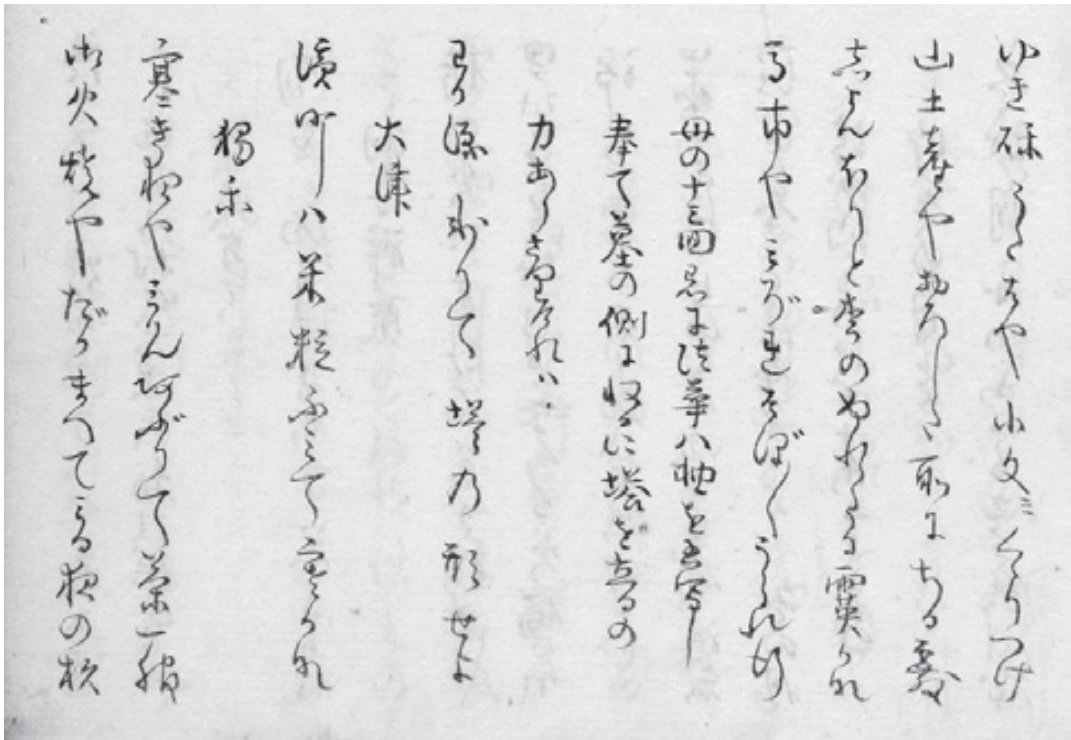
雪垣や思ひしよりはもるゝ月

高雪の朝、友人蠅翁のかたを見やりて

(二二ウ)

* 〈「に在て」〉

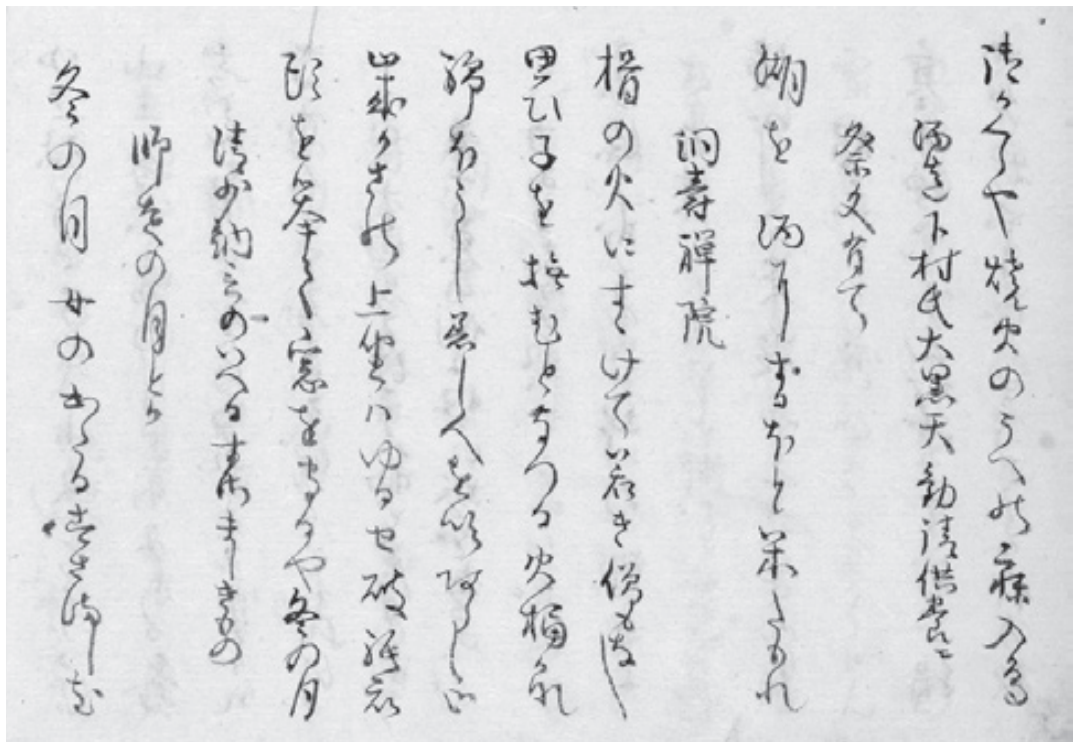
* 349 〈前書「雪詰」〉
* 〈「雪詰や」〉
* 350 〈「大雪や」〉



- ③54 ゆき礫うたばや小文ミクく、りつけ
 ③55 山土産やおろした所にちる霰
 ③56 しよんぼりと松のぬれたる葉かな
 ③57 馬市やみぞれそぼくうられ行
 母の十三回忌に法華八軸を書写し
 奉て、墓の側に収るに塔を立るの
 力あらざりければ
 ③58 わが涙氷りて塔の形せよ
 大津
 ③59 浜町は米粒ふみて寒かな
 独楽
 ③60 寒き夜やみかんあぶりて茶一服
 ③61 御火焼やだかまへてみる夜の杉

(二三オ)

* 〈しよぼく〉



③62 御かぐらや焼火のうへの寝入鳥

酒造下村氏大黒天勸請供養に
祭文有て

③63 湖を酒にするほど米たもれ

洞寿禅院

③64 櫓の火にすゝけて若き僧もなし

思ひ子を撫むとなづる火桶かな

③65 綿ぼうし着し人を吹あらし哉

歳かさの上座はゆるせ破紙衣

③66 頭を挙て窓を守るや冬の月

清少納言のいへるすさまじきもの

師走の月とか

③69 冬の月 女の出たるすさまじき

(二三ウ)

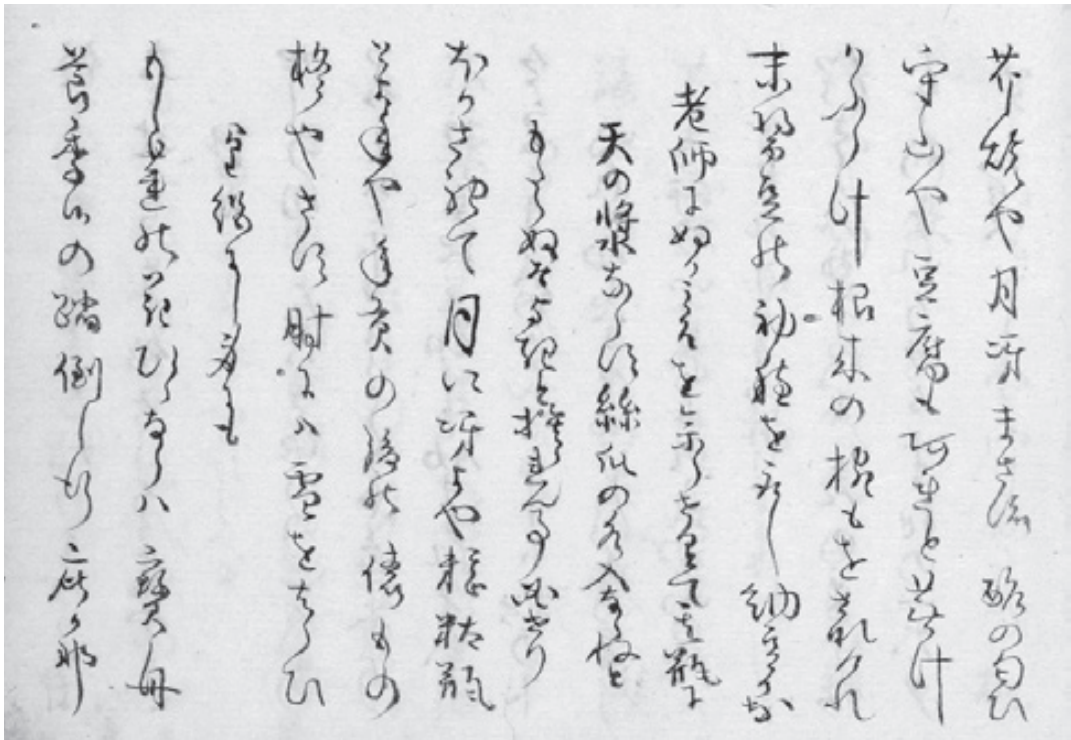
* 「下村氏」と「何某」

とする二種類の前置があり、同一句が重複して収

載

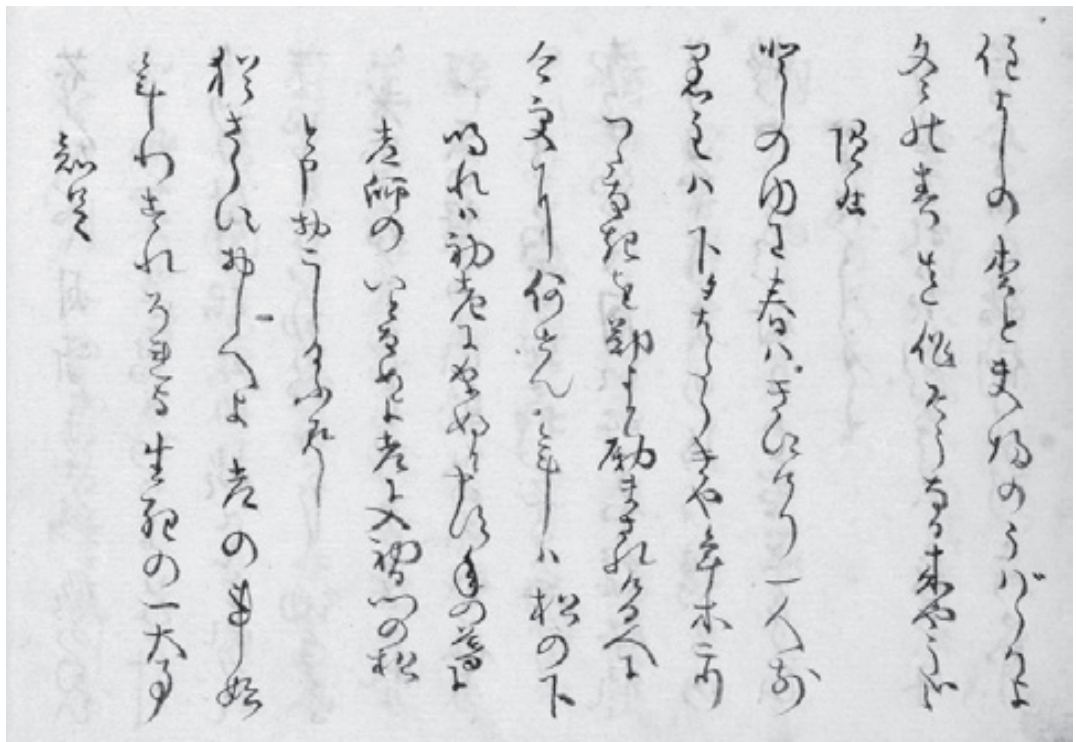
* 363 「願文」

* 「出たるぞ」



- 376 芹焼や月冴まさる酢の匂ひ
 377 守山や豆腐もあれと蕪汁
 378 かぶら汁根来の腕もをさなけれ
 379 未醬豆の初穂を取り納豆かな
 老師にぬかみそを参らせるとて、其瓶に
 天の漿ならず、糸瓜の水入ならねど
 もたらぬぞよきと捨られん事必せり
 374 ほかされて月に冴よや糶糶瓶
 375 とよ年や年貢の後の俵もの
 376 柊やさす肘には雪をはらひ
 望絶にし身にも
 377 もし蓮の花びらならば宝舟
 378 節季候の踏倒し行庇かな

(二四才)



379 住よしの松と夫婦のうばらかよ

380 冬の春造作そうなる来やう哉

隠居

381 としの内に春はきにけり一人前

382 黒主は下タばたらきや年木こり

つたなきを勤よと励まされける人に

383 今更に何せん年は松の下

明れば初老に成ぬと申す年の暮に、

老師の、いとなめよ老に入初る門の松

と申おこし給ふ返し

384 猶さらにおしへよ老の事始

年わすれそれよ生死の一大事

知足

(二四ウ)

* 〈「申こし給ふに」〉

貧しきもよしや師走の机

竹女

雪や阿きの人々きりぬき

うきふはゆきと静に春ちかし

芥子も春の隣のをくれハ

春を待ばかりになれば眠気哉

菊二老人を訪ふに

大津にも春まつ人やたき鉦

庭鳥も春まつよひの寝顔哉

行としや何思ひしも阿房なり

世のうき事申聞えし人に

よる年や耳なし山へいざゆかん

今は家業を妨るのみ

③86 貧しきもよしや師走の机

竹林

③87 鶯や師走の人のきかぬ声

③88 かみ京はゆき、静に春ちかし

③89 芹三つ葉春の隣の近ければ

③90 春を待ばかりになれば眠気哉

菊二老人を訪ふに

③91 大津にも春まつ人やたき鉦

③92 庭鳥も春まつよひの寝顔哉

③93 行としや何思ひしも阿房なり

世のうき事申聞えし人に

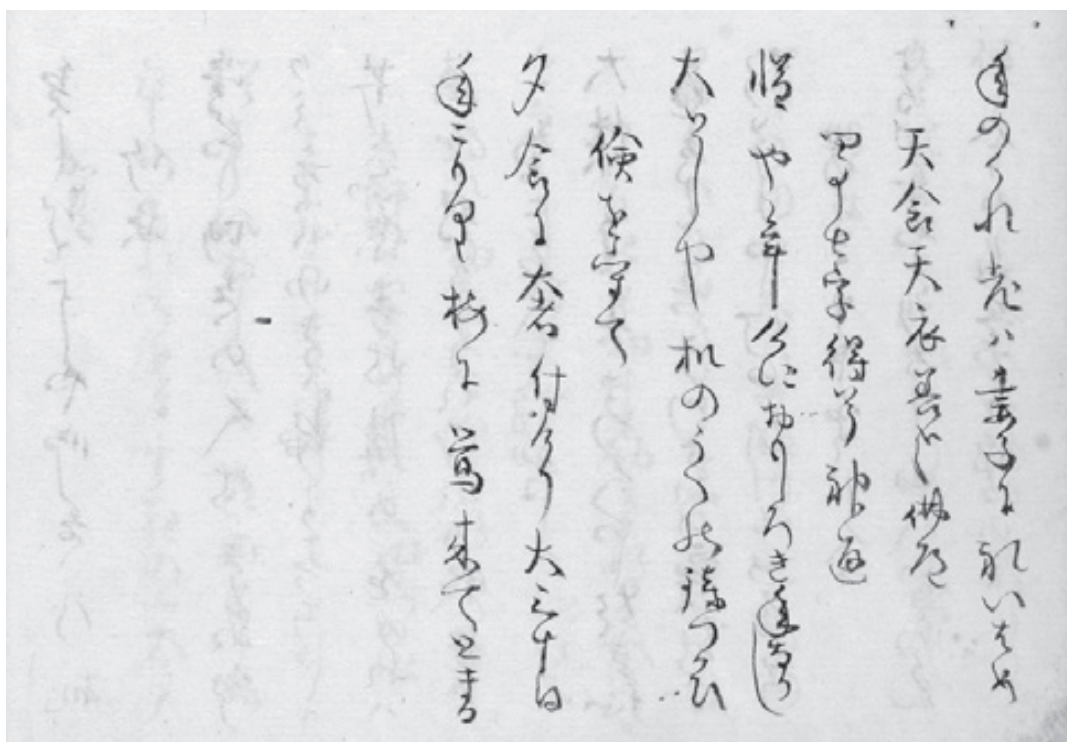
③94 よる年や耳なし山へいざゆかん

今は家業を妨るのみ

* 〔聞えける〕

* 〔のみなり〕

(二五才)



395 年のくれ老は妻子に礼いはめ

天食天衣善哉仏道

四十七字得兮神通

396 惜や年・年・に・お・も・し・ろ・き年なりし

397 大どしや机のうへの鍊つかひ

儉を守て

398 夕食に奢付けり大三十日

399 年ごもり梅に鶯来てとまる

(二五ウ)

* 〈今年さておもしろい
事〉

古巢發句集下

粟津の芭蕉堂をさがし往く
門人兩側に侍座せり 主は沂風法師と
初てしる

絵の中うごき出したる紙衣かな

但馬の髭風の湖南の浮巢庵にかり

住ひを尋るに、酒泉何がしが構の内な
りければ

酒壺の中なる鳩のうきす哉

伊吹山の初雪を、京なる、湖南なる
人々に見せまほしくて

はつ雪や告むとすれば二十余里

十三夜五升庵に侍りて
（二六才）

古巢發句集下

粟津の芭蕉堂をおがめば在すがごとくに
門人兩側に侍座せり。主は沂風法師と
初てしる。

④③ 絵の中うごき出したる紙衣かな

但馬の髭風の湖南の浮巢庵にかり
住ひを尋るに、酒泉何がしが構の内な
りければ

④④ 酒壺の中なる鳩のうきす哉

伊吹山の初雪を、京なる、湖南なる
人々に見せまほしくて

④⑤ はつ雪や告むとすれば二十余里
十三夜五升庵に侍りて

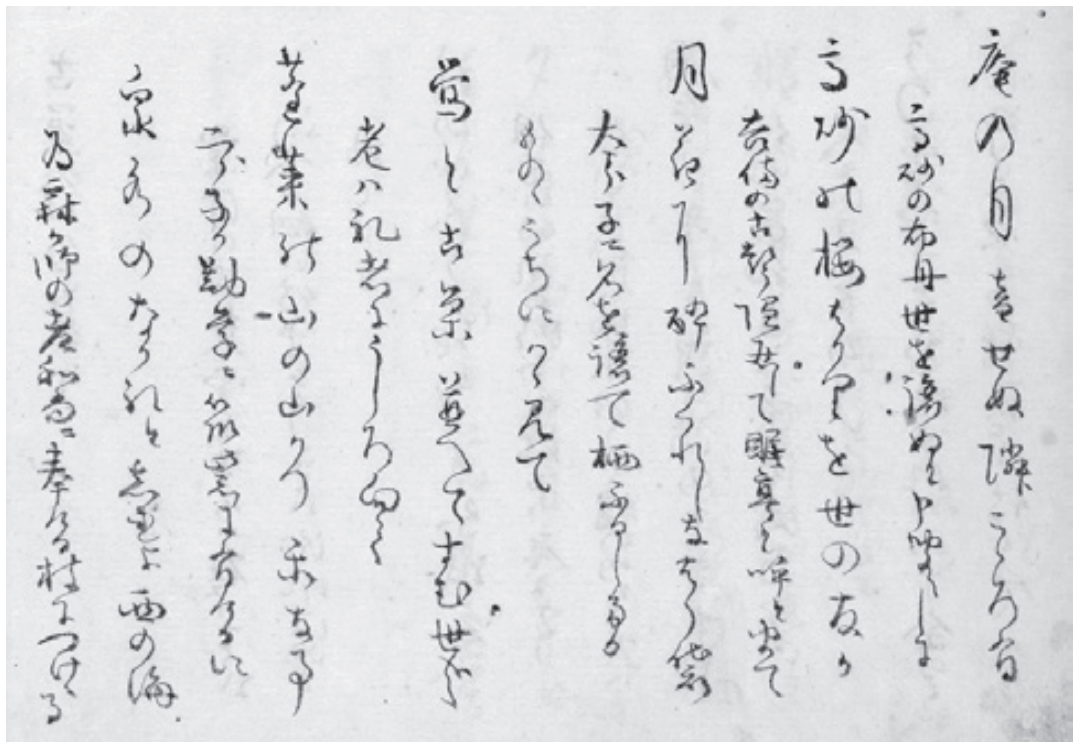
（二六才）

* 〔ことく〕

* 〔中むかし湖南の文素、
可風とてはからのすき
人の住る浮巢庵は、酒泉
何がしが構のうちに在。
但馬の髭風のかりにすま
ひけるを訪て〕

* 〔人に〕

* 〔九月十三夜〕



④03 庵の月音せぬ隣こゝろ有

高砂の布舟世を譲ぬと申聞えしに

*〔播磨高砂〕

高砂の桜ばかりを世の友か

*〔と聞え〕

吉備の古声隠居して眠亭と呼と聞て

*〔備後〕

④05 月花に酔ふくれしなはら袋

太郎子に名を譲て栖ふるしたる

*〔四十三の春太郎子〕

ものゝうちにかゝみて

④06 鶯と古巢並べてすむ世哉

老は礼者にうしろ向て

*〔なし〕

④07 蓬萊の山がつ樂な事

二郎子が勧学に筑紫に有けるに

*〔在に申遣す〕

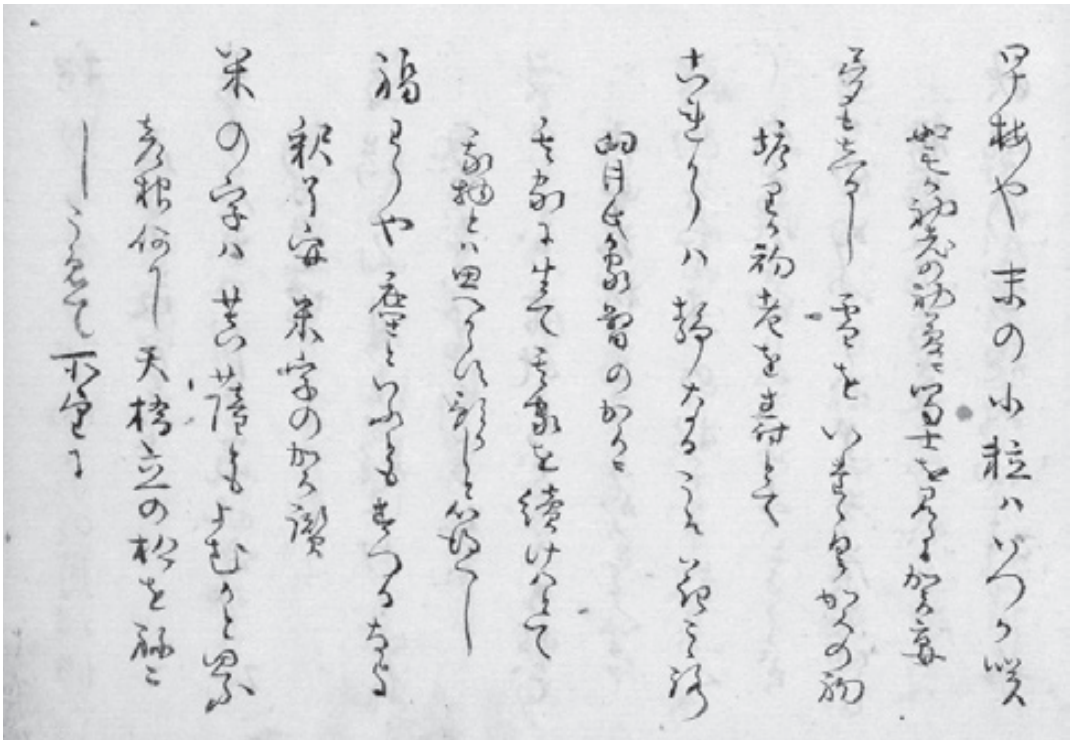
④08 泉水のながれとしれよ西の海

為霖が師の老和尚に奉ける枝につける

*〔禪師に折て〕

(二六ウ)

*〔なし〕



④09 早梅や末の小粒はいつか咲

如毛が初老の初夢に富士を見たる賀宴

④10 夢もしるし雪をいたゞく賀の初

塘里が初老を寿とて

④11 これからは静なるこそ花ごゝろ

白月氏が家督の賀に

其家に生て其家が続けばとて

我物とは思へからず。預りしと心得べし。

④12 福わらや塵といふともすつるなよ

釈了安 米字の賀讃

④13 米の字は菩薩ともよむかと思ふ

彦根何がし、天橋立の松をねご

しうゑて所望に

(二七才)

* 〈多賀の如毛〉

* 〈富士山〉

* 〈賀宴に〉

* 〈土田の塘里の〉

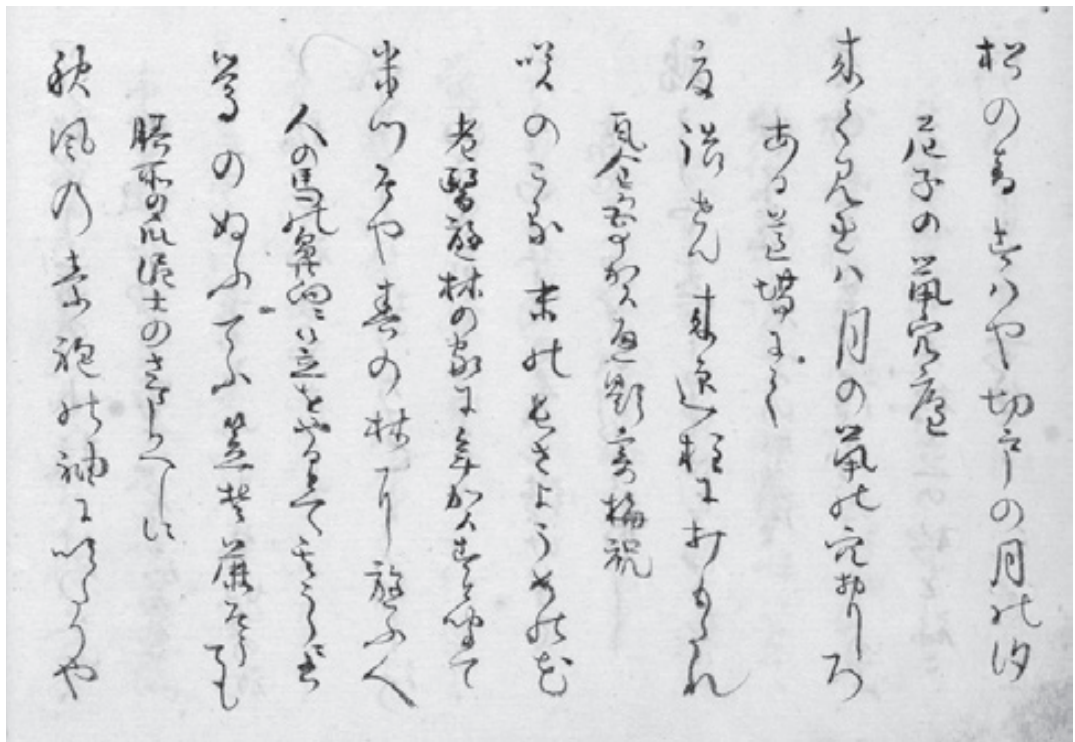
* 〈只静なれ〉

* 〈白井氏家督賀〉

* 〈継げ〉

* 〈八十八才米字の讃〉

* 〈彦根何某庭に〉



④④ 松の音すはや切戸の月の汐

尼子の鼠穴庵

④⑤ 来て見れば月の鼠の穴おもしろ

ある道場にて

④⑥ 夏話せん来迎柱に打もたれ

瓦全が五十賀通題寄梅祝

④⑦ 咲のこる末の長さようめの花

老医遊林の家に年賀すと聞て

④⑧ 幾つぞや春の林に遊ぶ人

人の馬の鼻向に笠をやるとて其うらに書

④⑨ 鶯のぬふてふ笠ぞ籠そうても

膳所の瓜泥土のさまかへしに

④⑩ 秋風の素袍の袖に吹たりや

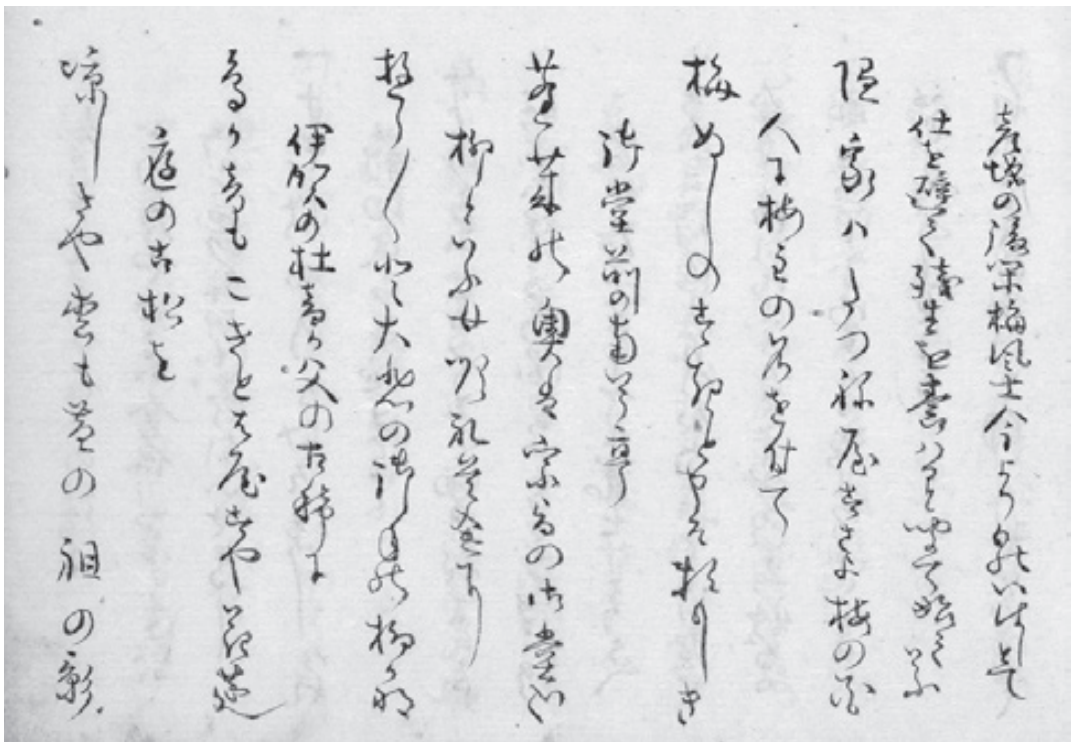
(二七ウ)

* 〈「瓦全」は「人の」を訂正。〉

* 〈「老医平尾遊林の年賀に」

* 〈「人に馬の鼻むけに笠をかくるとて」

* 〈「膳所鈴木瓜泥土の官をやめてさまかへしに」



④21

彦城の後閑梅風士、今よりものいはじとして
仕を避て残生を養はる、と聞て始てとふ
隠家はたづねやすさよ梅の花
人に梅主の名を付て

*〔官〕

④22

梅ぬしのすきと申ぞ頼もしき
御堂前の南兮亭

*〔御堂前南兮亭にて〕

④23

蓬萊の奥は宗旨の御堂哉
柳といふ女巡礼首途に

*〔女の巡礼〕

④24

ゆらくと大悲の御手の柳かな
伊賀の杜音が父の古稀に

*〔古稀賀に〕

④25

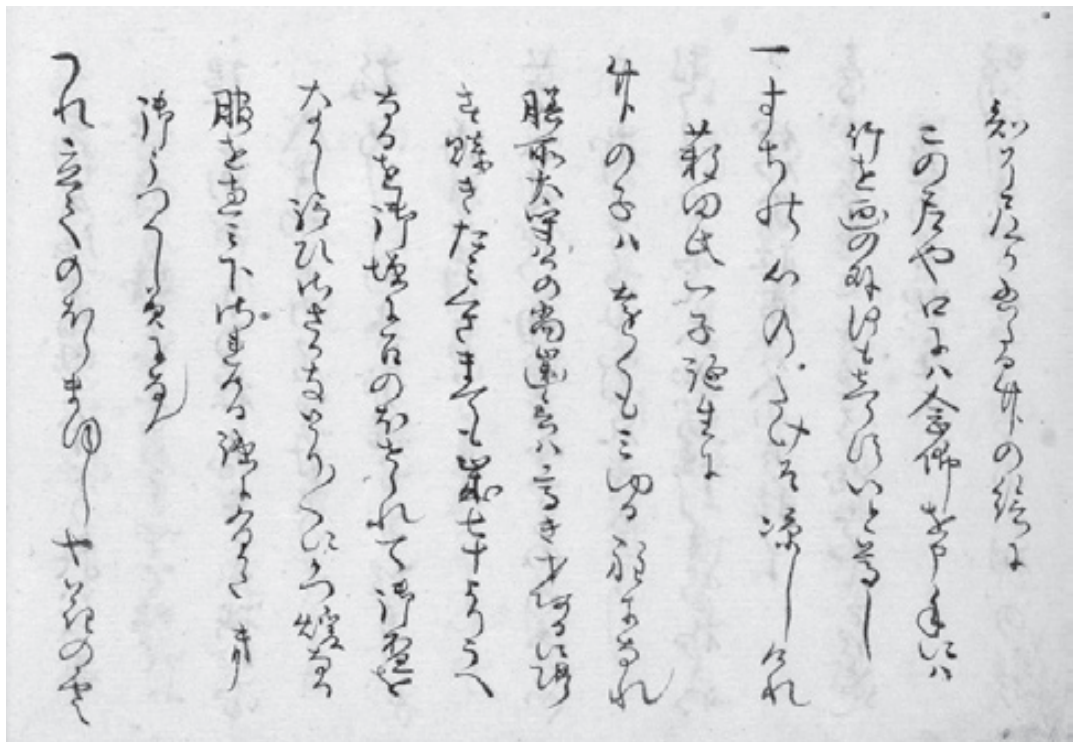
鳥が音もこきとはやすや花筵
庭の古松を

④26

涼しさや松も昔の祖の影

(二八才)

*〔吾家の庭の松の古く
いやさかゆるを歎ぶ〕



知了尼が書たる竹の絵に

この尼や口には念仏を申、手には
竹を、画の外何もしらず。いと尊し。

④27 一すぢの心のたけぞ涼しけれ

薮田氏一子誕生に

④28 竹の子は遠くも見ゆる程になれ

膳所・太守公の尚齒言は、高き才あるに限ら
ず、賤きたみくさまでも歳七十よりうへ
なるを御城に召のぼせられて、御盃を

*「わが膳所の君」の
「の君」は「太守公」を
訂正

ながし給ひ御さかなとりぐにかつ燂なる

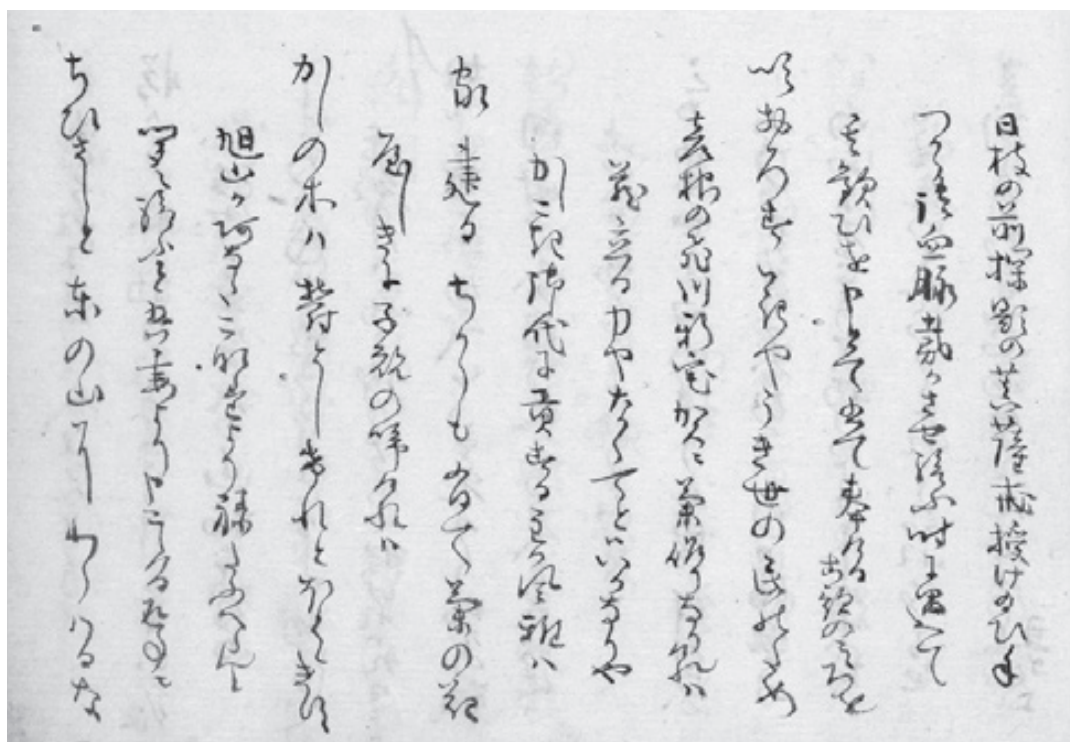
*「衣」

服を恵み下されける。誠に有がたき
御うつくしみになん

*「いつくしみ」

④29 つれ立てのぼらまほしや花の雲

(二八ウ)



④30

吹おろす花やうき世の民のため

彦根の飛川新宅賀に菊作りなりければ、
藏立る力やなくてとは、いかなりや。

* 〈深山氏飛川が〉
* 〈菊作〉

④31

家建るちからも有て菊の花

やしきに子規の啼ければ

④32

かしの木は鬱としけれとほとゝぎす

旭山があなたこなたより祿たふべらんと

聞え給ふを吾妻より申しける返事に

④33

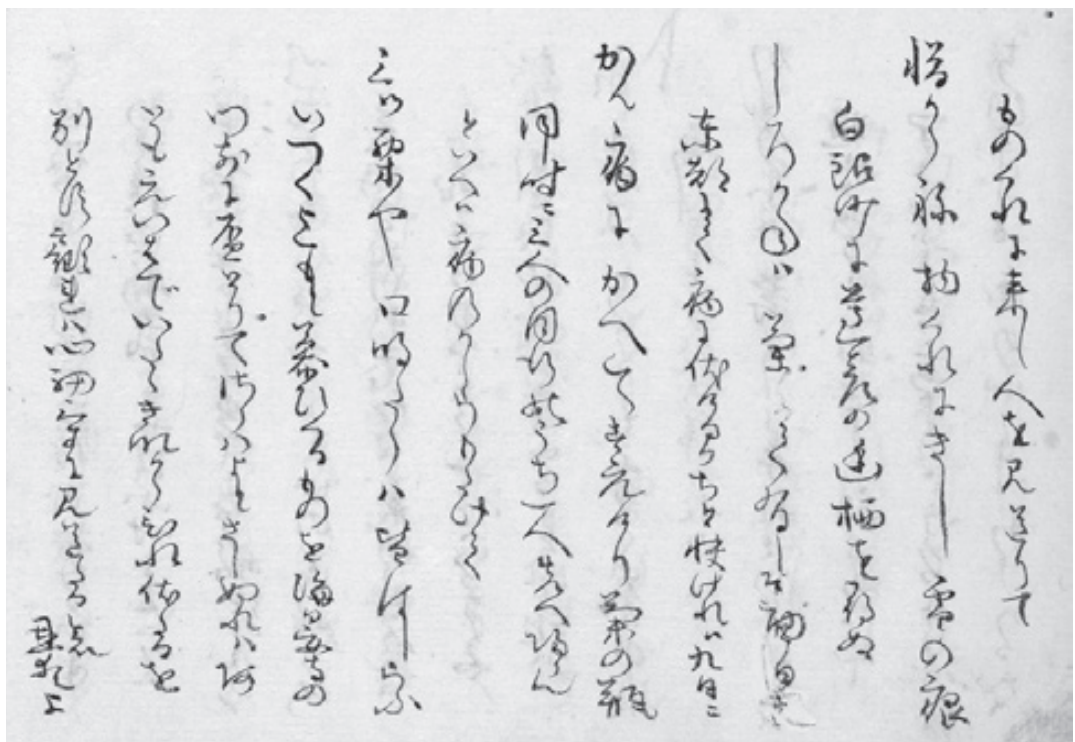
ちひさしと東の山にわらはるな

(二九才)

* 〈給ふと申きこえける
ま、吾妻へ申遣しける。
旭山後二申暢名ヲ昶ト
云〉

* 〈前の〉

* 〈奉ける〉



ものくれに来し人を見送りて

④34

憎からぬ物くれにきし雪の痕

白銀町に道彦の幽栖を尋ぬ

④35

しろがねは菊で有しぞ面白き

東都にて病に伏けるが、ちと快ければ九日に

④36

かん病にかへてすえけり菊の瓶

同じ時に三人の同行のうち二人先へ帰らん

といへば、病のかしらもたげて

④37

三つ栗や口明たらば皆はじらふ

いづく迄もと慕ひくるものを、海晏寺の

門前に盆とりて、さらばよとさしぬれば、何

ともえいはでいたきながら、ひれ伏たるを

別とす。顧れば、心細気に見送たる哀恩愛よ。

(二九ウ)

* 〈見送るとて〉

* 〈村上道彦〉

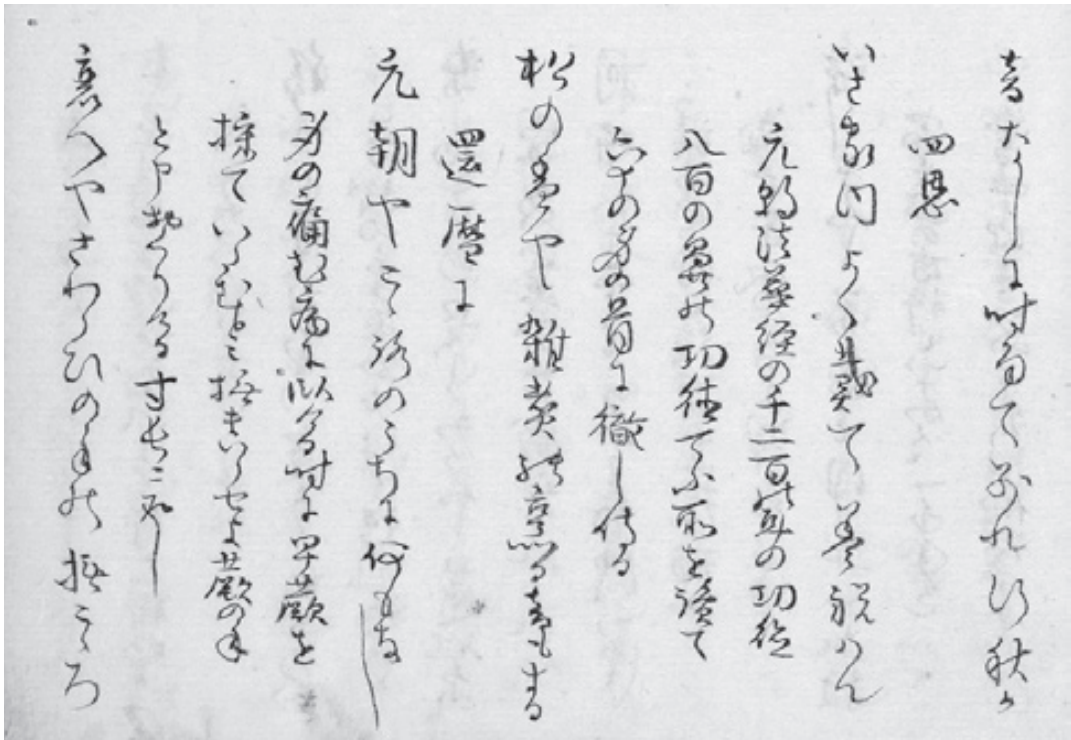
* 〈とふ〉

* 〈菊にて〉の「に」を
見せ消し

* 〈おもしろし〉を「お
もしろき」に訂正。

* ④36 〈江戸〉 * 〈なし〉

* 〈視がいつこ〉
* 〈なし〉



⑬ 音なしに時雨で別れ行秋か

四恩

⑭ いざ家内よく戴て羹祝はん

元朝法華經の千二百の耳の功德

八百の鼻の功德でふ所を讀て

六十の身の骨に徹し侍る

⑮ 松の香や雑煮の烹る音もする

還曆に

⑯ 元朝やこゝろのうちに何もなし

身の痛む病に臥ける時に、早蕨を

採て、いたむとこ撫まいらせよ。蕨の手

と申おくりける寸長に返し

⑰ 衰へやさわらびの手の撫ごゝろ

(三〇オ)

* 〈神仏の影 御代の影

親の恩 師の恩〉

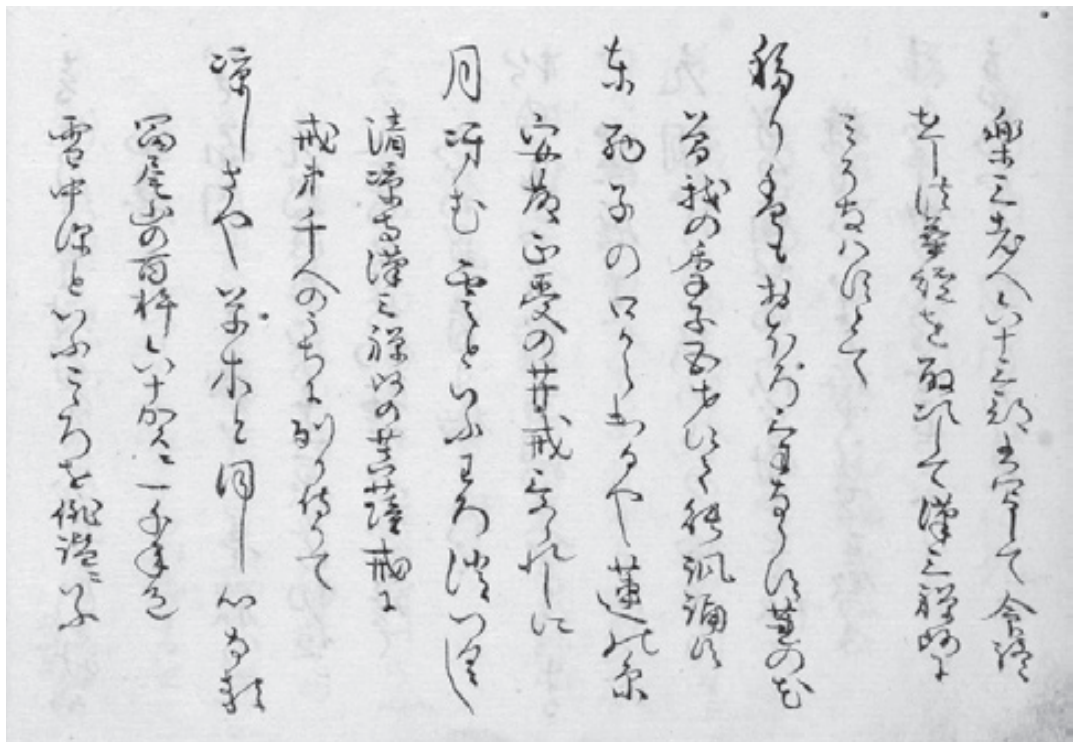
* 〈「や」を訂正して「ん」

* 〈「と云」

* 〈「老が」

* 〈「本卦の春を迎へて」

* 〈「山の早蕨」



樂三老人六十部書寫して命終
在し法華經を取次して菴三禪師に
みそなはすとて

移り香もおほろげならず蓮の花

曾我の季子五才にて能諷誦す

東西子の口から出るや蓮の糸

安藤正受の菩薩戒受られしに

月牙む雲といふわろ消つくし

清涼寺菴三禪師の菩薩戒に

戒弟千人のうち一に列り侍りて

涼しさや草木と同じ心なる

富尾山の百杵六十賀に一千年色

雪中深といふころを俳諧にいふ

樂三老人六十部書寫して命終

在し法華經を取次して菴三禪師に

みそなはすとて

移り香もおほろげならず蓮の花

曾我の季子五才にて能諷誦す

東西子の口から出るや蓮の糸

安藤正受の菩薩戒受られしに

月牙む雲といふわろ消つくし

清涼寺菴三禪師の菩薩戒に

戒弟千人のうち一に列り侍りて

涼しさや草木と同じ心なる

富尾山の百杵六十賀に一千年色

雪中深といふころを俳諧にいふ

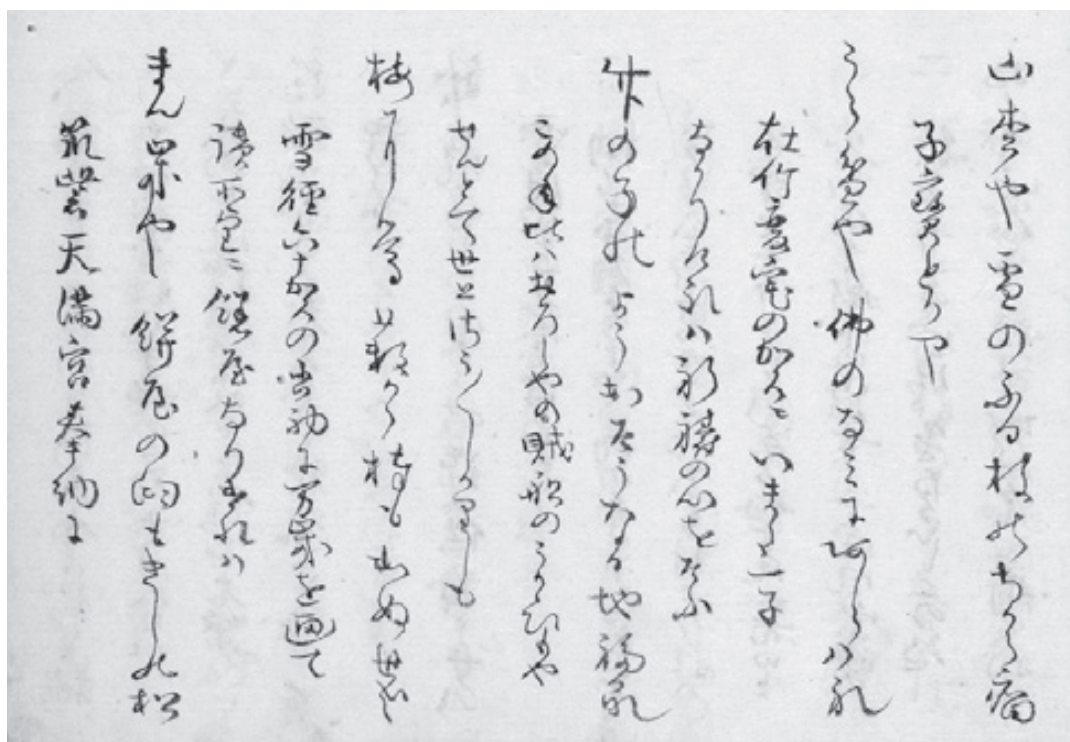
(三〇ウ)

* 〈嘉瀬井樂山〉

* 〈僕三禪師に〉

* 〈に取次して〉

* 〈清涼寺にこもりて三世諸仏の御名を唱へて、菩薩戒授り侍りて〉



④⑦ 山松や雪のふる枝のちから瘤

子宝とかや

④⑧ うら盆や仏のなみにあしらはれ

・在・竹・菱・宅・の・賀・に、いまだ一子
なかりければ・祈・禱・の・心・を・そ・ふ

④⑨ 竹の子のよう出そうなる地福かな

この年頃は・お・ろ・し・や・の・賊・船・の・う・か・び・も・や
・せ・ん・と・て・世・上・さ・う・く・し・か・り・し・も

⑤⑩ 梅に鶯藪から棒も出ぬ世哉

雪径六十賀の書初に、万歳を画て
讃所望に、・饅・屋・な・り・け・れ・ば

⑤⑪ まん歳や餅屋の白もきしの松

筑紫天満宮奉納に

(三二才)

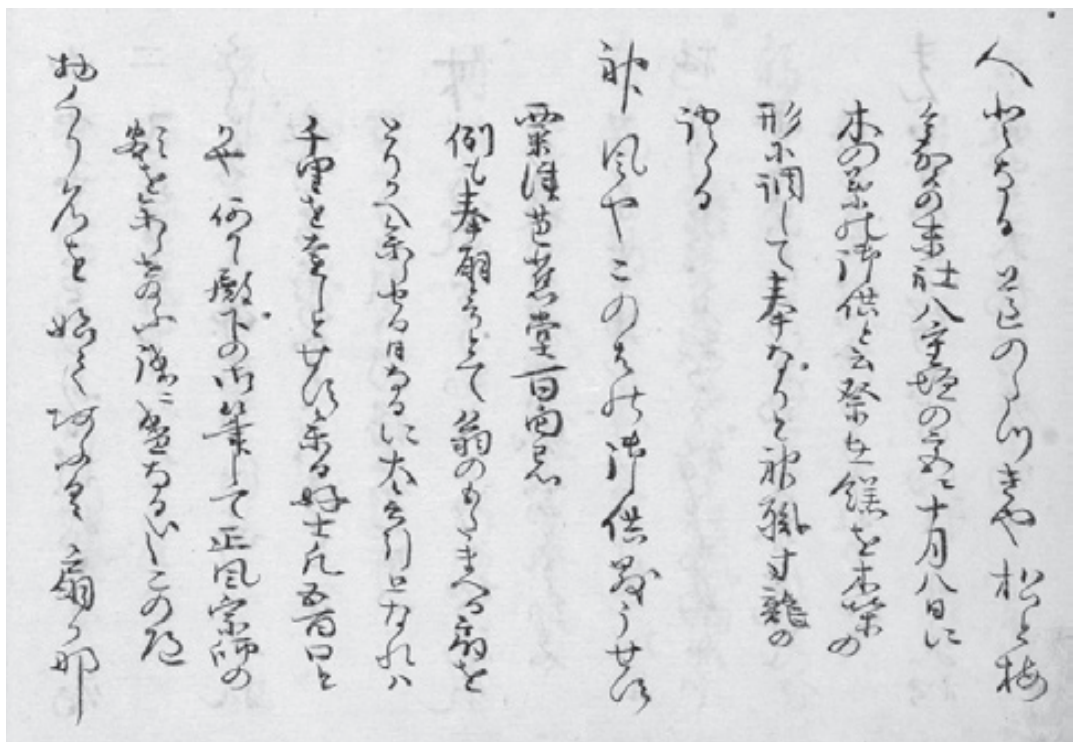
* 〔九百回法衆〕

* 〔在竹宅を繁昌の地へ
移しける〕

* 〔あらざれば〕

* 〔なし〕

* 〔するとして世上いと〕



④52

人となる道のたつきや松と梅

多賀の末社八重垣の宮に十月八日に

木の葉の御供と云祭在。饅を木葉の

形に調じて奉なりと神職寸龍の

語らる

*〈なし〉

*〈何某寸龍〉

④53

神風やこのはの御供散うせず

粟津芭蕉堂百回忌

例も奉扇会とて、翁のたまへる扇を

とりかへ参らせる日なるに、大会引上なれば

千里を遠しとせず参る好士凡五百口と

かや。何がし殿下の御筆して「正風宗師」の

額を参らせ給ふ。誠に盛なる哉この道。

*〈「三百歌仙満座す」

*〈「百年忌 寛政五丑年
四月十日より十二日迄」

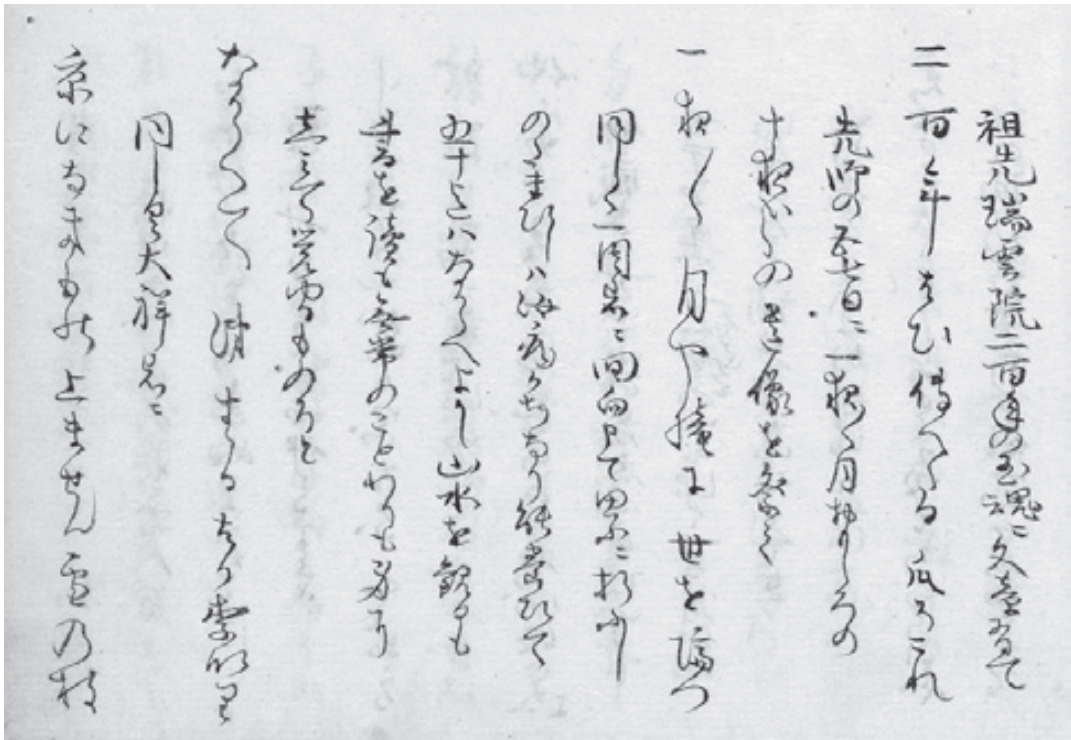
*〈「餅ひ」

④54

おくり名を始めてあふぐ扇かな

(三二ウ)

*〈「号」



④55

祖先瑞雲院二百年の玉魂に文章有て

*〔玉祭〕

二百年はひ伝へたる瓜ぞこれ

*〔五七日に愛知川の蓮泉寺にて追福会に〕

先師の五・七・日に一夜／＼月おもしろの
十夜哉の遺像を祭て

*〔崇て〕

④56

一夜／＼月や朧に世を隔つ

同じく一周忌に回向申て思ふに折ふし

*〔先師の像に〕

のたまひは、汝病がちなり。能養ひて

*〔ある時に〕

五十迄はながらよかし。山水を観るも、

*〔ながらへて〕

書を読も、無常のことわりも、身に

*〔見るも〕

しみて覚ゆるものぞと

④57

ながらへて涕すゝるばかりなり

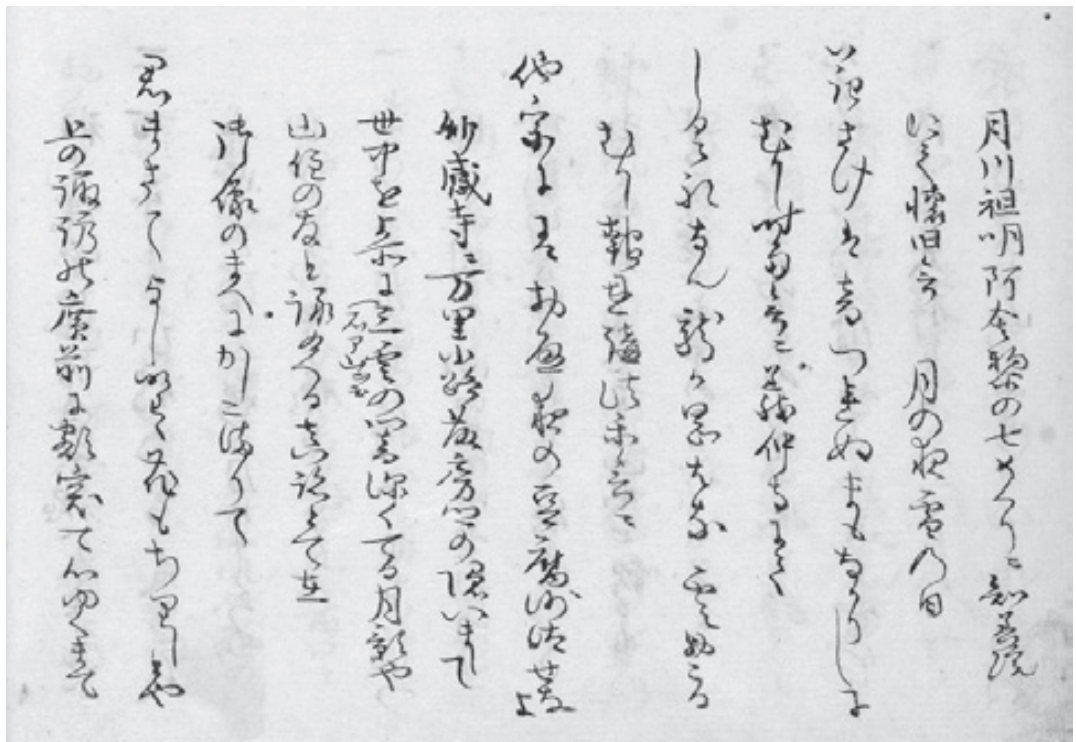
同じく大祥忌に

*〔先師十三回に〕

④58

京になきもの上ません雪の枝

(三三才)



月川祖明阿舎黎の七めぐりに知善院
にて懐旧会 月の夜雪の日

花さけば音づれぬまもなかりしに

むかし時雨会に義仲寺にて

しぐれなん龍が岡はな雲おこる

むかし報恩講法樂会に

他宗にはお通夜の豆腐沙汰せなよ

妙感寺に万里小路藤房卿の隠いまして

世中をよよに三雲の闇深くてる月影や

山住の友と詠給へる真跡とて在

御像のまへにかしこまりて

君まさでよし野の花もちりしとや

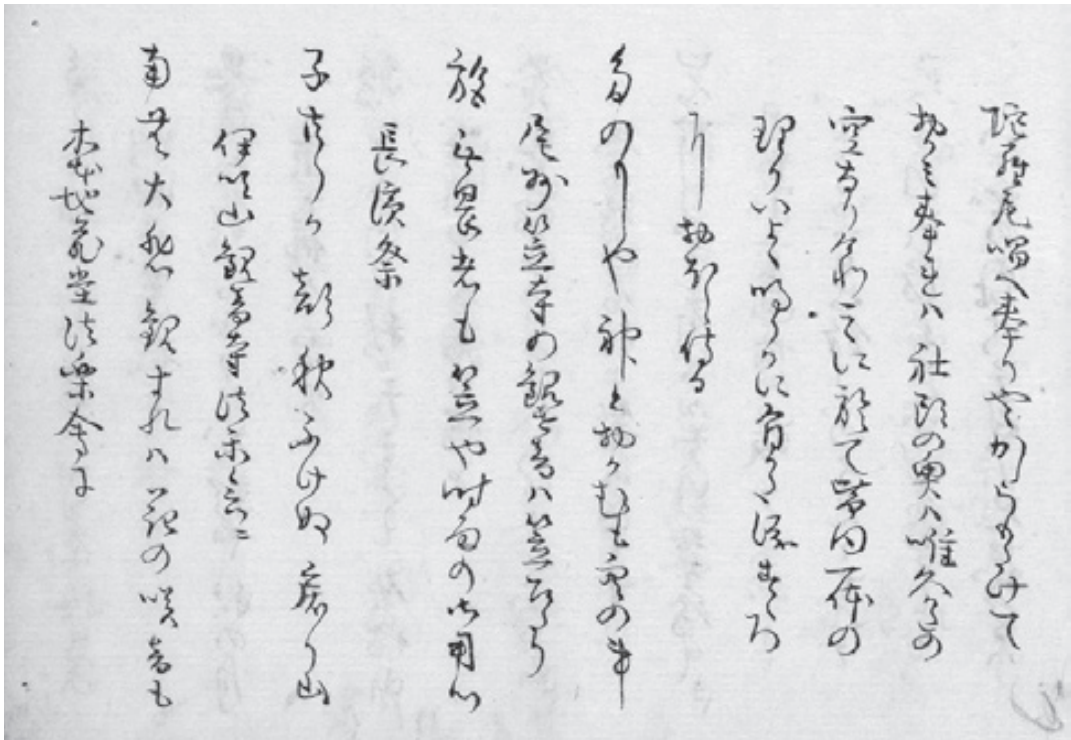
上の諏訪の広前に額突て心ゆくまで

* 〈同じ人の七年忌に〉

* 〈法樂会の追加に〉

* 〈詠じ〉

(三二ウ)



陀羅尼唱へ奉りや、かしらもたげて
おがみ奉れば、社頭の奥は唯久かたの
空なりけり。こゝに於て皆同一体の
理りいよ、明らかに有がた涙すゝろ
におほえ侍る

たのもしや神とおがむも空の事

尾州笠寺の観世音は笠召たり

④63 たのもしや神とおがむも空の事
尾州笠寺の観世音は笠召たり

④64 施無畏者も笠や時雨の御用心

長浜祭

④65 子供らが顔秋ふけぬ戻り山

伊吹山観音寺法楽会に

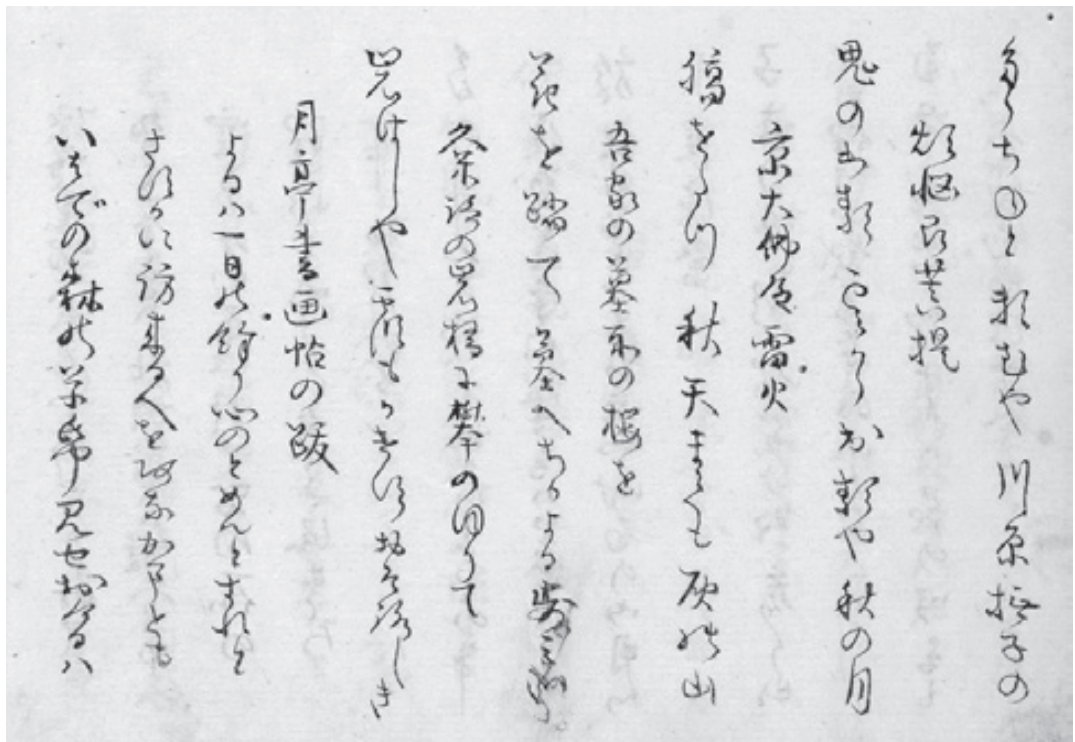
④66 南無大悲観すれば花の咲音も

木・本・地・蔵・堂・法・楽・会・に

(三三才)

*〔木本長祈山地蔵尊法
楽に〕

*〔着ませり〕



煩悩即菩提

鬼の如き心もかたや秋の月

京大仏殿雷火

懐きし秋天主も灰の山

吾家の墓所の桜を

花を踏で墓へちかよる歩み哉

久米路の岩橋に攀のぼりて

岩はしや霞もかけずおそろしき

月亭書画帖の跋

よるは一日の余り心のとめんとすれど、

さすがに訪来る人を、あなかもとも

いはでの森の草紙見せおけるは、

④67 たらちねと頼むや川原撫子の

煩悩即菩提

④68 鬼の出る雲から出るや秋の月

京大仏殿雷火

469 腹をたつ秋天までも灰の山

吾家の墓所の桜を

④70 花を踏で墓へちかよる歩み哉

久米路の岩橋に攀のぼりて

④71 岩はしや霞もかけずおそろしき

月亭書画帖の跋

よるは一日の余り心のとめんとすれど、

さすがに訪来る人を、あなかもとも

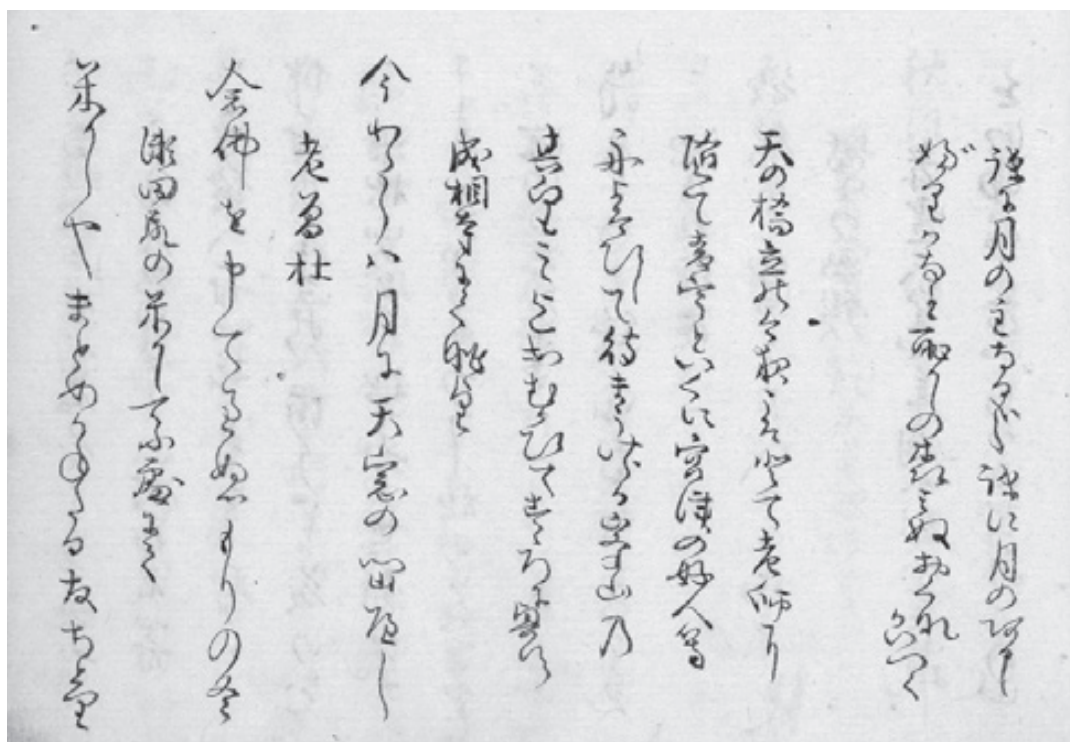
いはでの森の草紙見せおけるは、

(三三三ウ)

* 〈「たらちねと」の「め」の右側に「ね」を書き添える〉

* 〈閑田先生幻阿上人の供せし時〉

* 〈月亭書画帖の跋文なし〉



誠に月の主なる哉、誠に月のあるじ
ぶりかなと、恥かしの森みぬおくれいつく

* 〈月みんと〉

天の橋立の今夜こそとて、老師に
随て麦宇といくに、宮津の好人等

舟よそひして待まうけらる。峰山の
其白もこゝ迄出むかひで、すゝろに興行、

* 〈つゝ、〉

成相寺にて眺望

* 〈眺望の俣を〉

④72 今わたらば月に天窓の間べし

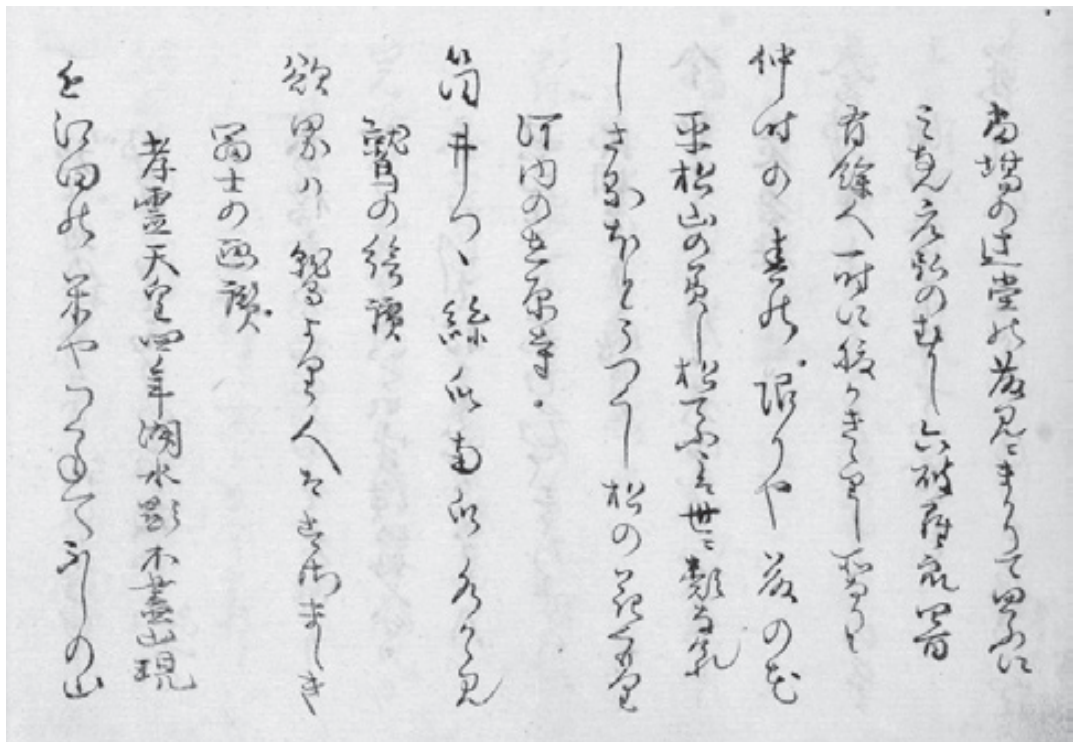
老曾杜

④73 念仏を申て過ぬもりの冬

瀬田尻の米かしてふ処にて

④74 米かしやまとめかねたる友ちどり

(三四才)



④75 番場の辻堂の藤見にまかりて思ふに、
こゝなん元弘のむかし、六破羅衆四百
有余人、一時に腹かきゝりし所なりと
仲時の春の限りや藤の花

④76 平松山の美し松てふこそ世に類なけれ
しさるほどうつくし松の花ぐもり

④77 河内の在原寺

④78 筒井づゝ糸瓜南瓜水かゞみ
鷺の絵讃

④79 欲界は鷺より人ぞすさまじき
富士の画讃

④80 孝霊天皇四年湖水顕不尽山現
近江田の米やつくねてふじの山

(三四ウ)

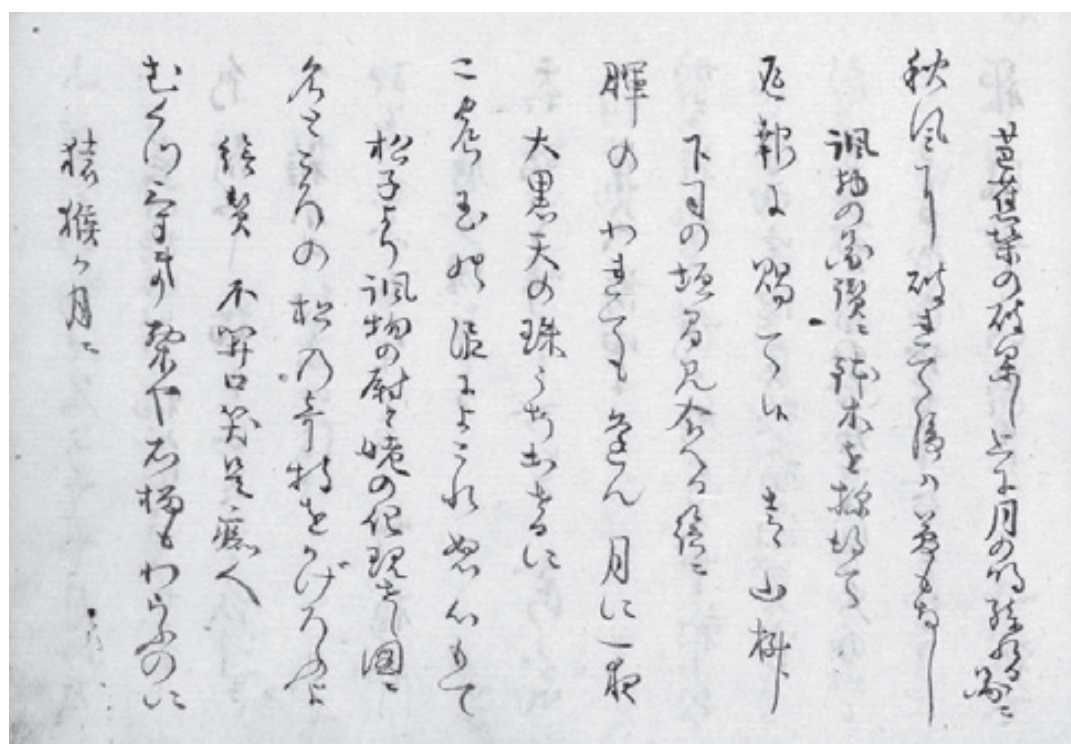
* 〈と哀にて〉

* 〈石部山ちかき平松山〉

* 〈国〉

* ④78 〈長浜三壺所望〉

* ④79 〈長浜真杉吞花所持〉



芭蕉葉の破れし上に月の明残れる図に

秋風に破れて後は夢もなし

諷物の図讃に鉢木を採得て

返報に賜て候青山枹

下司の垣間見合へる絵に

暉のわれても逢ん月に一夜

大黒天の珠うち出せるに

この玉の泥によくれぬ心もて

松子より諷物の尉と姥の化現せし図に

名どころの松の奇枝をかげろふよ

絵賛・不開口笑是痴人

むくつけき栗や石榴もわらふのに

猿猴が月に

(三四ウ)

* 〈破れし〉

* 〈図に観想 寸長所望〉

* 〈諷物図賛採題に鉢木を得て〉

* 〈板〉

* 〈下司共の〉

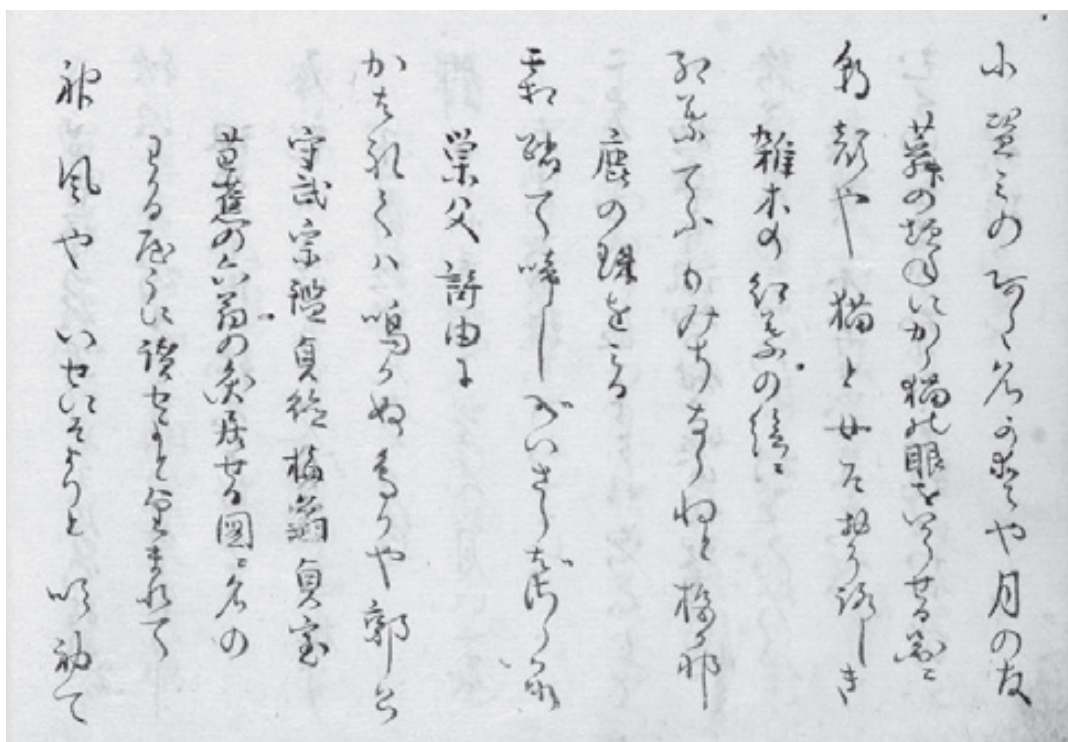
* 〈出たる絵に〉

* 〈謡〉 * 484 〈在竹所望〉

* 〈栗と石榴の絵 拳盃不笑是痴人〉

* 〈の讃〉

83



(486)

小盗みのあだ名が愛や月の友

* 〈愛し〉

葬の垣ねにから猫の眼をいからせる図に

* 〈もと〉 * 〈いから
かしたる図に 落合岩山
所望〉

(487)

朝顔や猫と女ぞおそろしき

雑木の紅葉の絵に

(488)

紅葉てふもみぢならねど柗かな

鹿の珠をみる

(489)

霜踏で啼しべいさらばさらかな

巢父許由に

(490)

かはれては鳴かぬ鳥かや郭公

守・武・宗・鑑・貞・徳・梅・翁・貞・室

* 〈六翁の像に〉

芭蕉の六翁の円居せる図に、名の

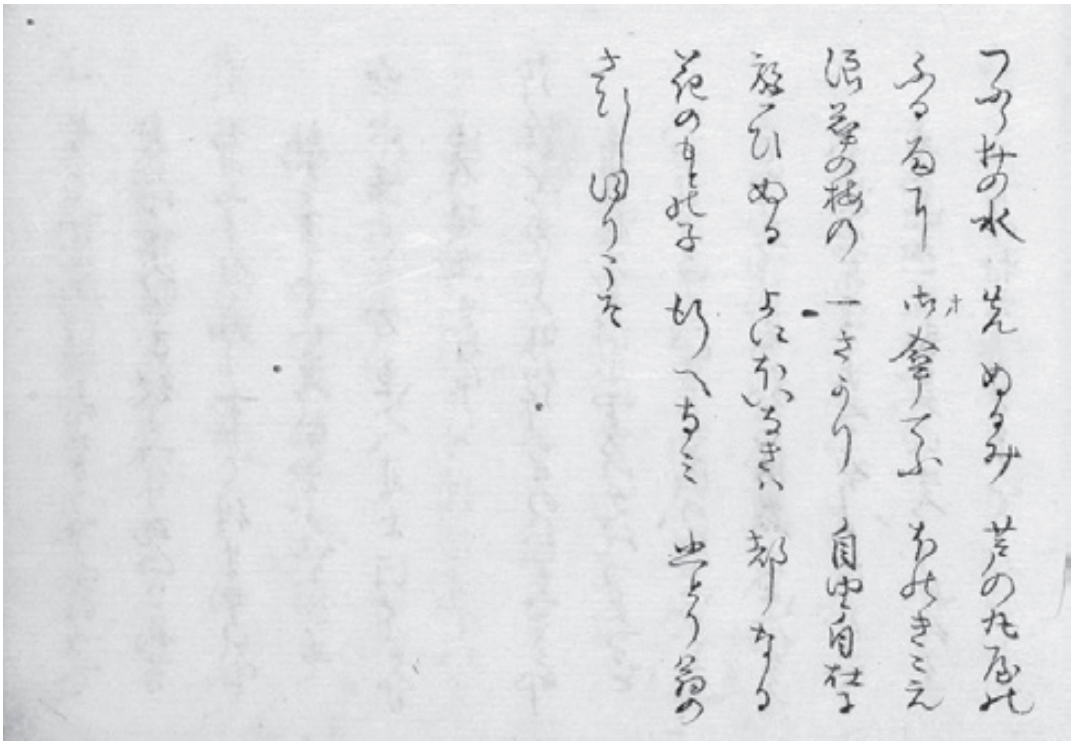
わかるやうに讀せよと望まれて

* 491 〈在竹所持〉

(491)

神風やいせにそよりと吹初て

(三五才)

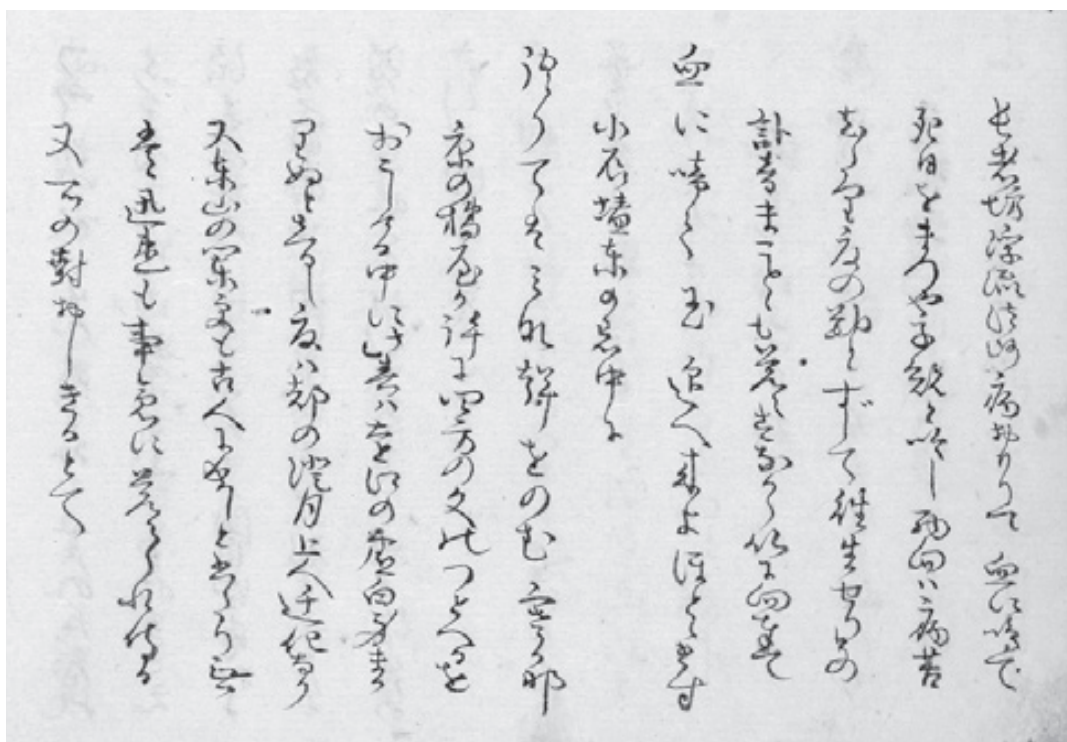


つばら井の水 先ぬるみ 芦の丸屋の
 ふる雨に 御傘^オてふ ほのきこえ
 浪華の梅の 一さかり 自由自在に
 遊びぬる よにほいなきは 都なる
 花のものと子 行へなみ ひとり翁の
 さびしほりこそ

(三二六才)

*〔はる〕

*例〔守武 伊勢ノ長官神
 風館ト云。俳諧ヲ始ム。
 宗鑑 山崎ニ隠棲ス。井
 ラツブラ井ト名ク。
 貞徳 居ヲ芦ノ丸屋ト名
 ケ、御傘ヲ撰ス。
 梅翁 浪華ノ人、宗因ト
 モ云。自由体ヲ発起ス。
 貞室 京ノ人。貞徳ノ門
 人也。花ノ下ヲコノ人ニ
 譲ラル。後ニ行方不知。
 芭蕉 世ノ人コレヲ翁ト
 称ス。サビ、シホリハ翁
 ノ風骨也。〕



④92

長者坊浮流法師、病おもりて、血に鳴て
死日をまつや子規と吟じ、西向ば病苦
去たり。夏の勤とずして往生せりとの
訃音まこと、も覚えながら、仏に向奉て
血に啼て玉迎へ来よほと、ぎす

小辰・牆東の忌仲に

④93

語りてはみな声をのむ寒かな

京の橘屋が許に、四方の文のつどへるを
おこしける中に、此春は遠江の虚白身まか
りぬとしるし、夏は都の澄月上人迂化なり。
又、東山の關更も古人に成しと書たり。無
常迅速も事急に覚えられ侍る。
又、一つの封おしきるとて

(三六ウ)

* 〈秋来らば竹生島詣せんなどのめ置しに、血を吐く病おこりて〉

* 〈天明二寅年五月廿八日の晩、座を正うして、西むけば〉

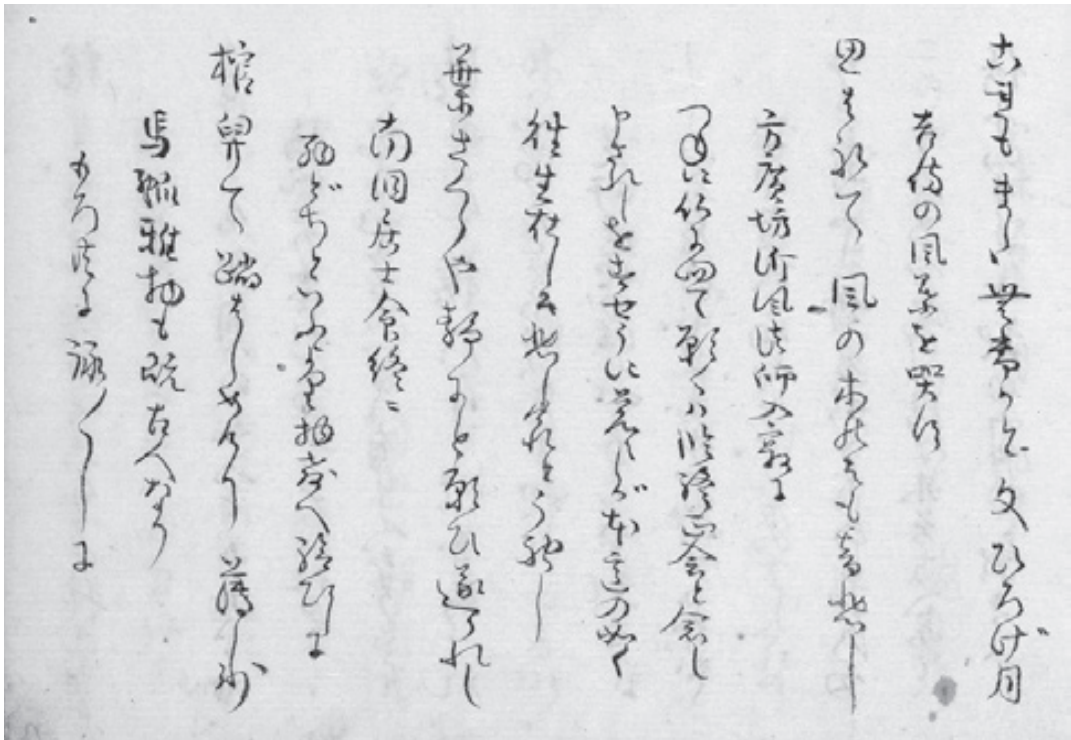
* 〈往生せし〉
* 〈ながら泣く〉

* 〈小辰牆東忌中に寛政七卯十一月八日の「忌中」には「卒去」を訂正〉

* 〈寛政十年都の〉

* 〈京〉 * 〈なりと〉

* 〈おもほえられ〉



④94 これもまた無常かと文ひろげ月

吉備の風葉を哭す

④95 思はれて風の木のはも音悲し

方広坊沂風法師入寂に

つねに仏に向て願くは、臨終正念と念じ

申されしをすせうに覚えしが、本意の如く

往生在しぞ。悲しけれどもれし。

④96 葉ざくらや静にと願ひ遂られし

南洞居士命終に

西どちといふより物教へ給ひしに

④97 棺昇て踏はじめけり薄氷

馬瓢雅物も既古人なり

もろ共に詠くしに

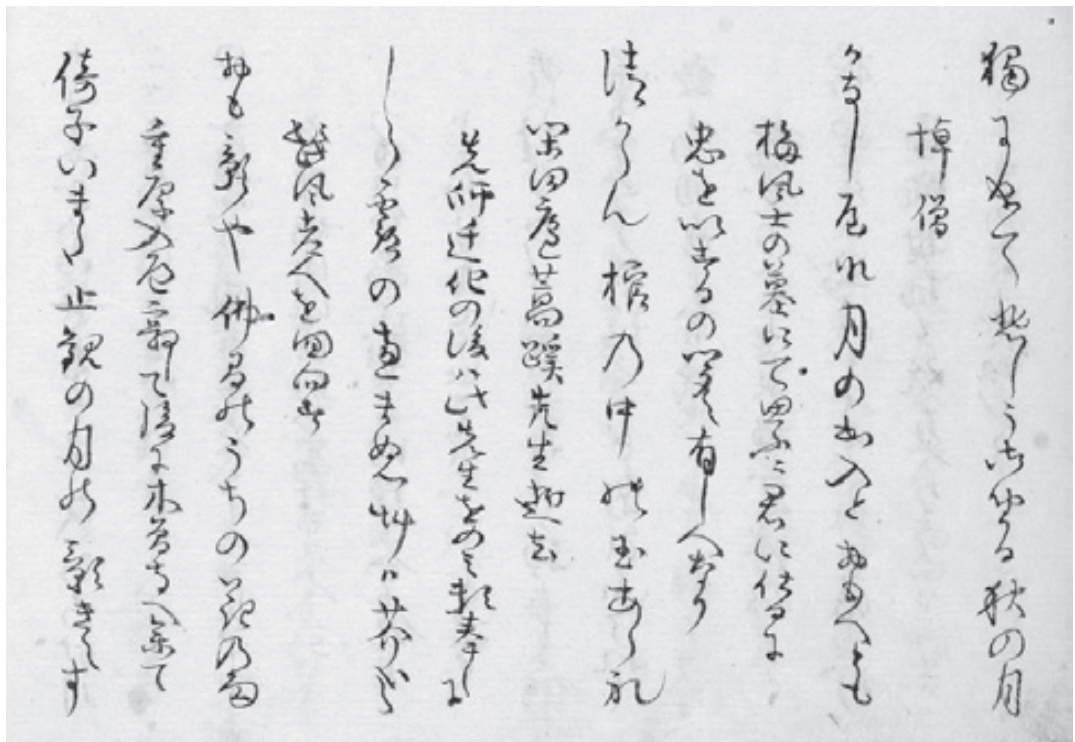
(三七才)

* 〈哭 益友の一人なり
しに〉

* 〈寂滅 寛政十二申四
月晦日〉

* 〈虎山氏南洞是道居士
命終 寛政十二申十一月
廿四日〉

* 〈風友馬瓢雅物が臨終
は、享和元西七月十七日
也〉



獨り成て悲しう御座る秋の月
悼僧

くちしる月のお入とおもへども

梅風土の墓にて思ふに君に仕るに

忠を以するの聞え有し人なり

清らん棺の中玉あられ

閑庵菴蹊先生逝去

先師迂化の後ハ此先生をのみ頼奉しに

しら露の恵まぬ草は芥哉

髭風老人を回向す

おも影や仏間のうちの花の雨

重厚入道敲じて後に木曾寺へ参て

倚子いまだ止観の月の影きえず

④98 独に成て悲しう御座る秋の月

悼僧

④99 かなしやな月の出入とおもへども

梅・風・土・の・墓・に・て・思・ふ・に・君・に・仕・る・に

忠を以するの聞え有し人なり

⑤00 清からん棺の中の玉あられ

閑庵菴蹊先生逝去

先師迂化の後ハ此先生をのみ頼奉しに

⑤01 しら露の恵まぬ草は芥哉

髭・風・老・人・を・回・向・す

⑤02 おも影や仏間のうちの花の雨

重厚入道敲じて後に木曾寺へ参て

⑤03 倚子いまだ止観の月の影きえず

(三七ウ)

*〈力と頼みしに述懐す〉

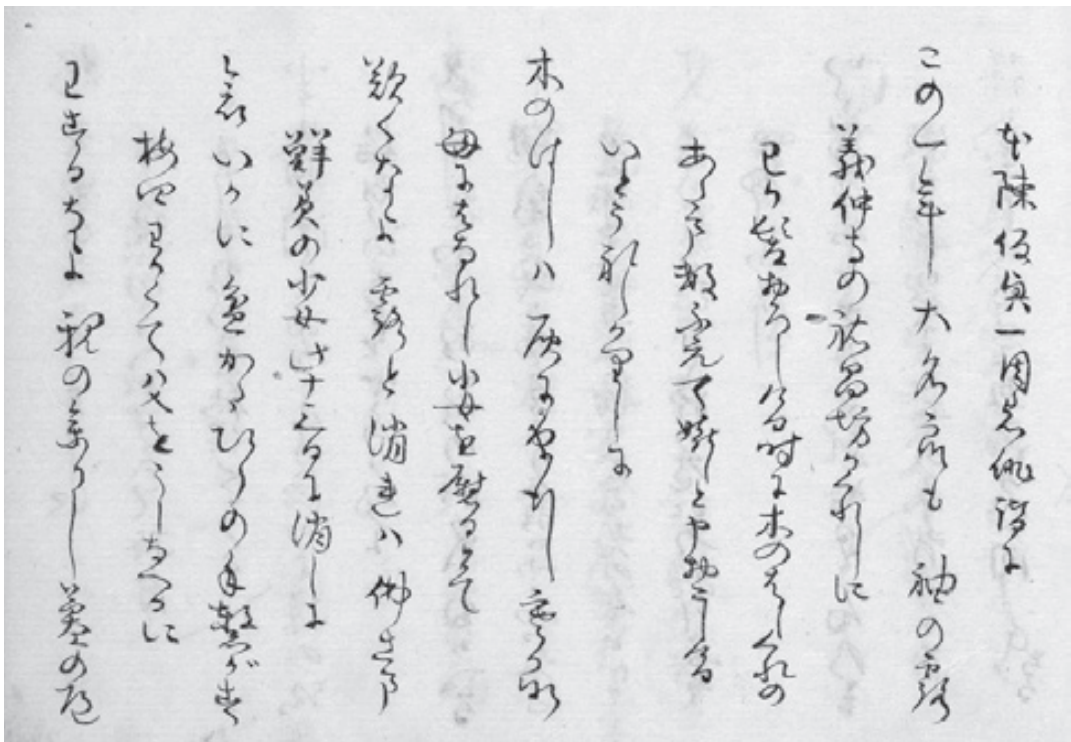
*〈以す〉

*〈後閑梅風土の墓にて〉

*〈悼髭風老人 文化六巳年二月二日

この道の兄と敬ひ、弟といつくしみ給ふも、いく野の道遠く、天のはし立ふみ見る事だに心にまかせず。この度はかゝる病おこりぬ。此冬はかくよわりたり。此世の名ごりに今一たび逢まほし、とのみせちに聞え給ふに、おのれも同じく老さらばひながら、この秋こそはゆかめ。来る春はとはや、とのみ思ひ尽しも甲斐なき。〉

*308 〈かくれて〉 *312 〈



本・陳・飯・興・一・周・忌・俳・諧・に・

504 この一年大名衆も袖の露

義仲寺の祐昌坊かくれしに

己が髪おろしける時に、木のはしくれの

あたま数ふえて嬉しと申おこしける。

いとうれしかりしに

505 木のはしは灰に成行寒かな

母にはなれし小女を慰るとて

歎くなよ露と消れば仏さま

506 鮮美の少女此十三日に消しに

哀いかに盆かたびらの手繋がず

梅四わかくて父をうしなへるに

508 わするなよ親の参りし墓の道

(三八才)

* 〔本陣何某〕

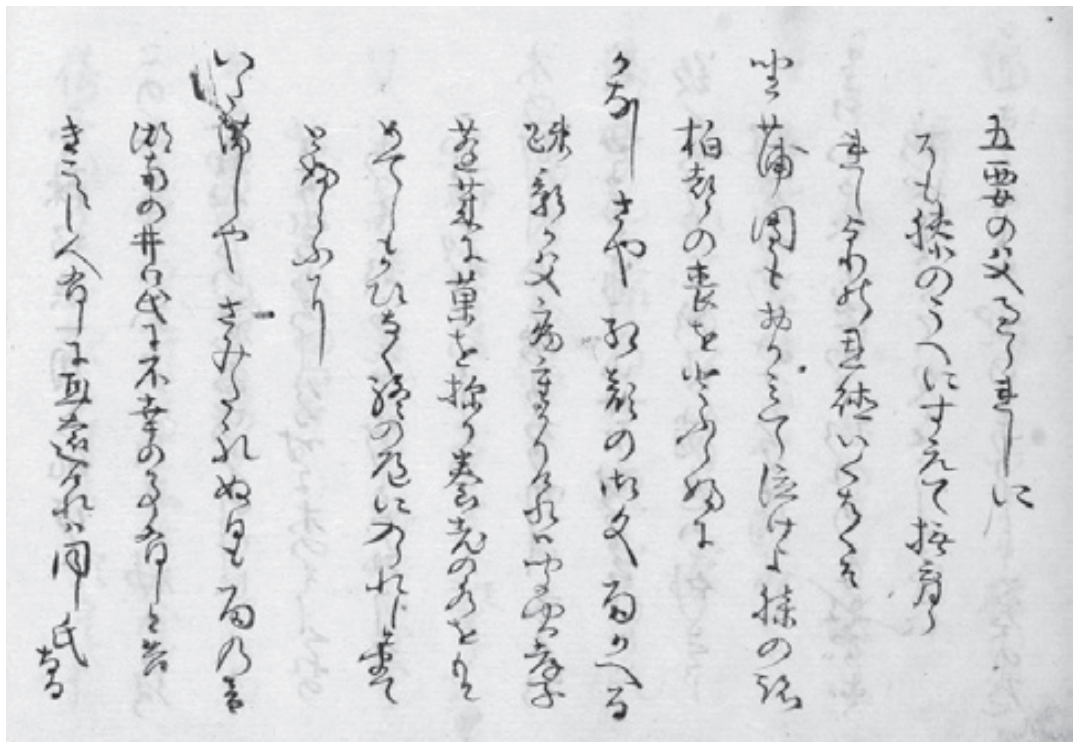
* 〔興行に〕

* 〔を哭す〕

* 〔寒さ〕

* 〔少女の〕

* 〔にわかれしに〕



511

いたましやさみだれぬ日も雨の音

湖南の井口氏に不幸の事有しと告

きこえし人有しに、耳遠ければ同じ氏なる

* 〈氏の〉

* 〈在しよをさきに〉

510

かなしや紅顔の御文雨がへる

疎影が父病重かりければ、聞ゆる孝子

蓬萊に草を探り、養老の水をもと

めてしもかひなく、終の道に入られしと聞て

とぶらふに

* 〈喪中をとふに〉

509

座蒲団もおがみて泣けよ膝の跡

柏声の喪をとぶらふに

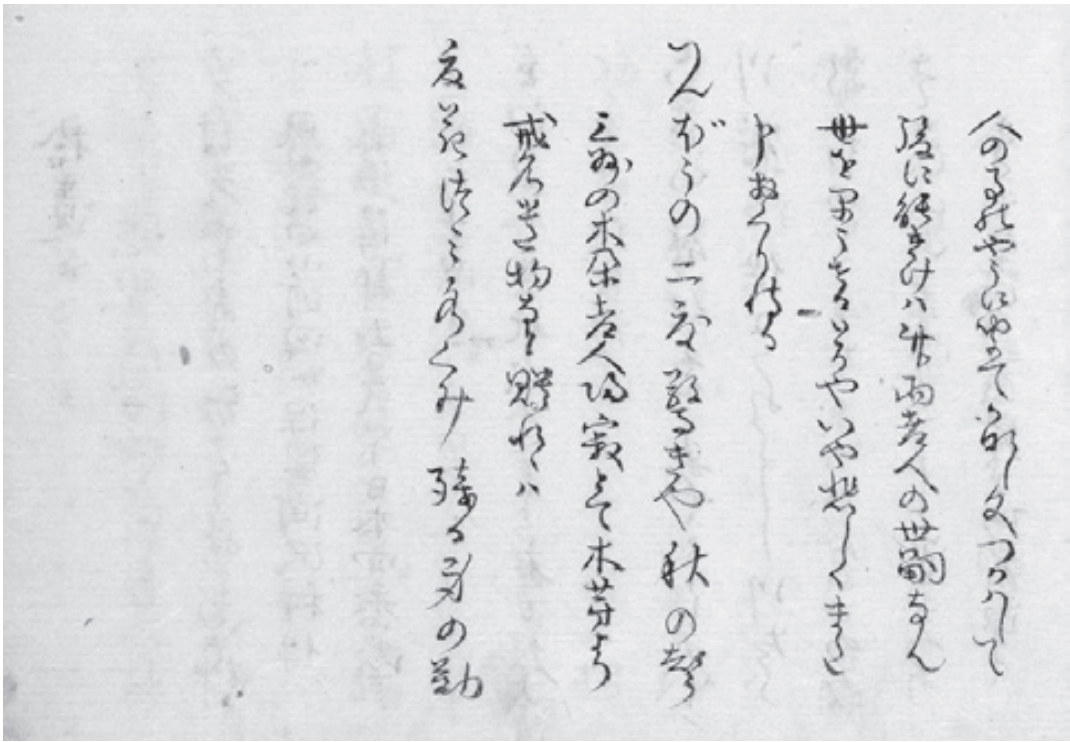
れしよりの恩徳いくばくぞ

そも膝のうへにすえて撫育ら

五要の父過られしに

* 〈育し給ひし〉

* 〈長浜五要の父命終に〉



人の事やうに聞て、かなし文つかはして
後に能きけば、竹雨老人の世嗣なん
世を早うせるとかや。いや悲しくまた
申おくり侍る

つんぼうの二度驚きや秋の聲

三州の木朶老人婦寂とて、木芽より

戒名遺物など贈れ、ば

夏花つみ水くみ残る身の勤

⑤12

人の事のやうに聞て、かなし文つかはして
後に能きけば、竹雨老人の世嗣なん
世を早うせるとかや。いや悲しくまた
申おくり侍る

* 〈つかはしけるに〉
* 〈きけば〉

⑤12

つんぼうの二度驚きや秋の聲

三州の木朶老人婦寂とて、木芽より

戒名遺物など贈れ、ば

⑤13

夏花つみ水くみ残る身の勤

(三九才)

* 〈参河〉 * 〈八十四
歳なるが寂滅せり〉
* ⑤13 〈文化八年四月二日〉

拾遺

夕ばえや水のひかりの遠柳

風土記曰山河田畑保彊潤沢種得

千倍隣都春氣早日本四番國

也大上々國矣

をいのや京の次手に春もたつ

壬生狂言讚

六道の能化も春やうからく

川狩の供につれたし川太郎

朝がはや主をとへば色ごのみ

さゝがにのいともかしこし星まつり

すくもは土にあらず炭にあらず。むかし

拾遺

夕ばえや水のひかりの遠柳

風土記曰、山河田畑保強潤沢種得

千倍隣都春氣早日本四番國

也。大上々國矣

近江のや京の次手に春もたつ

壬生狂言讚

六道の能化も春やうからく

川狩の供につれたし川太郎

朝がはや主をとへば色ごのみ

さゝがにのいともかしこし星まつり

すくもは土にあらず炭にあらず。むかし

(三九才)

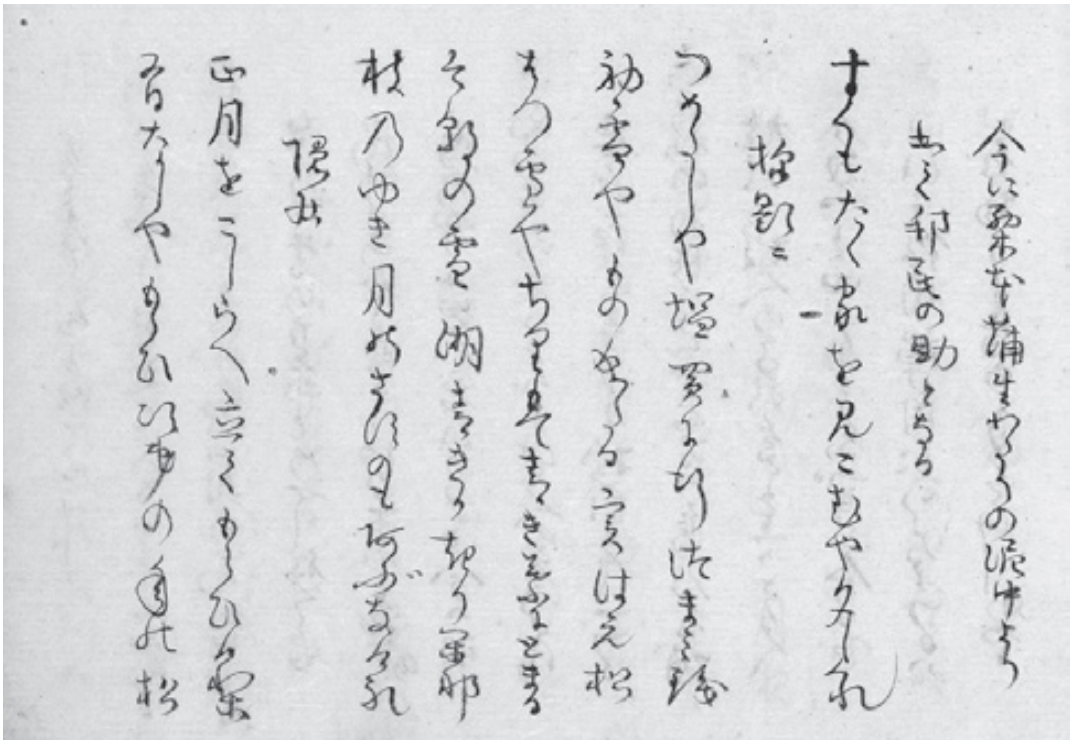
* 「古果発句拾遺」

* 「風土記二云、春氣早
夕至日本四番大上々國」

* 「近江路や」を「近江
のや」に訂正

* 「の絵に 落合笑山所
望」

* 「炭」 * 「土」



今に栗本蒲生わたりの泥中より
 出て邦民の助となる
 すくもたく家を見こむや夕しぐれ

520

今に栗本蒲生わたりの泥中より
 出て邦民の助となる
 探題に

*〔なし〕

521

つめたしや塩買に行つまみ銭
 初雪やもの成たる実ばえ松

*〔物に〕

522

はつ雪やちりもて青き葉にとまる
 今朝の雪湖青きかぎりかな

*〔清〕

524

今朝の雪湖青きかぎりかな
 枝のゆき月のさすのもあぶなけれ

*〔室〕

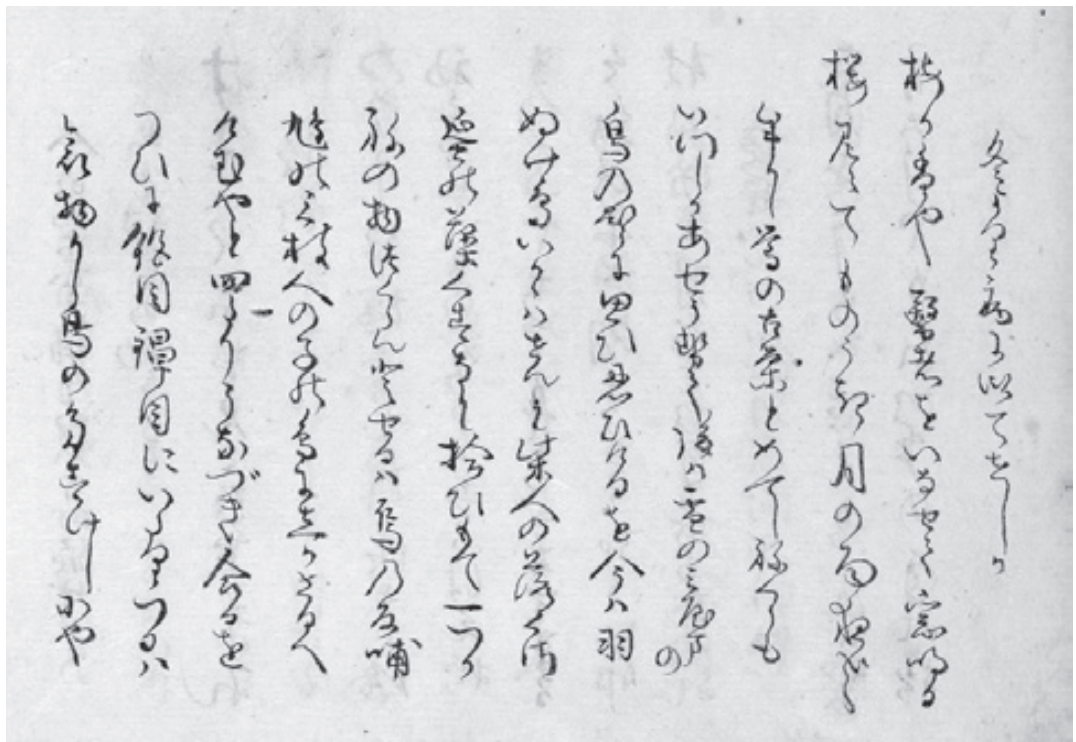
525

枝のゆき月のさすのもあぶなけれ
 隠居
 正月をこしらへ立てもらひけり

527

有なしやもらひ次第の年の松

(四〇オ)

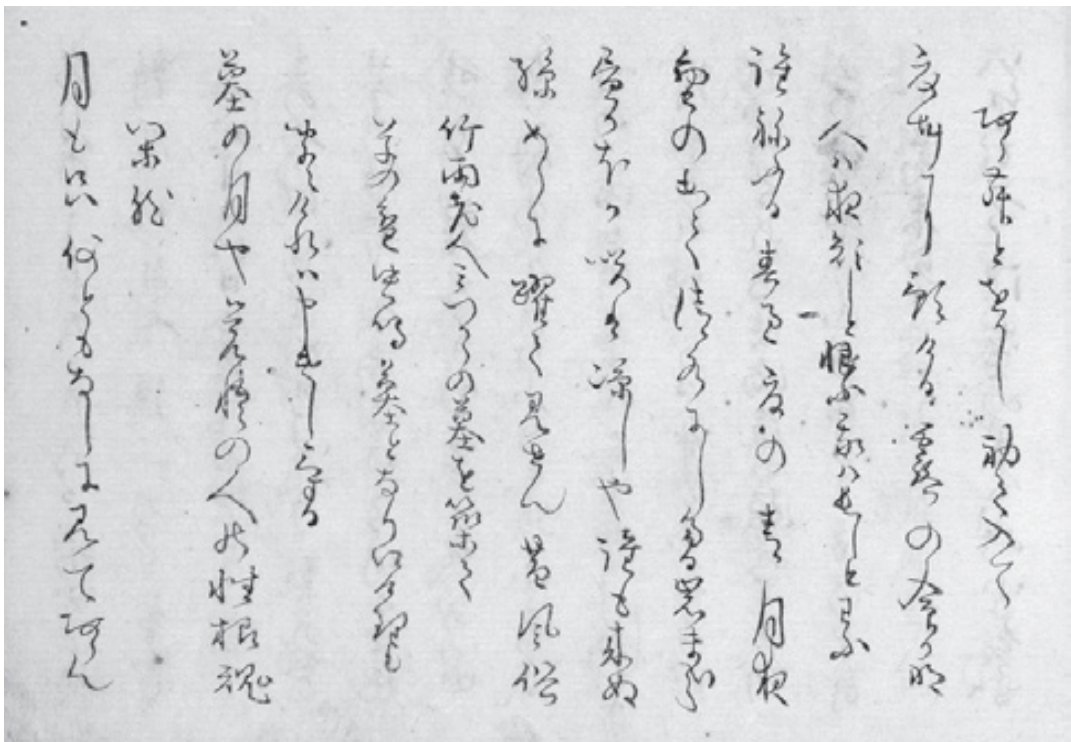


529 528

冬より病に臥てせしが
梅が香や医者をいなせて窓明る
桜見えてものうき月の雨夜哉

むかし鶯の古巢とめでしねぐらも
いつしかあせうせて、後は雪のみやまの
鳥の声に思ひ忍びけるを、今は羽
ぬけ鳥いかゞはせんと、柴人の落くさ
蟹の藻くずなど拾ひもて、一つか
ねの物つくらんとせるは、鳥の反哺、
鳩の三枝、人の子の鳥にしかざるべ
けむやと、四たりうなづき合るを
つひに鉋目鐺目にいたりつるは
哀物から鳥のたすけしにや

(四〇ウ)



530 夏草に預ける露の命かな

あらむとをかし。初て入て
人は夜短しと恨ぶ。我は長しとわぶ。

531 誰ねぶる春過夏の青月夜

蟹の出て清水にしたる岩ま哉

532 昼がほが咲ば涼しや誰も来ぬ

533 孫めらに躍て見せん昔風俗

竹雨老人みづからの墓を築て

草の盆虫鳴墓となりにけりと

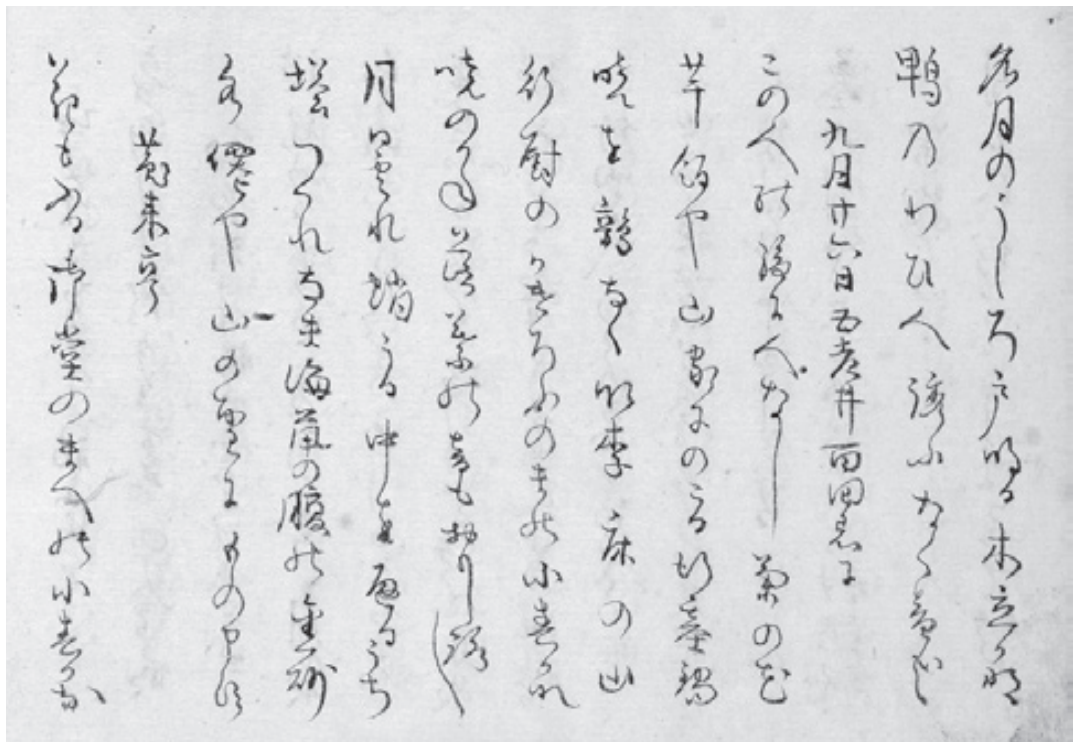
聞えければ申遺しける

535 墓の月や覚悟の人の性根魂

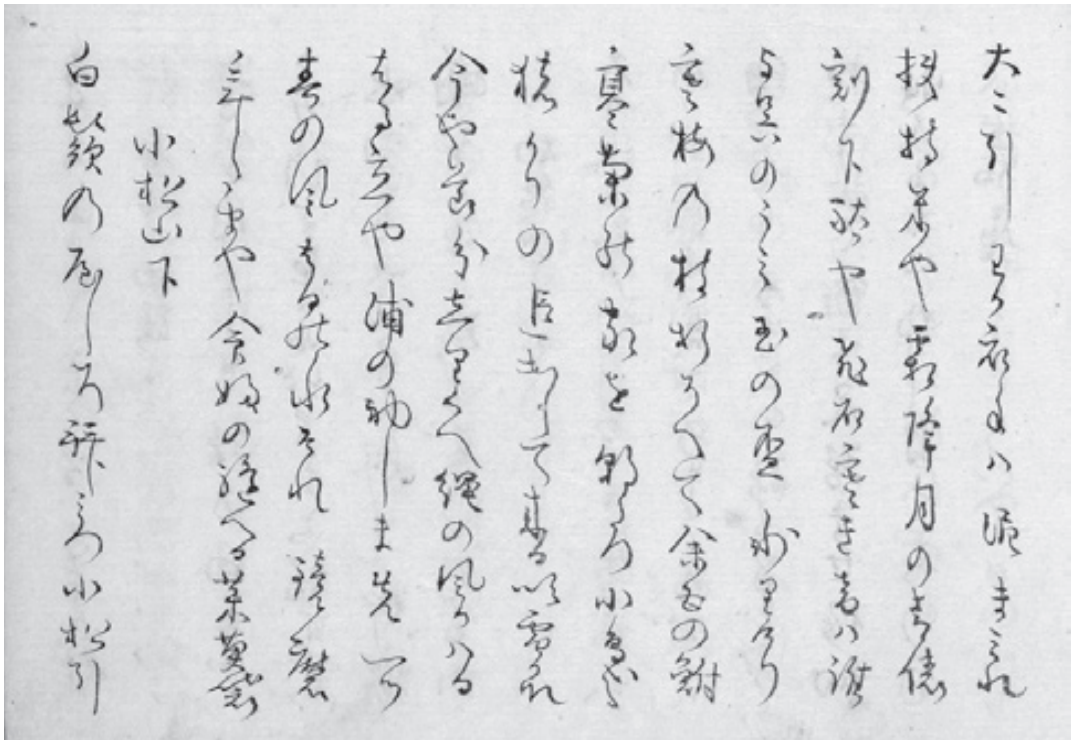
閑然

536 月も只何ともなしに見てあらん

(四一才)



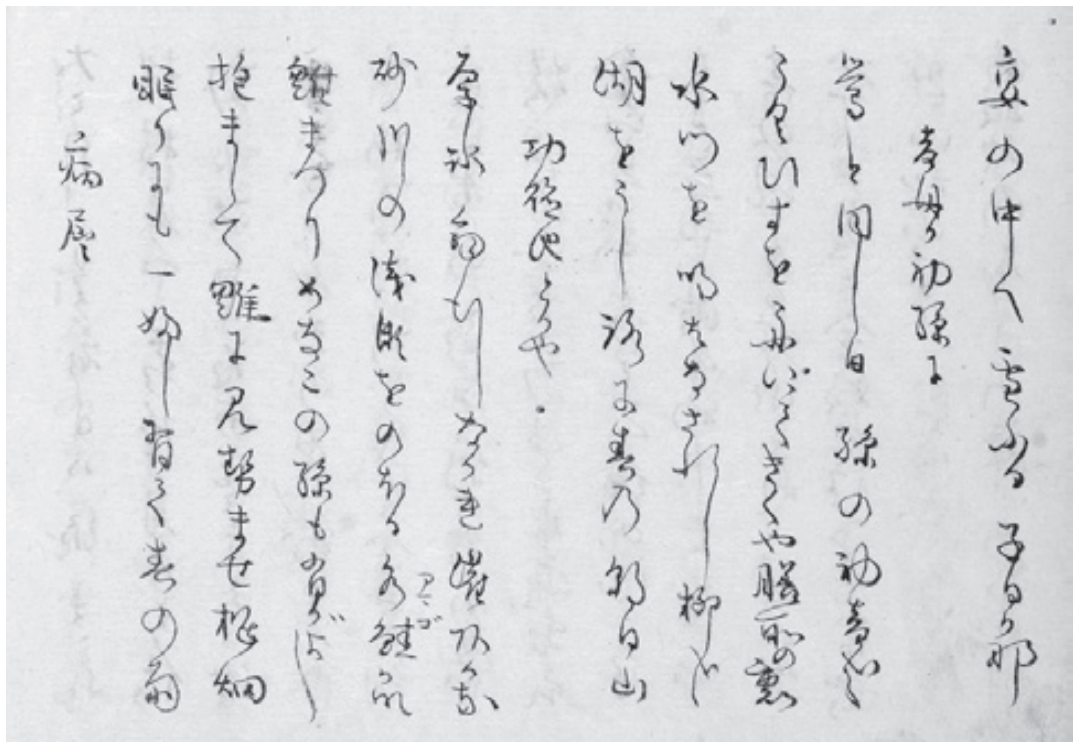
- 537 名月のうしろ戸明る木立かな
 538 鴨のわび人誘ふなく音哉
 九月廿六日五老井百回忌に
 539 この人の後に人なし菊の花
 540 芋飯や山家にのこる行基鍋
 541 暁を鶉なくなり床の山
 542 行厨のかげろふのまの小春かな
 543 暁のかね落葉の音もおもしろし
 544 月曇れ蛸うる中を通るうち
 545 塔つくれなま海鼠の腹の金砂
 546 水仙や山の聖にもの申す
 菟来亭
 547 花もふる御堂のまへの小春かな



- 548 大こ引わが衣手は泥まみれ
 549 扶持米や霜降月の青俵
 550 割下駄や飛石寒き音は誰
 551 与呉のうみ玉の盃氷りけり
 552 寒梅の枝折そへて余五の鮒
 553 寒菊の家を朝たつ小鳥哉
 554 猪がりの追出して来る吹雪かな
 555 今や節分しりくへ繩の風かはる
 556 はる立や浦の初しま先一つ
 557 春の風はるの水それ鏡磨
 558 年だまや命婦の縫へる菜萁袋
 559 白鬚のやしる拌みつ小松引

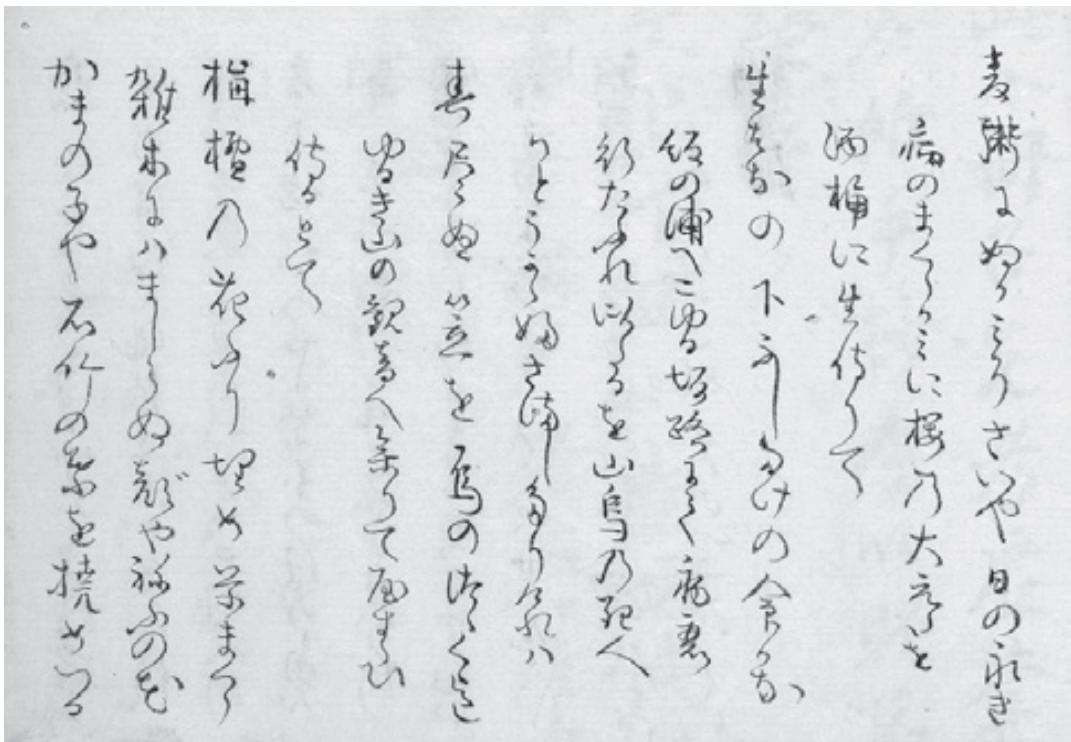
小松山下

(四二才)



- 560 宴の中へ雪ふる子日かな
麦舟が初孫に
- 561 鶯と同じ日孫の初音哉
- 562 うぐひすを舟にてきくや膳所の裏
- 563 水門を明はなされし柳哉
- 564 湖をうしろに春の朝日山
功德也とかや
- 565 厚氷解行しながら濯頭かな
- 566 砂川の浅瀬をのぼる水鮭かな
- 567 雛まつりめなごの孫も有がよし
- 568 抱まして雛に見せませ桃畑
- 569 眠りにも一ふし有て春の雨
病屈

(四二ウ)



570 麦粥にぬかみそさいや日の永き

病のまくらがみに桜の大えだを
酒桶に生侍りて

571 生ばなの下ふしだけの命かな

飯の浦へこゆる坂路にて病悪

行だふれ臥たるを、山鳥の死人

かとうかゝふさましたりければ

572 春尽ぬ笠を鳥のつゝく迄

ゆるき山の観音へ参りてやすらひ

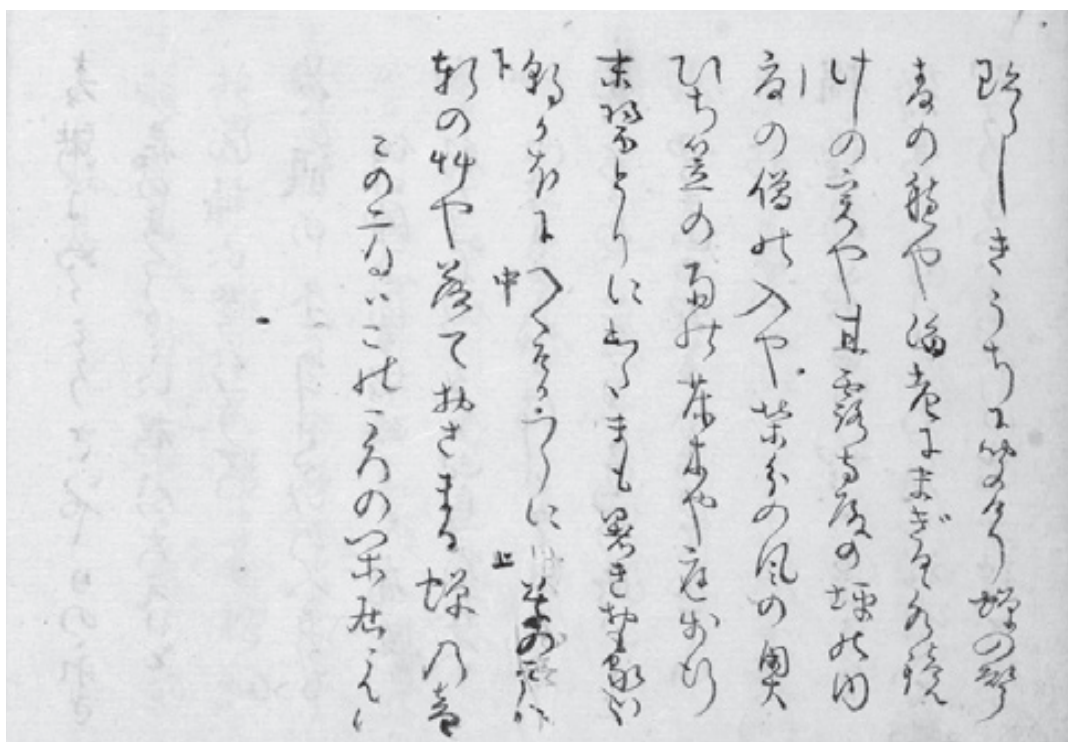
侍るとて

573 梅檀の花ふり埋め草まくら

雑木にはまじらぬ顔やねぶの花

575 がまの子や石竹の葉を撓めつる

(四三才)



576

珍しきうちに聞けり蟬の声

577

麦の穂や海老にまぎるゝ水鏡

578

けしの実や甘露寺殿の坪の内

579

夏の僧の入や葉分の風の奥

580

ひぢ笠の雨の茶木や庭歩行

581

未醬とりに出たまも暑きおも家哉

582

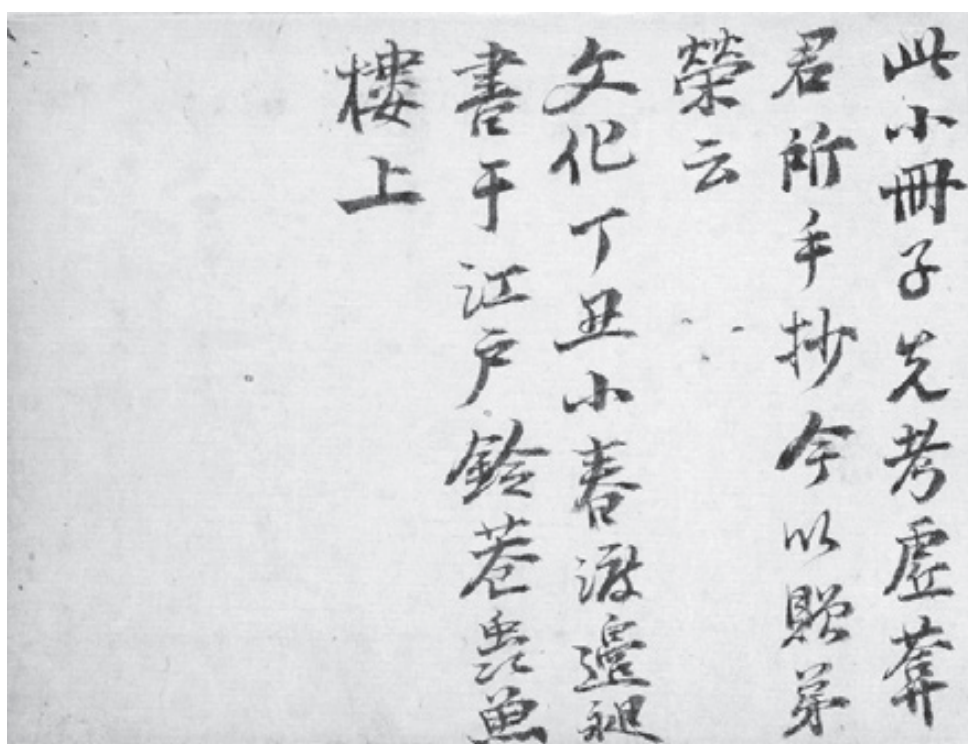
朝がほにへくそかづらに草の戸は

583

軒の草や落ておさまる蟬の音

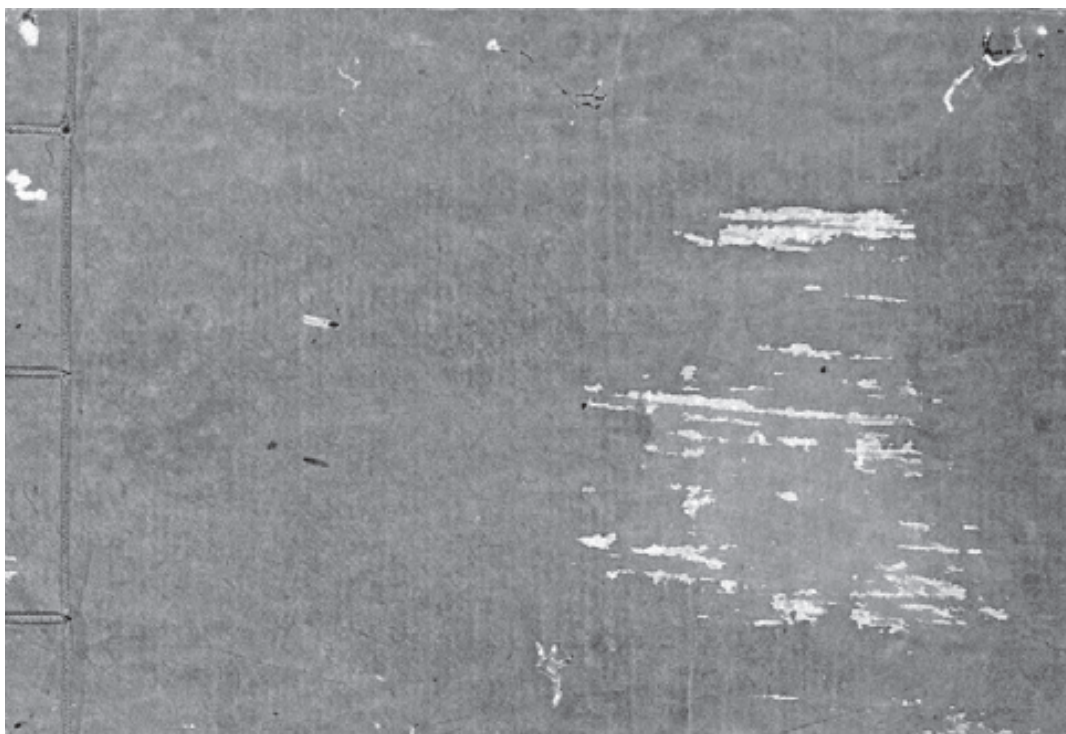
この二句はこのごろの閑居にて候

(四三ウ)



此小冊子 先考虚庵
君所手抄 今以贈弟
榮云
文化丁丑小春 渡邊昶
書于江戸鈴庵虫魚
樓上

(裏表紙見返し)



(裏表紙)

慈母妙玉尼終焉記

ふつちの母うへ母入大うみのそひしられぬや。いふも更なりけれど、ちゝの実の父うへなるはわかき比より、おほやけ事につかはれまして、一とせのうち四つが一つばかりならでは、家にいます事なかりしが、六十あまりの比よりやめて、残生を養はむとし給ふも、程なく病おこりて四とせばかり在て終らせ給ひしに、おのれ生してのひとり子の何のわいだめなきをいつくしみ給ふも、家貧しければつたなきいとみななどして、なで育給ひしが、おのれも年がましく、むまごもいできぬ。今はやすき身なりと、髪おろして家のうしろにかくれ、つとに起て御仏につかへ、はやくいねて老を樂しみ玉ふ事、やゝ年ありき。しかるにことし齡七十まり七つときこゆる春の比、例ならず見え給しかば蓬葉に葉をたづね、養老の泉をもとめて、かしづきまいらせし験にや、いつしか食す、み行歩やすらかに、あたりちかき寺へも参り、はた終の料とていまはしきもの縫給ふを、穴かなしはかなのわざなし給ひそ、とうちかこてば、いとまある

慈母妙玉尼終焉記

たらちねの母うへへの恩の大うみのそひしられぬや。いふも更なりけれど、ちゝの実の父うへなるはわかき比より、おほやけ事につかはれまして、一とせのうち四つが一つばかりならでは、家にいます事なかりしが、六十あまりの比よりやめて、残生を養はむとし給ふも、程なく病おこりて四とせばかり在て終らせ給ひしに、おのれ生してのひとり子の何のわいだめなきをいつくしみ給ふも、家貧しければつたなきいとみななどして、なで育給ひしが、

(岩瀬本 七八才)

おのれも年がましく、むまごもいできぬ。今はやすき身なりと、髪おろして家のうしろにかくれ、つとに起て御仏につかへ、はやくいねて老を樂しみ玉ふ事、やゝ年ありき。しかるにことし齡七十まり七つときこゆる春の比、例ならず見え給しかば蓬葉に葉をたづね、養老の泉をもとめて、かしづきまいらせし験にや、いつしか食す、み行歩やすらかに、あたりちかき寺へも参り、はた終の料とていまはしきもの縫給ふを、穴かなしはかなのわざなし給ひそ、とうちかこてば、いとまある

(岩瀬本 七八ウ)

身の手づきよと聞え給ひしが、霜降月三日の
 夕つかた、例のあねぶりぞと見えて念仏の声聞え
 ずなりしを、湯あみし給へ、入相もきこゆるにと、
 申せどいらへもなし。よくもねいらせ給もの哉と、
 立より見れば正しく座しながらいき絶させ給ひ
 ぬ。こはいかにとおどろきまよへば、親しき昵じき
 はしり来て何くれとあはてさわぎ、くすし
 何某連もかけつけてこゝろみぬれど、せんすべな
 きにきはまりぬれば、北からに西おもてに
 ねせ参らせて、後はおほえず。かくて二夜に
 成ぬ。ひつ木に収めるときよめまいらすと聞えて
 終のたいめせよ、心きたなしと人の励ます
 るに、やゝはひよりにたれど、目泣つぶれにければ、
 手合せて南無大慈大悲の御ちかひまことに
 しましまさば、今一たび母うへのかほ見せ給へと
 念じにたれば、やがて容顔つゆかはらぬをおが
 みて蘇生在しこゝちす。日ごろ煩はで死
 ばやときこえ玉ひしが
 願はれし心のまゝに雪仏
 人のまなくとひ来ますも氣うとけれど、いかゞは

(岩瀬本 七九ウ)

(岩瀬本 七九オ)

さむねしもくさあねハ野辺に送り参ら
 すねに目まひ膝ふるひて道のほど遙に
 をうねかいらまきけうけゆえんを師
 ゐく女人成仏の偈をきし給ふこゑ骨に徹
 りてきふにまろく涙さへそぼちぬ。往生
 安楽國とかいふも——うゆればやく
 棺こは火をかくると見えし。後は又もの覚えおぼえ
 寛政三辛亥年しんげ初七日の建夜に
 御あかしの影にて
 去可悲歎書

せむ。扱しも有べきならねば、野辺に送り参ら
 するに、目まひ膝ふるひて、道のほど遙に
 遠うおぼえられき。何がし法師なん導師
 にて、女人成仏の偈をずし給ふこゑ骨に徹
 りて、すゞろに有がた涙さへそぼちぬ。往生
 安楽國と、かねうち鳴らし聞ゆれば、はやく
 棺こはに火をかくると見えし。後は又ものの覚えおぼえずぞ
 寛政三辛亥年しんげ初七日の建夜に
 御あかしの影にて
 去可悲歎書

(岩瀬本 八〇才)

俳号等人名索引

凡例

一、本索引は、句番号によって示す。但し、句や前書以外のものについては、丁数等によって示す。

一、蝶夢と判断される「老師」は「幻阿」に入れる。

岩山（落合）	487	月川	221・459
可風	401	黒主	382
瓜泥（鈴木）	420	許由	490
瓦全	230・417	虚白	494
仮興	504	旭山（渡邊昶）	433・438・裏表紙見返し
槐庵	221	旭山	165・336・岩瀬本80丁オ
【か】		去何（古巢園）	
王母	336	白月（白井とも）	412
為霖	409	沂風 ↓方広	
井口 ↓菊二		其白	472
安藤正受	445	木下藤吉郎	275
芦の丸屋 ↓貞徳		菊二（井口）	391・512
【あ】		閑田（蒿蹊）	471・501

月亭	33丁ウ
幻阿（五升庵・老師）	253・374・384・403・471・472・218・
愿憲	221
兼好	291
蒿蹊 ↓閑田	
孝霊天皇	479
五升庵 ↓幻阿	
古声（眠亭）	405
呉川	218
古巢園 ↓去何	
五要	509
五老井	539
【さ】	
西行（西上人）	65・257・268
在竹	449・484・491
佐川田喜六	75
三壺	478
梓沢	282
此得 ↓槐庵	
髭風	401・502
下村	165・363

重厚	503
舟車	111
菟来	547
笑山（落合）	516
墻東（小辰）	493
如毛	221・410
神風館 ↓守武	442・480
寸長	
寸龍	453
笙洲	282
清少納言	369
雪徑	451
雪芝	218
鮮美	507
宗因 ↓梅翁	
宗鑑	491
蒼空	221
疎影	511
曾我の季子	444
鼠穴	415
曾秋	218

梅翁 (宗因)	491	梅四	508
【は】		梅風	500
平判官入道	353	伯夷	221
橘屋	494	麦宇	238
竹雨	512	麦舟	110
昶 ↓旭山	535	柏声	510
澄月上人	494	芭蕉	218
知了尼	427	馬瓢	293
都良香	230	飛川 (深山)	400
貞室	491	百杵	454
貞徳 (芦の丸屋)	491	瓢庵	192
塘里	216	風葉	498
杜音	221	布舟	221
虎御前	425	浮巢庵 (文素)	447
吞花 (真杉)	218	浮流 (長者坊)	332
【な】		方広 (沂風)	401
仲時	475	万里小路藤房	492
南兮	423	道彦 (村上)	404
南洞 (虎山是道)	497	妙玉尼	495
念最上人	247	岩瀬本78丁才	443
【は】		眠亭 ↓古声	462
毛受正助	227	毛受正助	435
【た】		木朶	513
梅四	508	守武 (神風館)	491
梅風	500	【や】	
伯夷	221	藪田	428
麦宇	238	祐昌	505
麦舟	110	遊林 (平尾)	418
柏声	510	蠅翁	354
芭蕉	218	よし朝	203
馬瓢	293	【ら】	
飛川 (深山)	400	楽三 (嘉瀬井楽山)	443
百杵	454	闌更	494
瓢庵	192	里秋	217
布舟	221	葎三禅師 (僕三)	443
風葉	495	了安	413
浮巢庵 (文素)	401	老師 ↓幻阿	217
浮流 (長者坊)	492	芦水	
方広 (沂風)	338		
万里小路藤房	400		
道彦 (村上)	496		
妙玉尼	462		
岩瀬本78丁才	435		
眠亭 ↓古声	462		
毛受正助	435		

『古巢発句集』初句索引

凡例

本索引は、句番号によって示す。

【あ】

藍谷へ	263	朝がほや	518
青くくと	258	主をとへば	188
青柳や	34	命うれしく	487
暁の	543	猫と女ぞ	185
暁を	541	人に力を	99
赤松の	338	麻まきて	565
秋風に	480	厚氷	307
秋風の	420	あつ鳥の	83
あき風も	183	あの人が	89
秋来ぬと	166	蛇の音の	331
秋の小草	244	天くだる	171
あきのくれ	287	天の川	86
爰なも人で	285	雨の花	320
笑仏へ	582	洗ふ菜を	105
朝がほに	187	有明の	342
朝がほの		ありくまじ	527
		有なしや	

【い】

淡うみの	115	家建る	431
淡雪を	13	庵の月	403
哀いかに	507	いきのたつ	51
		行さきで	29
		幾つぞや	418
		生ばなの	571
		いざ家内	439
		いざ共に	221
		十六夜は	231
		十六夜や	230
		石杵や	222
		倚子いまだ	503
		いた担ふ	60
		いたましや	511
		一日路	210
		一日の	160
		いちよらの	85
		いと連に	37
		いななくや	
		今からは	
		今更に	
		今や節分	
		今わたらば	
		芋飯や	
		色かへぬ	
		岩はしや	
		うき時は	
		鶯と	
		同じ日孫の	
		古巢並べて	
		鶯のぬふてふ	
		鶯や	
		師走の人の	
		窓を明れば	
		うぐひすを	
		うしろより	
		薄月や	
		薄べりを	
		うつきりと	

移り香も	443	【お】	おもしろや	349	金もちや	196
うなゐ子の	104	老が手に	思はれて	495	かぶら汁	372
馬市や	357	老らくは	親なしと	172	がまの子や	575
馬の子や	190	近江田の	小やみては	339	神風や	
海べたの	319	近江のや	女なき	180	いせにそよりと	491
梅が香や		狼も			このはの御供	453
医者をいなせて	528	大津にも	【か】		かみ京は	388
四足を食はぬ	25	大どしや	かへる雁		神棚の	290
うめ咲て	28	送り出て	きつぱりとさへ	94	唐紙を	286
梅に鶯	450	おくり名を	鶏頭花のたね	93	から衣	248
梅ぬしの	422	惜や年	書初や	3	辛崎の	164
梅のはな	31	男には	燕子花	120	雁金や	250
うら盆や	448	音なしに	柿よく	165	かり鳴や	251
嬉野の	296	衰へや	かくすなよ	292	かれじとも	316
【え】		鬼の出る	隠家は	421	かれを花	293
枝のゆき	525	御火焼や	鵲の	317	川狩の	517
江戸にこの	220	おぼろ月	かしの木は	432	蛙なく	90
絵の中に	400	きつぱりとして	蝸牛	127	川づらや	131
えのは井や	280	まき絵の人の	語りては	493	川舟や	79
宴の中へ	560	思ひ子を	門畑の	157	かはれては	490
		思出て	かなしさや	510	棺昇て	497
		おも影や	かなしやな	499	寒菊の	553
		おもしろの	蟹の出て	532	寒ぜみの	137

旅ごろも	278	月の雨	229	鳴分よ	318
たぶくと	76	月の出や	78	歎くなよ	506
たらちねと	467	月の行	226	なつかしや	200
誰ねぶる	531	月花に	405	夏草に	530
誰もなき	65	月みれば	223	夏ちかし	110
		月も只	536	名どころの	484
【ち】		筒井づゝ	477	七草や	18
血に啼て	492	罪もなし	117	名なし草	245
ちひさしと	433	つめたしや	521	南無大悲観	466
茶の花も	297	露の身と	199	とし玉や	
てふくや	44	つれ立て	429	ちひさけれども	6
猪牙舟や	35	頭を挙て	368	命婦の縫へる	558
ちる罌粟に	130	つんぼうの	512	年ぐくに	7
ちれさくら	74			としの内に	381
【つ】		【て】		年のくれ	395
月影に	257	出はいりに	277	年わすれ	385
月影の	218	てんぼして	81	とよ年や	375
月影や	139	【と】		鳥が音も	425
月きよし	216	東西子の	444	猶さらに	384
月曇れ	544	唐人の	241	長き夜や	283
月冴む	445	塔つくれ	545	仲時の	475
月しぐれ	308	豆腐にて	129	ながらへて	457
				【な】	
				猶さらに	384
				長き夜や	283
				仲時の	475
				ながらへて	457
				【に】	
				勾ふかと	75
				憎からね	434
				濁しては	135
				二十一社	266
				二度めにも	337
				二百年	455
				にらみ合ふ	275
				庭かまど	4
				庭鳥も	392
				【ぬ】	
				ぬかるまじ	341

初汐や	はつ桜	八朔や	初雁の	初あらし	畑べりに	蓮の花	葉ざくらや	墓参り	墓の灯や	墓の月や	霸王樹の	【は】	縄もと田や	登ても	のびくと	軒の草や	【の】	念仏を	眠りにも	【ね】	
201	59	212	249	170	195	158	496	174	175	535	202		16	303	48	583		473	569		
はる立や	春風ぞ	腹をたつ	早梅や	はま弓や	浜町は	葉ばかりを	花を踏で	花もふる	花は見ずと	花さけば	鳩の居て	もの成たる	手をさし出して	告むとすれば	ちりもて青き	有明入し	はつ雪に	はつ雪や	人にも花を	ついてあるけど	初蝶や
556	50	469	409	11	359	145	470	547	82	459	270	522	334	402	523	335	336	42	43	136	
昼迄は	昼がほが	ひらき牛房	鶉の	ひよつとして	雛まつり	独に成て	一夜く	人まじり	一舟に	人なしと	人となる	一すちの	ひぢ笠の	柊や	【ひ】	春を待	春の日は	はるの日に	春の風	春のうみ	春尽ぬ
92	533	9	538	87	567	498	456	21	217	80	452	427	580	376		390	46	47	557	52	572
ふはくと	降かゝる	ふらすこに	芙蓉の花	冬の山	冬の春	冬の月	冬の雨	瓢の中ぞ	枕の上に	冬籠り	冬木だち	冬川の	舟のりの	ふところな	仏檀の	扶持米や	更行や	福わらや	梟や	吹たびに	吹おろす
340	333	163	242	299	380	369	322	330	332		298	300	39	98	189	549	234	412	312	194	430

松笠や	町はけふ	貧しきも	まさなごと	孫めらに	米珠や	【ま】	月出になかぬ	こゑやわか葉の	青竹をわる	ほとゝぎす	螢火で	櫓の火に	ほかされて	山の山がつ	奥は宗旨の	蓬萊の	【ほ】	返報に	行厨の	【へ】
324	352	386	14	534	45		125	122	123		133	364	374	407	423			481	542	
みち草や	みだれては	未醬豆の	未醬とり	見せばやな	水やそら	水涸て	酒にするほど	うしろに春の	湖を	湖は	湖の	水うみに	御かぐらや	【み】	まん歳や	松の香や	松の音	松のうち	松とりて	松風の
36	132	373	581	238	219	321	363	564		252	63	33	362		451	440	414	8	19	310
めいわくや	雪ふみ落す	桜の林	名月や	うしろ戸明る	あくる朝日も	名月の	【め】	むら雨や	虫けらの	むし聞に	向ふにも	むくつけき	麦の穂や	麦粥に	【む】	見よがしに	蓑虫の	身の秋や	みどり子の	三つ栗や
69	214	213		537	215			205	329	207	284	485	577	570		24	305	288	148	437
山ざくら	山川や	山人の	薺ぬしや	薺中や	薺草の	【や】	門外の	守山や	桃のさく	紅葉てふ	ものよみに	もの音や	商ひ初	鵲の来て	もし蓮の	もし月の	【も】	暉の	めたくと	珍しき
70	343	265	41	167	27		23	371	100	488	54	103	12	254	377	225		482	345	576

付 記

本稿は、科学研究費助成事業「近世後期京都俳壇における芭蕉顕彰資料の収集と研究」（課題番号 17K02474）の成果の一部である。

また、立命館大学アート・リサーチセンター 文部科学省 共同利用・共同研究拠点「日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点」二〇一八年度共同研究「花供養をめぐる近世後期京都俳諧の研究」の成果の一部である。なお、成果の一部はWeb公開中である。

<http://www.arc.critsume.ac.jp/lib/rarebook/2/3/post-48.html>

本稿を成すにあたっては、野風呂記念館、西尾市岩瀬文庫、並びに高木晶子氏、小林孔氏、永井一彰氏の学恩を賜りました。記して深謝申し上げます。

野風呂記念館本『古巢発句集』影印翻刻と解題

——付 西尾市岩瀬文庫本『古巢発句集』校異——

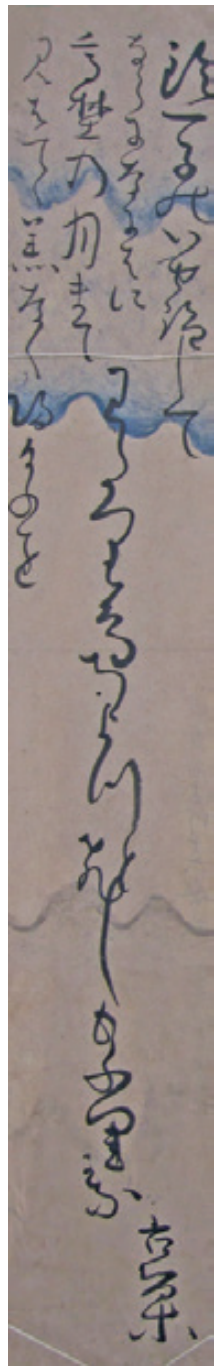
発行日 平成三十一年三月二十日

編・著 立命館大学〔非〕講師
竹内 千代子

印刷 株式会社 昭英社

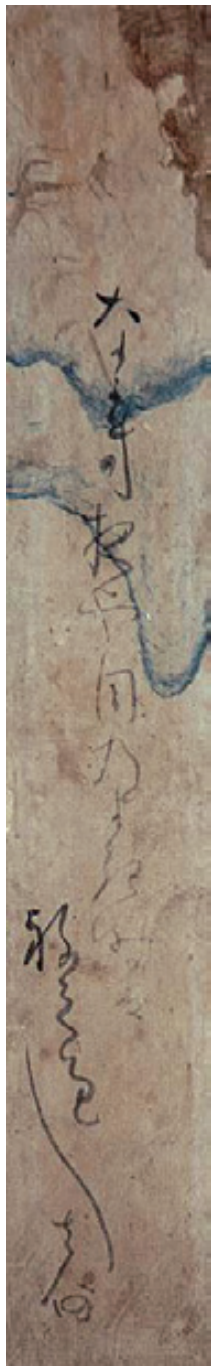
〒六〇〇八二九

京都市下京区五条通河原町西入本塩竈町五五八
電話 〇七五―三五一―八一一



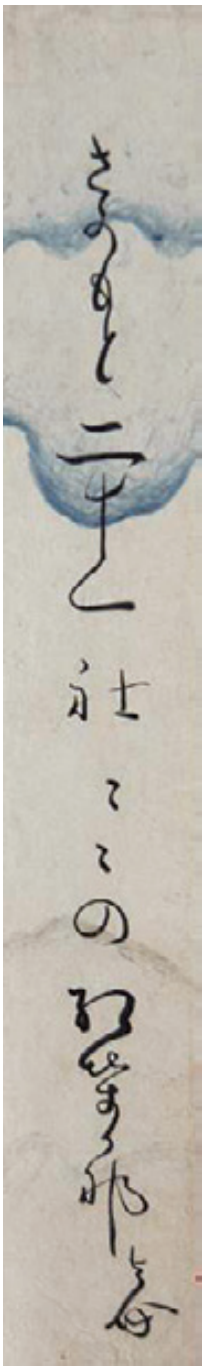
わたり鳥ちよつと飛しも千里かな 古巢

個人蔵



なかき夜や目のよき時はねて過し 去何

個人蔵



さかもと 二十一社々々の紅葉かな 去何

個人蔵